

---

# ブレス【breath】

徳次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブレス【breath】

### 【Nコード】

N6253C

### 【作者名】

徳次郎

### 【あらすじ】

彼女は生きる為に週に一度死ぬ。澪<sup>みお</sup>の友人から聞いたその言葉は、  
「いったいどういう意味なのか。北原省吾が一目惚れした隣駅の高校に通う南澤澪<sup>みなみさわみお</sup>。明るく彼女が時折見せる果敢な横顔に、いったいどんな秘密があるのか。省吾を密かに想うクラスメイトの愛香は父親の勤める病院で奇妙な噂を耳にするが……」

## 【プロローグ】（前書き）

タイトルの「ブレス」は呼吸や吐息、息使いの意味です。  
僅かなサイエンスフィクション（SF）も取り入れた恋愛ですが、  
あくまで現代小説です。

## 【プロローグ】

漆黒の闇に輝く無数の青白い光は、呼び起こされたタナトスが見せる最後の絶景。

今は白昼のはずなのに夜空の星が見える。

満天の星が瞬く姿なんて、東京では見えるはず無いのに……

ブレスは沈黙し、あまりの静寂に微かな耳鳴りがする。

不自然なほどの静けさ……

それは鼓動が消えたから。

自分の鼓動が聞こえないと言う事は、この瞬間は生きていないと言う事なのだ。

生きていなと言う事は、死んでいるに違いない。

1分20秒……彼は確かそう言った。

脈を打たない身体はあつという間に体温を失い、魂は凍える。

まるで氷の世界にいるようだ。

ここは本当は南極なのかもしれない。それとも北極？

だから満天の星空の向こうには、ライムグリーンから淡いバイオレットにグラデーションを描くオーロラの輝きも見えるのだ。

1分20秒間のオーロラを見あげて、鼓動すら聞こえない生と死の狭間に佇む魂は、まるで永遠だ。

心臓の鼓動を示すモニターの波形は何処までも真つ直ぐな線を描いて、単調な途切れのない長音だけを発している。

青白い無影灯の光が照らし出す診察台の上には白い少女が横たわり、胸元を露にしていた。周囲には必要最低限の機器類が機能的に配置されている。

男は腕に嵌めたロレックスのクロノグラフで正確に時間を読み取る。

「よし」

除細動器 じょさいどうき 心肺蘇生装置の電圧を上げると、キユイイイイと唸りを上げて液晶モニターの数値が上がる。一般救命に使用される携帯用のものではなく、病院に装備されているドクター用のものだ。再び時計を見ると、滑らかに振動して走る針は1分20秒に差し掛かるうとしていた。

右手を心臓の下部へ、左手は右乳房の上、的確に位置を定めると両方の電極パッドをいつきに白い肌へ押し当てる。

バチンッ。

一瞬の放電に空気が震え、横たわる少女の身体が微かに跳ね上がる。

しかし心拍計に動きはない。

静寂の中に、心停止を示す途切れの無い長音がただ響いている。

男は顔色一つ変えずに再び器機に電力をチャージして、チラリと時計に目を配る。

心停止から1分30秒が経過していた。

電圧がチャージされる機器の唸る音が微かに響くと、モニターにオンラインのサインが点灯する。

再度、白い肌に電極パッドを軽く当てる。

バチンッ。

放電する音と共に再び少女の身体が跳ね上がると、心拍計が歯切れの良い音をたてて波動を蘇えらせた。

「よし……」

男は微かに浮いた額の汗を、両腕で拭った。



## 【1】通学電車

庭木がバサバサと不気味な音をたて、空き缶は通りを激しく転げまわり、窓を叩く雨音があまりにうるさくて、なかなか寝つく事が出来なかった。

電線を抜ける風きり音が、恐竜の唸り声のように響きわたり、風圧で時折ボツと音を出して窓ガラスが歪む。

大型の台風が東京を直撃しているのだ。

どうにも落ち着いて眠りに入り込めないから、結局一度消したテレビを再び点けて布団に入る。夜通し流れるニュース番組も、外から聞こえる騒音よりはましだ。

それでも台風は、無事明け方には通過したようで、朝起きると湿った風が少々強かったが、空は青々と晴れ上がって庭木に鳥の囀りが聞こえていた。

台風一過は過ぎ去る夏の日々を、爽やかに、そして果敢なげに見送る。

北原省吾はベッドから起きてキッチンへ行くと、インスタントコーヒーを作ってトースターにパンを放り込み、窓を少し開けた。一瞬、ビュウという音がして、心地よい風が舞い込んでくる。

通りに行く小学生の戯れる声が聞こえてきた。毎朝妙に早い時間にここを通る子供たちだ。

携帯電話を左手で開きメールをチェックすると、橋木裕也からメールが入っていた。それと、一昨日池袋のカラオケ館で知り合ったミナとケイコ。

どれもたいした用件ではない。暇な合間に送って来たのだろう。だいたい、朝一にメールを送る気がしれない。起きがけでもう誰かに相手をしてもらいたいのか？ 省吾はその辺の感覚は今時ではないのかもしれない。

冷めている。という訳でもない。ただ、母親と二人暮らしの長い

彼は、小学校高学年頃から朝起きると一人で、学校へ行くまで誰とも言葉を交わさないのが普通だ。

そんな習慣の長かった省吾には、携帯を持った途端に朝一で誰かから声がかかっても、直ぐに返信する気力が生まれない。

だから、修学旅行などで友人達と一緒に迎える朝は、密かに苦痛でもあった。

まあ、メールは何時でも返信できるし言葉を発する必要も無いので、来る分には苦にはならないが。

トーストを齧ってコーヒーを飲んでひと息つくと、とりあえずメールに返信する。

左手で携帯のキーを操作する彼の仕草は、友人の裕也に言わせると『奇妙』なのだそうだが……

適当に言葉を打ち込んで送信ボタンを押す。何でもいいから返信しておけば、それで縁は繋がるのだ。

制服に着替えて鞆を肩に掛けた省吾は、玄関のドアを開けた瞬間それが強風で外に持つていかれ、一瞬「うわっ」と声を上げる。

何だか思っていた以上に風は強かった。

外に出た途端にキヤラメルブラウンにカラーリングした髪の毛は、一方方向に煽られて頭皮が引つ張られる。

玄関を出てリビングとは反対側に位置する和室の縁側に目が留まった。そこに置いてあった赤いポリバケツが無くなっている。

昨日までは確かにあったから、おそらく台風の風で何処かへ飛んでいたのだろう。

自転車、大変そうだな……省吾はそう思いながら物置の陰からA.T.Bを取り出す。駅までの方角は、向かい風だった。

いくらペダルを踏み込んでもなかなか進まない自転車でようやく駅に着くと、階段を上がりながら髪の毛に何度も手グシを入れる。

ファイバーWAXを着けた髪の毛は、風に煽られた形状を維持しようとするのだ。

慌しい朝の喧騒の中を縫うように、足早に改札を抜けてホームに

降りる為の階段を下る。すると、女子高生が何だか階段の途中でたむろしていた。

他の通行人には少々邪魔になるが、彼女達にはそんな事は関係ないのだろう。

何だか解らないが、その横を通ってホームに出ると、直ぐ目の前にいた娘のスカートが強風に煽られて大胆に捲れ上がった。慌てて押さえるが間に合わない。

その向こうでは二人組みの、同じく女子高生がスカートを押さえながら奇声を発していた。

……そうか。こうなるからさっきの連中は四方が囲われた階段の所に集まっていたのだ。

早起きはしていないが、なんだか三文ほど得した気分で省吾はそんな事を思った。

彼は何食わぬ顔でその場を通り過ぎると、いつもの立ち位置へ向う。三両目の一番前のドアと、毎朝乗り込む場所が決まっているのだ。

降りる駅で階段に近いからなのだが、二両目の一番後ろのドアが本来一番近くに当たる。ただ、混雑に巻き込まれるのが嫌で、少しだけずらしているのだが。

直ぐに電車がホームへ入って来て、目の前で開いたドアから省吾は車内へ乗り込んだ。

大河に流されるように毎日がなんとなく過ぎてゆく中で、ずいぶん前からその場所に乗るのがちよっぴり楽しい。

朝の登校という、一日でもっとも憂鬱なひと時が僅かに癒される。省吾は朝の下り電車で学校へ向う為、車内は上りほど混み合っていない。

どこから乗ってくるかは知らないが、その娘は同じ車両のひとつ隣のドア近辺に何時も立つ。

省吾の高校は二駅目だが、彼女の学校はその先、隣駅にある女子高だという事は知っている。

夏服は水色のブラウスにグリーンのタータンチェックのスカートだが、冬服のキャメル色のブレザーはかなり目立つ。

黒い髪は三つ編みのお下げにしている所を見ると、意外に校則が厳しいのだろうか。時折友達らしき娘と一緒にだが、その娘も真っ黒な髪の毛を肩の上で揃えた地味な、というかやっぱり清楚な印象を受ける。

少し距離が在る為、彼女達の話し声はほとんど聞き取れない。

始業式の日に見た彼女の友達は少し日焼けしていたが、彼女自身は変わらず白い肌のままだった。

それは、残暑の陽差が差し込む車内で、微かに乱反射するほどの白だった。

本来省吾はもう一本遅いギリギリの電車で学校へ通っていたが、春の豪雨で電車が遅れていた時にたまたま一本早いはずの車両に乗った。

そこで彼女を見かけたのだ。

一目惚れ……そんなものが本当にあるとは思わなかった。

もう一度逢いたかった。

翌日、彼は確かめるように一本早い電車に乗ると、やっぱり彼女はその車両にいた。

夏休みに彼女の家を探索しようとも思ったが、なかなか帰りの電車で一緒になる事がない為、彼女がどの駅から乗ってくるのか判らない。この沿線に住んでいるとも限らないのだ。

そうこうしている内に試験休みに入ってしまった、この夏休み明け、彼女と再び会えるかどうかが不安でもあり楽しみでもあった。

しかし今週初めの始業式、彼女は夏休み前と同じ電車で同じドアの近くにいた。

彼は二駅だけの約十二分間、窓の外を眺めるように佇むその娘を見て過ごす、何時もの駅を降りて学校へ向った。

「シヨウ、ミナちゃんとかからメール来たか？」

教室へ入るなり橋木裕也はしきゆつやが声をかけて来た。

親しい仲間は省吾の事をシヨウと呼ぶ。裕也は電車とバスを使つて登校しているが、バスの時間の関係で省吾と同じ路線電車を利用するにも関わらず、彼よりも大分早い時間に学校へ着く。

登校時間だけ見れば、かなりの優等生だ。

「ああ、今朝来てたな」

省吾は一番後ろに在る自分の机に鞆を置いて椅子を引いた。

女子を挟んだ窓際の一番後ろの席に裕也はいる。椅子を後ろに傾けながら省吾に話しかけていた。

「おっしやあ、今日当たりブクロで待ち合わせつての、どう」

「ええ、俺はいいよ」

「何でだよ」

「いや、別に。ていうか、めんどくせえ」

「何だよそれ」

裕也が落胆した顔を見せた時、教室の扉が開いて先生が入つて来たので二人の話は一端区切られた。

省吾にしてみれば、電車で毎朝に会う彼女に何とか近づきたい。そう思うと、他の娘にわざわざ会いに出かける気が起きないのだ。

この前はたまたまカラオケ館の建物の中で知り合つたから裕也と一緒に声をかけたが、わざわざ出向くような事ではない。

「あんたたち、またナンパしてたの？」

省吾の前の席にいた神崎愛香かんざきあいが振り返って、小声で言った。

夏の旅行で焼けた肌は、まるでヒサ口で焼いたようにほんのり小麦色でキレイだし、頬にかかったストレートの茶色い髪の毛は、他の誰よりも艶やかだ。

ホームルームは、どうでもいい連絡事項が担任教師の口から勝手に発せられて教室に流れている。

「また。って、なんだよ。率先して声をかけるのは裕也だぜ。俺は何時も巻き添えをくうんだ」

省吾も机に前のめりになって小声で返した。

「ハイハイ」

愛香は肩をすくめると長い睫毛を瞬きさせて小さく失笑して、前に向き直った。

昼休み、裕也は食い下がらなかった。

「なあ、行こうぜショウ」

「お前一人で行けよ。ミナとケイコのどっちかは決まってるんだろ」  
「最初はやっぱり合同でさあ。さっきメールで話したら、彼女らがそう言ってたんだよ」

「しょうがねえな。俺、適当なところでフケるからな」

押し負けた省吾が肩をすくめると、裕也は無言で笑みを浮かべ、ガッツポーズをとった。

「どうしたの、陽子」

「頭痛がさあ」

「あたし、クスリ持つてるからあげるよ。薬局のより強いから半分だけ飲みな」

愛香がそう言って陽子に粉薬を渡す。

二人のやり取りを遠目に見ていた省吾は

「何で愛香のやつ、市販じゃないクスリなんて持つてるんだ？」

「ああ、アイツの親父は大学病院の何とか部長でさ。その関連だろ」  
省吾は以前から愛香とは知り合いだった。親しくなったのは三年になってクラスが一緒になってからだ。それに比べ裕也は去年も同じクラスだった。

神崎愛香の父親は、彼が言うとおり都内の大学病院で外科部長をしている。

「でも、関係者だからってクスリ持ち出せるのか？」

「知らないよ。俺に聞くな」

省吾と裕也の話し声を聞いた愛香は二人に近づいて来ると

「あんた達にもクスリ分けてあげようか？」

そう言ってから、クスツと笑って「ああ、脳に効く薬はまだないんだった」

「うるせえな」

省吾はそう言って、窓の外に視線を向ける。

「裕也はエロいのが治るクスリ？」

「そんなのねえだろ」

「あ、でも欲情を抑えるのはあるらしいよ。アメリカで性犯罪者に使ったって」

「誰が性犯罪者なんだよ。俺のは抑えなくていいんだよ」

裕也はポンツと省吾の机の上に飛び乗るように腰掛けた。

「でも、頭痛とかあったら言ってね。保健室のよりは効くからさ」

「そんなクスリ持ち出していいのか？」

省吾は自分の席から愛香を見上げた。

彼女は整った眉をピクリと動かして

「だって、ただの鎮痛剤よ。それにちゃんと処方せんとして手続きしてるから平気よ」

省吾と裕也は思わず顔を見合わせた。

その処方せん自体が違法なのでは？ 何気にそう思った二人だが、口には出さなかった。

## 「2」人助け

放課後、省吾は裕也に付き合って池袋まで足を伸ばさなければならぬ。何となく気乗りしない彼の足取りは重かった。

「なんだよシヨウ。二人共まあまあ可愛かったろ」

「そうだけど……」

別に女の子と遊びたくないわけじゃない。

ただ何となく、電車に乗って自分の家を通り越してまで、そう親しくも無い娘に会いに行くのが面倒なのだ。

ホームに入って来た電車に乗り込む省吾の足が、途中で止まった。車内に彼女がいる。毎朝会っお下げのあの娘だ。

彼女の視線が一瞬省吾を捉えた。

そのコンマ何秒かの中で、彼は彼女に笑いかけるか迷い、彼女の視線の意味を探った。

しかし、再び彼女の視線は窓の外に向けられて、省吾と裕也は反対側のドアの前に立つ。

帰りはほとんど彼女を見かける事は無く、久しぶりに一緒に電車に乗り合わせた。

「なんだよ、どうした？ シヨウ」

落ち着かない省吾を裕也が察した。

「あ？ ああ、なんでもない」

省吾はそう言って、彼女を視界に捕らえておく為に立ち位置をさり気なく変えた。

……ちようどいい、これで彼女の降りる駅が判るってもんだ。

「でもって、この前一樹がよ……」

省吾は止め処ない裕也の話に、適度に笑って適当に相づちを打つ。視界の隅で捕らえた彼女が気になった。

降りる駅を見逃してなるものかと、半ば必死だった。

左側に立っているという事は、おそらく上り電車で左に降りる駅

なのだろうと察しはつく。

午後の上り電車というのかもしれないが、各駅で降りる学生と同じ分量の学生が再び乗り込んで来るので、車内の人的密度は何時まで立っても変わらない。

やたら大声で喋る女子高生が乗り込んで来たかと思うと、次の駅で降りていった。

練馬を過ぎた所で、省吾は多少の不安を感じた。

……彼女はそのまま池袋まで行くのでは……同じ沿線に住んでいないかもしれないと思うと、彼女の姿がやけに遠くに感じる。

江古田の駅に電車が着いた時、彼女の体が動いた。

停車の振動に身体が振られたわけではない。足を半歩踏み出したのを省吾は確かに捕らえていた。

しかしその瞬間、ふっと彼女の身体は不安定に揺らいで、そのまま崩れ落ちた。

「あつ」

何も気付いていない裕也を横目に省吾は思わず彼女に駆け寄った。

「おい、シヨウ。なんだ？」

裕也は突然慌てて動き出した省吾の姿を目で追う。

周囲にも人はいたが、一瞬何が起こったのか判らずただ呆然と見ている人がほとんどで、振り返ってその状況を見た裕也もまた、その中の一人だったのだ。

「お、おい。大丈夫か？」

抱き起こす省吾の腕をたどどしく、何かにすがりつくように彼女は力なく掴んだ。抱えた肩が思いの外細くて、力を入れたら壊れてしまいそうに思えた。

彼女は目を強く閉じて何かを堪えている感じだ。

貧血だろうか……こんな感じで倒れた女子の姿を、以前学校で見た事がある。

「とにかく一端降りよう」

発車合図のメロディーを聞いた省吾は、足腰に力を入れると思い

切って彼女を両手で抱き上げて江古田のホームへ降りた。

「すみません、女の子が倒れたんですけど」

一緒に降りた裕也が、近くにいた駅員に駆け寄り声をかける。足取りに揺れる彼女の顔を省吾がチラリと見た時、微かに開いた睫毛の奥で潤んだ瞳が一瞬見えたが、それは何かを捉える間も無く再び閉じる睫毛の中に消えた。

苦しそうな吐息が、僅かに聞こえる。

とりあえず駅員室へ運んで、長椅子に彼女を横たわらせた。

「救急車呼んだ方がいいのかな？」

「意識はあるみたいだよな」

若い駅員が不安げに小声でそんな話をしている。

「おい、お前知ってる娘なのか？」

裕也は省吾の行動を不審に思っただけで彼の身体をつついた。真っ先に彼女に駆け寄って、躊躇することなく抱き上げたからだ。

「いや、ああ……見た事はある。朝の電車でよく会った」

「何処に住んでるんだ？」

「そこまでは知らない」

「なんだよ。役にたたないなあ」

「だから、朝に電車で会うだけで、話した事は無いんだよ」

省吾と裕也は、どうしたものかと息をついて、長椅子に横たわる彼女を見下ろした。

とりあえず濡れタオルを額に乗せたのは、最初に声をかけた若い駅員だ。

「あれ、彼女。また倒れちゃったの？」

後から年配の駅員が現れた。真っ黒な太い眉毛ときよろりとした大きな目が印象的で、太っているほどではないが、何故か制服の腹の部分が異常に張り出てボタンがキツそうだ。

「加治木さん、この娘知ってるんですか？」

若い駅員が訊く。

「ああ。彼女、南澤病院の娘だよ。前にも何度か倒れた事があるん

だ」

「そんなにしょっちゅう倒れるんですか？」

省吾は思わず口を挟んだ。

「いや、そんなに頻繁ではないが……ん？ キミらは？」

省吾と裕也の二人を見た加治木が、怪訝な笑みを浮かべて太い眉を動かした。

「あつ、彼らがこの娘を運ぶのを手伝ってくれたんです」

若い駅員が言った。

本当は運んだのは省吾で、それを手伝ったのが、若い駅員なのだが……

「病院は、近いんですか？」省吾が続けて訊く。

「ああ、住宅街を抜けた大通り沿いだし、自宅はこの先の住宅街にある。とにかく連絡しよう」

加治木は電話を手にとると、とりあえず南澤病院へ電話をした。

省吾と裕也はその様子を見ながら、初めて入った駅員室を見回す。事務机が並び、壁際の戸棚にはビッシリとファイルが入っている。時間に厳格な職場のせいか、あちこちに時計が置いてあった。

「彼女は知り合いかい？」

電話を切った加治木が省吾に訊いた。

「あ、いえ。電車でたまに見かける程度でよくは」

省吾は曖昧にぼかして答えた。何時も見ている娘だとは言えない。彼女の事は何も知らないのだ。

「じゃあ、後は我々が責任をもってご両親に引き渡すから、キミらは帰っていいよ。ご苦労さんだったね。協力を感謝しますよ」

加治木は目じりにシワをよせると大きな目を細めて笑顔を振り撒いた。

「彼女、何か病気なんですか？」

省吾は駅員室を出る間際に振り返って、加治木に訊いた。

「私もよくは判らないんだ。とりあえず今の状態は命に別状はないらしい。直ぐにお兄さんが迎えに来るそうだ」

省吾はなんだか後ろ髪を引かれる思いで駅員室を出ると、名残惜しそうにドアの窓から奥で横たわる少女を見たが、裕也に促されてゆっくりとホームへ戻った。

「ヤバイ、約束の時間過ぎてるぞ」

裕也がホームの時計に目をやって呟いた。

二人はさっきバイブレーションしていた携帯を取り出して、ほぼ同時に開く。

『他に遊ぶ奴見つけたから。 Bye 』

素っ気無いメールが二人の携帯に入っていた。

### 【3】思案

「ちきしょう、昨日は惜しい事したよ」

翌朝一番で顔を合わせた裕也が未練がましく呟いた。

「仕方ないだろう。人命救助だ」

「そんな事言つて、お前彼女の事ずっと見てたろ」

「そんな事ねえよ」

「彼女狙つてるのか？ あれつて確か南高の制服だよな」

「いや、狙うとか、そんなんじゃないけど」

「ウソつけ。お前、ああいう清楚な娘タイプだろ」

図星だった。高校に入つて直ぐから付き合いのある裕也には、省吾の好みは判るのだ。

「でもよ、確かに可愛かつたな。何だか夏も全然遊んでないってくらい白かつたよ。彼女」

裕也はそう言つて教室の窓に寄りかかった。

「誰が全然遊んでないの？」

ほんのり小麦色の肌をした愛香が声をかけて来た。

「いや、愛香には関係ないよ。男同士の話さ」

裕也はわざと彼女を突き放すような言い方をして、意地悪そうに笑つた。

「そう言えば、彼女の家開業医だつて言つてたな」

「だれだれ、開業医つて。お金持ちじゃん」

裕也がポツリと言つた言葉に、愛香は益々食いついてきた。

「お前ん所だつて医者だろ」

省吾が言つた。

「ダメよ。うちのお父さんは所詮月給取りだもん。開業医には及ばないわ」

「へえ、そうなの？」

裕也が逆に興味を示す。

「だって開業医って言えば自営業よ。保険適用分が国からガツポリ入るじゃない」

愛香は裕也の隣の窓に寄りかかると

「まあ、何かあったら潰れるのもあつという間だけど」

そう言つて悪戯っぽく笑う。

裕也は省吾を見て逆玉狙いか？　と言わんばかりの意味深な笑みを見せた。省吾はそれを受けて、無言で否定の視線を返す。

愛香はそんな二人を交互に見ると

「で、誰の家が開業医なの？」

省吾はあの娘の事が気になっていたが、あえて江古田へ出向くような事はしなかった。

きつと大きな家だろうから見つける事は可能かもしれないが、いざとなると何だかストーカーまがいで気が引ける。

あれから二日が過ぎたが、あの娘はまだ朝の電車で見かけない。

そう言えば、以前にも何度か彼女を見かけなかった事があるが、その時が倒れた時なのだろうか……

省吾は電車を待つ駅のホームでそんな事をぼんやりと考えていた。裕也はリーダーの補習を夏休みにサボったので、今日から一週間居残りらしい。

愛香はあれでも吹奏楽部でフルートなどを吹いている。三年生は夏で終わる部活もあるが、吹奏楽部は秋のコンクールまで三年生も参加するのだ。

ホームに入つて来た電車を呆然と見ていた省吾は、窓から覗く車内の情景に鼓動が高鳴る。

……彼女だ。朝はいなかったのに。

彼女も省吾を見てハッと顔を強張らせた。

彼女は自分を知っているのだろうか……思わず抱き上げてしまった自分を……

グンツと音を立てて車両のドアが一斉に開いた。

省吾はゆつくりと車内に足を踏み入れる。

心臓の鼓動が早鐘のように打っていた。気を失いかけていた彼女を抱き上げたのだ。

考えればそれはあまりにも大胆な行為。今思えば彼女の顔が至近距離にあった。

彼女の身体の重さを思い出した。初めて抱き上げた女性の身体は骨格が細く予想以上に軽くて、全身に力を込めた自分は拍子抜けした。

「あ、あの……」

気がつくと彼女は省吾のすぐ傍まで来て、上目使いに彼を見上げている。

「えっ、はい？」

省吾は慌てて言葉を返す。

「あの……この前、江古田の駅で……」

その先の言葉は消えていたが、それだけで彼女が自分を認識していたのだと充分に判った。

「あっ、うん。俺だって、判ってた？」

「ええ、薄っすらと顔と制服が……」

彼女は少々俯いた顔を上げると

「それに、何時も朝会いますよね」

そう言って小さく微笑んだ。

どうやらほとんど毎朝会って省吾を彼女も認識していたようだが、それを意識していたかどうかは解らない。

逆玉……開業医イコール金持ちの娘……何故だかそんな余計な事ばかりが頭を過つて、省吾は思わず頭を振つた。

「あ、あたし、南澤みなみさわ漣」

「あ、俺……北原省吾」

自分で自分のフルネームを言うのは妙にくすぐったい気がした。おそらく彼女もそうだったのだろうか。お互いにちよっぴり頬を

紅潮させて、笑顔を交わした。

「この間はあるがとう。ちゃんとお礼言わなくちゃって思ってた……」  
「いや、いいよ。お礼だなんて」

何となくギクシャクした会話が飛び交う。

その後、簡単な雑談だけで、すぐに省吾が降りる駅に着いてしまった。

「俺、厚揚げが好きなんだよね」……どうしてそんなくだらない事を言ったのか、省吾は電車を降りてから、車内から小さく手を振る澪<sup>みお</sup>の白い笑顔を見ながら酷く後悔した。

もつと気のきいたカツコイセイフがどうして出てこないのか……そんな省吾のくだらない話題にも彼女は「なんか渋すぎ」と笑った。

「あ、でもあたし、どら焼き好き。コンビニとかでもよく買っちゃうから、友達に『澪は未来の国から来たんだろ』って笑われるの」  
彼女は省吾につられる様にそんな事を話した。

会話自体は楽しかった。しかし……他に訊く事があるだろう。話すことがあるだろう……省吾は自分の口下手加減に呆れた。

彼女は何処か身体が悪いのだろうか。

時々倒れるなんて、何だか心の中に灰色の不安が過る。

しかし省吾はこつも考えた。

下手に身体の具合の事を訊いたりして、滅茶苦茶ヘビーな病気だったらシャレにならない。そう言う事は訊かなくて良かったのかも知らない。

そうだ、今度会った時も、体調の話はしない方がいいだろう。

もっと親しくなれたとしたら、それは自然に判る事かもしれない。省吾は自分なりの答を胸の中で呟くと、駐輪場から取り出したA T Bに乗って軽やかにペダルを踏んだ。

僅かな不安とは裏腹に、何だか妙にペダルが軽くてギヤを2段あげた。



#### 「4」寄せる想い・1

鉢植えのポトスに霧吹きで水を吹き付けると、窓から差し込む陽光に散乱した水の粒子がきらきらと反射して光の輪を描く。

晴れ渡る碧空そらに白色にかすれた雲が薄っすらと浮かんでいる朝、省吾は少しそわそわした落ち着かない気持ちでトーストを頬張る。

何だか判らないモノが喉に<sup>つか</sup>ちかちかしている様な感じがして、上手く飲み込めない。

気を紛らわしたくて、普段は滅多にやらない窓際の観葉植物に水を与えてみたりする。

昨夜は学校帰りの興奮が続いて、ぜんぜん寝付けなかった。

まさか彼女と話が出来るとは思いもしなかった。

助けた時はその後の見返りなんてもちろん考えていなかったし、意識の薄れた彼女が自分を認識しているとも思わなかった。

省吾は昨日の帰りの電車の中、十二分ほどの間濡と話したただけなのに、興奮が何時までも冷めなかった。そして、今朝は新たな緊張が全身を取り巻いて筋肉や関節をギクシャクさせる。

これから再び彼女に会うのだ。いや、絶対ではないが、確信はある。

彼は玄関の鍵を締めると、A T Bに跨って駅へ急いだ。

照り付ける陽差は暑いが、少し乾いた風が頬を撫で上げて心地いい。

駅のホームへ降りると、電車の影が遠くに見えた。既に心臓の鼓動がうねる様に高鳴って、膝に力が入らない。

……裕也と一緒に、誰に声をかけてもこんな事はない。もちろん、ヘラヘラと喋りの技を披露するのはもっぱら裕也の役目だが、クラスの娘と話しても全然何も感じないのに……

自分が思いを寄せていた娘だからこんなに緊張するのだろうか。

省吾はそう思いながら駅のアナウンスを聞いて、ゴクリと唾を飲む。

とその場で一度だけ屈伸をする。

聞き慣れた騒音を風に響かせながら、ホームへ滑り込んできた車両の動きがピタリと止まる。

……いた。省吾は窓の外から素早く彼女の姿を見つけたが、見えていない振りをする。

彼が車内に入ると、漑が遠慮気味に胸の前で手を振って笑った。

彼女は何時もの立ち位置ではなく、省吾が乗り込むドアの横にいた。

省吾はさり気なく……自分ではそうしたつもりでいる。とにかく彼女の隣に立って吊革に手を伸ばした。

「おはよう」

漑が彼を見上げて笑った。昨日の帰りに初めて話をしたとは思えないような、自然な笑みだ。

「お、おはよう」

省吾はそれとは対照的な少しぎこちない笑顔で、直ぐに返す。

「今朝ドライバーから煙が出てね、マジやばかった」

漑は直ぐに喋りだした。何かを話さなくては、という気持ちはあるのかもしれない。

「もう、微妙に半乾きでさ」

そう言って、自分のお下げの先を指で掴んで揺らすと、蒼リングのような穂の甘い香りが省吾に届いた。

約十二分間……それは、他愛もない話をするにはあまりも短い。

話したい事がありにもありすぎて、しかも頭の中で準備していた話題も切り出せずに結局彼女の話聞くだけで終わってしまう。

「じゃあね」

駅へ降りた省吾に、漑は明るく手を振る。

周囲の視線に少し照れながら省吾も軽く手を上げて返すと、彼女の乗った車両が完全にホームを出たのを見てから、階段に向った。

……何でもつと話せないんだろ。二駅なんてあつという間で短すぎる。

彼女が帰りに何時の電車に乗るのかも訊けなかった。

部活はやっているのか？ いや、身体が少々悪いならば運動部ではないだろう。

それにしても、帰りの待ち合わせくらい出来ない自分が情けない。こんな事を何度繰り返しても、彼女との関係に進展があるとは思えない。

そして省吾はふと気付いた。

携帯番号とメルアド……それさえ聞き出せば何時でも会話できるではないか。電車の中以外で会える約束も出来る。

しかし彼女に携帯番号なんて訊けるのか？

省吾は学校に着くまでの間にひたすら思考を巡らせて、途中コンビニに寄って飲み物を買おうと思ったのにすっかり通り過ぎてしまった。

昇降口で靴を履き替えていると後ろから声が聞こえた。

「見いちやたあ」

省吾が振り返ると愛香が立っている。整った眉と長い睫毛が笑っていた。

「な、なんでお前、今登校なんだよ」

同じ路線を使う彼女が今ここにいると言う事は、同じ電車に乗っていたのは明らかだ。

愛香はたいがい吹奏楽部の朝練があるので、普段は省吾よりもずっと早い時間に学校へ来ている。

「うん。今日は朝練休みでさ。もうすぐ秋のコンクールだから」

愛香はそう言うのと再び悪戯っぽい笑みを浮かべて

「ねえねえ、あの娘誰？」

「あの娘って？」

省吾はしらばつくれたように視線を他に向けて上履きを履くと、自分の靴箱に履いてきたナイキを押し込めた。

「じゃあねえ」

愛香は澄の清楚な笑顔と手を振る小さな動作を真似て見せた。しかし、この学校の校則が全く厳しくないせいで、茶色い髪とこ

っそり着けているマスカラが全く清楚なイメージには映らない。

「なんだよそれ」

省吾がぶつきら棒に言って歩き出すと、愛香は慌てて自分の脱いだローファーを靴箱に放り込んで、彼を追った。

「ちよつとお」

愛香は小走りに省吾に並んで

「あの娘、南高でしょ。ちよつときびしくない？」

「なんだよ、きびしいって」

「だって、あそこの偏差値、うちの倍だよ」

省吾は思わず立ち止まった。優秀な女子高とは聞いていたが、そこまでとは思わなかった。

いや、実際倍というのは、あくまで平均値を比べた場合であって、もちろんこの学校で成績優秀な愛香よりも低い偏差値の生徒が、南高にもいるだろう。

「そんなの関係ないだろ」

省吾が再び廊下を歩き出すと愛香も歩き出す。

「最初はみんなそう思うのよねえ。愛さえあればあ、とか」

彼女は顎を突き出して天井を見上げると「ねえ、何処までいったの？」

「なんだよ、何処までって？」

「もう付き合っちゃってるの？　それか、もっと進んだ関係なわけ？」

愛香は興味深々で省吾の顔を覗きこむ。

「いいだろ。どうだって」

「あつ、こりゃあ知り合ったばかり。って感じ？」

「うるさいな」

「ま、せいぜい撃沈されないようにね」

教室の前まで来た時、彼女は省吾の肩をポンツと叩いて開いたままのドアを先に入って行った。



## 【5】寄せる想い・2

下り電車が入ってくる音と共に、プラットホームの屋根からバサバサと複数の鳥の羽ばたく音が聞こえた。

……どうして鳩は駅の上に集まるのだろう。

省吾はホームの屋根越しに空を見上げながら電車を待っている。

『学園』と付く駅名通り、この駅を使う学生は多彩だ。

彼の学校の女子は全体にプリーツの入ったグレーに紺色のチエツクのスカートを履く。男子は無地のグレーのスラックスだ。

それとは違うベージュのバーバリーチェックのスカートを履く制服や、紺色の裾口に赤線の帯が入ったスカート。白いワイシャツに紺色のスラックス。

駅の反対側にも二つ高校が在るのだ。

ごく僅かに見るセーラー服は、おそらく私立中学のものだろう。

あとは、何か理由があつてこの駅で乗降する見知らぬ制服をポツリポツリと見かける。隣駅との微妙な距離にも、たしか学校は在るはずだ。

登校時間はサラリーマンやOLの数と半々くらいだが、下校時間は圧倒的に学生の姿がホームを埋め尽くす。

彼は到着した電車には乗らなかった。

澪の姿が無いから。

そう、省吾は澪が乗って来る電車を駅のホームでひたすら待つているのだ。

学校が終わって即行で駅へ来たが、もう五本も到着した電車をスルーしている。

澪が乗っていたらさり気なく偶然を装って乗り込むつもりでいたが、彼女の姿はいつこうに見えない。

到着した電車をスルーしている間に、同じ学校の友人や顔見知りになら「どうしたんだ？」と何度か声を掛けられて、その度に省吾は「

ちよつとな」と答えて彼らを見送った。

……さり気なく何時ごろに何時も帰るのか訊いて置くべきだった。しかし、そんな言葉が彼女の前では出てこない。

つい全く関係ない話題に走ってしまう。十二分という短い時間を有効に使うことなんて、今の省吾には出来なかった。

陽差は大きく西へ傾いて、線路脇の立て看板の影が長く伸びていた。

とにかく次の電車には乗ってしまおう。待っても無駄だ。そう思った時、後から声がした。

「よう、シヨウ。まだこんな所にいたのか？」

裕也が階段を下りて来た。今週いっぱい居残りしている、今日の分の補習が終わったのだ。

「補習終わったのか？」

「なんか、疲れたよ」

裕也はそう言って鉄柱にもたれ掛かると、途中のコンビニで買ったコーラのキャップを開けた。

「何だよ。どつか寄ってたのか？」

彼は、この時間にまだホームにいる省吾を不思議に思った。

「ああ、ちよつとな」

その時ちよつど電車がホームに入って来たのを見て、裕也は飲みかけのコーラのキャップを閉める。

無駄だと思いながらも、省吾の視線は条件反射のように車両の中にあつた。

しかし、停車寸前の車両の中に待ちわびた姿を見る。漣だ。

「あつ」

声を出したのは隣にいた裕也だった。この前電車で倒れた娘……そんな思いから声が出たのだろう。

漣も少し驚いた顔をしている。省吾に会わずの時間だと判

つていたのだろうか。

とりあえず電車に乗り込んだ省吾が軽く手をあげると澪も笑顔で応えた。

「あつ、何だ。俺の知らない間にお前ら……」

二人が交わす、少しぎこちない馴れ合いを見た裕也は、そう言つて省吾と澪の両方に視線を動かした。

「こいつ、友達の裕也。この前江古田では一緒だったんだけど」

省吾は澪に裕也を紹介した。

「こんにちは。もう一人誰かの影は見たんだけど……」

彼女は笑つて裕也を見上げた。視線を合わせた裕也は肩をすくめて「なんだよ、俺は影だけか」

そんな裕也を横目に省吾は

「ずいぶん遅い帰りなんだね」と、さり気なく切り出す。

「うん。運動会の実行委員になつちやつて。もう、最悪」

澪の視線は直ぐに省吾へ戻ってくる。

「じゃあ、しばらく遅いんだ」

「そんな事無いよ。毎日あるわけでもないから」

省吾は「じゃあ、明日は？」と訊こうと思った。どうせ、明日の朝会つても訊けるタイミングは無いかもしれない。

しかし、ちょうど裕也が

「いいねえ。女子高の運動会かあ」

会話に割り込んできた。

「でも、一般観覧は無しよ」

「なあんだ、残念。なあ、シヨウ」

「えっ、あ、ああ」

省吾は思わず苦笑して裕也を見た。

二つ目の駅で省吾、その次の駅で裕也は降りる。しかし、省吾は自分が降りる駅に着いてもその素振りを見せなかった。

自分が降りた後、ほんの一駅でも澪と裕也が二人きりになる事が不安だったのだ。別に裕也が澪にちょっかいを出すとも思えないが、

彼の事だ。あつという間に自分より和氣藹々《わきあいあい》の雰  
囲気を作ってしまうような気がして、それが我慢できなかった。

「なんだよシヨウ。降りないのか？」

省吾の素振りを見て裕也が言った。

「あ、ああ」

省吾は曖昧に返事をする。

「あつ、何だよ。お前らこれから出かけるのか？」

「ち、違うよ。そんなんじゃないけど」

省吾は慌てて否定しながら、漑を見る。

彼女は目をパチパチと瞬きさせながら、二人の会話する姿を見ていた。

「でもさあ、シヨウがまさか南高の娘をねえ」

裕也がそう言つて、片手を網棚にかけた。彼は身長が179センチと以外に長身だ。170センチと言っている省吾は本当は168センチしかないので、網棚に手を掛けるのは少々辛い。

少して再び電車が減速すると、裕也が降りる駅に着いた。

「じゃあな」

裕也は拳を省吾に突き出して「上手くやれよ」と言わんばかりに後ろ向きでドアから降りて行つた。

ガクンツと揺れて、再び電車が走り出す。

駅のホームが遠のいて、電柱が窓の外をビュンビュンと通過してゆく。空は緋色に変わり、遠くの景色はほの暗く霞んでいた。コンビニの看板は既に淡い電光を燈している。

省吾は窓に映った漑の横顔をマジマジと見つめた。

長い前髪は七・三に分けてヘアピンで留めている。必要以上にピンを使っているのは流行なのか、彼女たちなりのささやかなファッションなのだろうか。

二人きりになった途端、少々気まずい空気が漂ったが、漑は何時もの、と言つてもまだ二日目なのだが……笑顔で話し始めた。

「面白い友達ね」

「あ、ああ」

澪は窓の外をチラリと見て

「これから何処に行くの？」

ちよっぴり意味深な問いかけだった。

「えっ？ いや……澪は？ 直ぐに帰るの？」

思わず訊き返してしまった。

澪はほんの少し、僅かに表情を変えて省吾に視線を向けた。

「うん……その予定だけど……」

「じゃあさ、せっかくだから、どっか行こうか？ なぁんて……ハハハ」

省吾はあくまでも冗談交じりでおどけた風に言つと、空笑いした。

「本気で言ってるなら嬉しいけど……冗談ならちよっとシヨック」

澪は困惑した笑みを浮かべて応えた。

「えっ……いや、マジ、本気。滅茶苦茶本気」

彼女の思わぬ応えに、省吾は慌てて真面目な表情を作つて寄りかかつていた手すりから身体を離し直立した。

## 【6】寄せる想い・3

漣と省吾の二人は、なんとなく練馬駅で降りると街道沿いのアイスクリーム屋に入った。

空が暮色に染まる時間に、何処へ行くとも言えず、結局二人の乗降する駅の間で下りた感じだった。

「友達はシヨウって呼ぶの？」

漣は小さなスプーンでコーンに乗ったチョコミントを口へ運ぶ。

「ああ、そうだな。そう言えば仲のいい連中は、みんな『ご』を付けない」

省吾はそう言って、自分はスプーンを使わずにキャラメルプリンのアイスに齧りつく。

「じゃあ、あたしはシヨウちゃんって呼ぼう」

彼女は、既にそう決めた口ぶりで目を細めると、スプーンを咥えたまま省吾を見つめる。

「いや、別にいいけど……」

なんと返していいか判らない。

この日はアイスクリーム屋に入って、少し余裕のある雑談を交わしただけで省吾は充分満足だった。

店を出てから、少し通りを散歩して二人は駅で別れた。

心残りは、次の約束をしそびれた事だ。

まあいい。明日も会えるから、どうにでもなるだろう。

しかし省吾は、その後漣を土日も誘えないまま週明けまで、十二分間だけの短いデートから抜け出す事は出来なかった。

週明け月曜日。

朝、漣と電車で会い十二分間のデートを楽しむ。そして帰りも。彼女は見かけの清楚な雰囲気とは裏腹によく喋る。

ただ、ふと何処かを見つめる視線が物悲しいのは何故なのか……  
笑顔の似合う彼女の澄ました横顔は何処か果敢なげで、小さく瞬く  
睫毛すら哀愁が漂う。

そんな横顔を見てみると、手を握りしめてあげたくなるのだ。  
揺れ動く車内で微かに触れる手がもどかしくて、思い切って彼女  
の手を掴んだ。

それは、先週から何度も試みて出来なかった行為で、勇気を出し  
たと言うより、もはや我慢の限界がきたと言うべきかもしれない。  
漑は何も言わずに小さな手を握り返して、子供のように微笑んだ。

火曜曰。

朝、何時もの電車で会う。放課後、学校帰りに駅へ着いた省吾を  
漑が待っていた。

乾いた喧騒ばかりの殺風景なホームが、水色に輝いて見えた。

彼女は自販機で買って飲んでいた缶入りの紅茶を省吾に差し出して  
「飲みきれないから、後はまかせた」

彼は一瞬の戸惑いの後それを受け取り、さり気ない素振り缶に  
口を着けて飲み干した。

水曜曰。

学校帰り、省吾の降りる駅で漑と一緒に電車を降りる。

近くの公園のベンチでしばらく話をして、駅で彼女を見送った。

ようやく携帯番号を交換したが、何だかあまりに清い関係がもど  
かしく感じた。

……やっぱりこの先に進む為には、ちゃんとした告白が必要な  
だろうか。

木曜曰。

省吾の家に漑が来た。

母親が仕事から帰るのは夜の八時過ぎ。

澪は男の部屋に入るのが初めてらしく、あらゆるものに興味を示す。

水色のチェックのベッドカバーを見て「かわいい」と、やたら笑う。

黄昏に染まる部屋の片隅で、初めて澪とキスをした。

交わされる熱い唾液は、官能の小波さざなみとなって、省吾は彼女の細い肩を力強く抱きしめた。

ふと瞳を交し合った時、彼女の着けていた色つきリップが省吾の口の周りに付着していて、思わず澪は吹き出してしまった。

金曜日。

学校帰り、澪は友人と一緒にだった。

前に何度か電車で見たとのことのある娘だ。以前見た時は肩に着かなくらいのミドルの髪型だったが、耳がやっと隠れるくらいのショートカットに変わっていた。

「渚 英美ですう」

人懐っこい笑顔で彼女は笑うと

「澪は虚弱だから、よろしくお願いしますね」

「虚弱じゃないよ」

澪はそう言つて英美の身体に自分の身を当てる。

見かけは清楚な二人も、じゃれ合う姿はクラスの女の子たちと変わらない。

真面目ぶる様子も無ければ、成績優秀な学校を鼻にかける雰囲気もない。ただ、言葉使いは、省吾の学校ほど荒れていないかもしれない。

三人で二駅分一緒に過ごした。この前の裕也がいた時とは逆のパターンだ。

キスの先に早く進みたいという逸る気持ちを抑えて、彼は駅で澪と別れる。

土曜日。

漣の携帯に連絡を入れたが出る様子がない。英美とかと出かけているのだろうか。とりあえずメールを入れたが夜になってようやく返事が届いた。

何か用事があったと言っていた彼女に、省吾はそれ以上訊く事はない。

束縛するようで、追及するのは気が引けた。

日曜日。

漣と渋谷へ買い物に行き、池袋のパルコの屋上で夕方まで話をして過ごした。

周囲を取り囲むフェンスと風除けの板で高台からの景色は見えないが、蒼い空が少しだけ近くに感じた。

人目を忍ぶように、証明写真を撮るボックスの陰で甘酸っぱい初秋の風に吹かれながらキスをした。

こうして省吾の一週間は過ぎてゆく。

しかし次の週も、土曜日は漣と連絡が取れない。

考えた挙句に彼女に訊いてみると、毎週土曜日は病気の治療をしているそうだ。それを聞いた省吾は、結局それ以上追求できなかった。

「病気、大変なの？」

「ううん。前は酷かったけど、今は平気。治療さえしていれば問題ないの」

省吾の問いかけに、漣は涼しげに笑った。

## 【7】寄せる想い・4（前書き）

読みにくい方もいるかと思い、少し改行を多くしました。

## 【7】寄せる想い・4

「週に一回治療の必要な病氣つて、何だと思う？」

日本史の授業中、不意に省吾は前に座っている愛香に声を掛けた。背中の肩甲骨をシャーペンの後で突くと、ビクリと背を仰け反らせ、それから彼女は小さく振り向いた。

「ちよつと、ぴっくりするでしょ」

「なあ、何だと思う？」

愛香は少々眉を寄せて「何が？」

「だから、週に一度は集中的に治療の必要な病氣さ」

「知らないよそんな事」

彼女は思い直したように、少しだけ身体を後にそらして

「誰か病氣なの？」

「ああ。まあな」

「もしかして、あの娘？」

省吾はそれには応えなかった。しかし、それが答だ。

「症状とかは見えるの？」

「症状？」

「顔色が何時も悪いとか、咳き込んだり時々血を吐くとか、身体に痣があるとか」

「か、身体なんてまだ判んないよ」

省吾は慌てて返す。

「バカね。変な意味じゃなくて、手足とかは？」

「別に、何にも異常はないな。血を吐いたら判るだろうし」

省吾も机に前のめりになって、出来る限り小声で言った。

教師はひたすら黒板に向ってカツカツとチョークを打ち付けて文字を書きながら、何かを喋っている。

とりあえず真面目にノートを取る連中も多いが、ここそこで時折小声が舞っている。

「どうして週に一度治療してるって判るの？」

「彼女がそう言ってたんだ」

「ふん。彼女と上手くいってるんだ」

愛香は小さく頷くと

「お父さんに思い当たる事訊いてみるけど、あんまり期待しないでね」

愛香はふわりと髪の毛を振って、前に向き直る。

「ああ、サンキュウ」

省吾は愛香の肩をシャーペンでポンツと叩いた。

それほど強い風は感じないが、上空の雲はやけに速いスピードで流れていた。

この日省吾は、学校帰りに乗り込んだ電車で英美に会う。

彼女は桜台に住んでいて、澪とは中学から一緒なのだそうだ。

「今日は？ 澪と一緒にじゃないの？」

「えっ、うん」

英美は少し俯いて応えた。

この前の陽気な彼女とは少し違っているのは、相棒がいなせい  
か。

「あ、運動会のなんとか？」

澪はいちいち全ての予定を省吾に伝えるわけではないし、彼も細  
かく訊いたりしない。

本当は帰る時間くらい訊いて当たり前なのだろうが、毎回訊くの  
もどうかと思ってしまう。

英美は小さく小首を横に振ると

「今日は検査があるからって、5時間目が終わると帰ったの」

澪の行動は、未だに把握できない事が多い。

しかし、他人の自分に通院の予定まで全て話せとも、もちろん言  
えるわけが無かった。

「そ、そうか……よく早退するの？」

「たまによ。でも週に一度はするかも……」

そう言えば、先週も一緒に帰らない日があった。その前の週は無かった。

彼は、澪に会えない日があっても、いちいちその理由を訊いたりしない。もちろん、土曜日の件のように、時々は訊くが。

それは付き合っている確信が持てないからであって、決して省吾自信気にならないわけではない。むしろ気になって仕方がないけど訊けない。そんなところだ。

省吾は少し考えてから、英美の顔を伺うように

「澪の病氣って、何か知ってる？」

英美はスツと眉を潜めて、瞳を曇らせた。

「なんか、血液の病氣だって……」

「血液？ まさか、白血病……とか？」

省吾は平静を装ったが、内心は血の気が引く思いだった。白血病といえば、不治の病でありにも有名だ。

しかし、英美は首を横に振る。

「よくは知らないけど、違うと思う。聞いた事のない名前ですってだから」

「澪が自分で言ったの？」

「うん。でも、ショウくんにはあまり知られたくないって。あたしにもあまり話さないし」

英美の話し難そうな態度はそう言う事だったのだ。

澪と付き合っていればその不可解な部分を自然と知ることになる。友達の自分に、省吾から質問が来る事を英美は予測していたのかもしれない。

「ああ、大丈夫。英美から聞いた事は忘れるから」

省吾はムリに笑顔を作ると

「で？ 何て病氣？」

「あたしもよく覚えてなくて。滅多に病氣の話はしないから。でも、

かなり前に溆が『あたしは生きる為に、週に一度死ぬんだよ』て言  
ってた」

「生きる為に死ぬ？ 週に一度？」

英美は省吾の問いかけにただ頷く。

省吾は益々判らなくなり困惑の笑みを深めて、英美を見つめてい  
た。

プシュウ。というコンプレッサーの音と共に車両のドアが開いた。  
周囲の動く人波に沿って外を見ると、彼の降りる駅だった。

とりあえず英美に手を上げて電車を降りた省吾だったが、何だか  
判らない霧に包まれたような思いで、走り去る電車の影を見つめて  
いた。

## 【8】募る想い・1

週に一度死ぬとは、いったいどういう事なのだろうか。治療をする土曜日に彼女は死ぬのか？ 毎週？ いや、実際に死ぬわけじゃないだろう。

死ぬほど辛い治療だと言う事だろうか……

省吾はその夜寝付けなかった。思考が勝手にフル回転して、眠気を吹き飛ばしてしまう。

あのか弱い身体で澪はどんな治療に耐えているのだろうか……

苦しいのか、痛いのか、普段の彼女にはそんな素振りがまったく無いだけに、何も判らない省吾はそれだけでも齒がゆい。

結局澪の病名は判らない。自分が聞いた所で知らない病気なのかもしれない…… そんなに辛い治療を彼女は受けているのだろうか。毎週苦悩に浸るその日を、彼女はどんな思いで待ち受けているのだろうか……

カーテンの隙間から白み始めた外の光が薄っすらと零れ始めて、窓の外にカラスの鳴き声が聞こえていた。

翌木曜日。省吾は朝の電車で何時ものように澪に会う。

……相変わらず白い肌。そう言えば色つきリップは何種類か持っているのだろうか。その日によって色が微妙に違うような気がする。

「何？」

「えっ？」

「なんか、じっと見られると恥ずかしいよ」

窓の外を眺めていた澪は、省吾の視線を感じて少しだけ頬を紅潮させて笑った。

「あれ？ 俺そんなに見てた？」

「見てた見てた。ガン見してたあ」

澪は省吾の腕を叩いて笑った。

朝は相変わらず何の意味も無い会話で時間が過ぎてしまう。

それでも省吾は以前のように、時間を惜しんで何かを話そうとはしなくなった。その先にいくらでも彼女との時間を感じているからだろう。

以前と比べて、追い立てられるように喋らなくなった澪も、省吾と一緒にいる事が自然に感じるようになったのかもかもしれない。

「帰り会える？」

「うん。大丈夫だよ」

電車の下り際に急いで訊く彼に、澪も急いで応える。

「じゃあメール入れるから」

閉まる扉に向って省吾が言った。

蒼い空の向こうにはうねる様な雲が集まって、差し込む陽光が幾つものグラデーションを作り光沢を発している。まるでアクリル水彩で描いた風景画のようだ。

校庭の木々の緑は風に溶けるように色を失い、心なしか黄緑色に変わり始めていた。

「どうしたよ、浮かない顔して」

昼休み、ベランダで頼杖をつく省吾に、裕也が声を掛けてきた。

省吾は無言で振り返ると、彼の手にあったポツキーを一つ抜き取って自分の口へ運ぶ。

「別に」

裕也はベランダの手すりに背中を着けると空を仰ぐ。

「夏も終わったな」

見上げる高い空には雲は無い。何処までも抜けるような蒼だけが成層圏まで続いていた。

「ねえ、シヨウ」

愛香が教室の窓から身を乗り出して、細長い手のひらで省吾を手

招きした。

風に吹かれた前髪をたおやかに靡かせながら振り返った省吾は、少し前屈みで彼女に近づく。

「あれ、訊いて来たよ」

彼女ははたためく自分の髪を手で押さえながら、そう言っただけ意味深に裕也に目を配ると「ここじゃない方がいい？」

この学校の屋上は一部だけが開放されている。

グラウンドが狭い為、テニスコートも屋上にあるが、部活の時以外は施錠された金網の扉が閉まっている。

二つの校舎がくの字に交わったA棟とB棟を繋ぐ屋上の階段通路に、省吾と愛香は来ていた。その場所だけ階段付きの、屋根の無い台形の橋が渡されているが、もしそこから落ちてもコンクリートの床に這う太いパイプ類が受け止めてくれる。

A棟とB棟の端は給水塔やエアコンの室外機などが設置してある為、その動力パイプ等を跨ぐ為に橋状の通路が渡されているのだ。

三階では穏やかに感じた風が、四階建ての屋上では少々強く感じられて、階段の途中で愛香のスカートがふわっと舞い上がった。

「きゃっ」

慌ててそれを押さえる姿は、あまり教室では見せない慎ましさがある。

「見えた？」

「えっ？ いや」

省吾は遠慮がちにウソを言った。愛香の後ろから階段を上がっていた彼には、ほんのり日焼けした太もものその上まで丸見えだった。「けっこう風強いね」

「ああ、だから誰もいないんじゃない」

風の無い日は、屋上の限られた場所のあちらこちらでお昼を食べる者や、雑談で盛り上がる連中の姿が見えるが、今日は全く人影が

無かった。

愛香は橋の手すりの柵にスカートを押し付けるように寄りかかった。

「で、何だって？」

省吾も彼女の隣で手すりに寄りかかる。

「それがさあ、週に一度集中的に治療するってだけじゃあ、何とも言えないってさ」

「なんだよ」

省吾はがつくりと肩を落とすと「そんな事なら教室でいいだろ」

「だって、裕也とかいたし……」

「まあ、そうだな」

省吾は立ち位置を変えて、向かい風になるように手すりに肘をのせると、街並を眺めた。

まるでほうきで雲を集めたかのように、遠くの空にばかり犇めき合っている。

「ねえ、白血病……とかじゃ……」

愛香は遠慮がちに小さな声で言った。

「いや、そうじゃないらしい。たぶん」

省吾は遠くに見えるOZの屋上看板を眺めて言った。

確かな事は判らない。英美に聞いただけだし、ガンの告知を澤本人が受けるとも思えない。あえて違う病名を知らせる可能性もあるだろう。

それでも「週に一度死ぬ」という言葉が頭の隅にずっと引っ掛かっている。

「なあ、死ぬほど辛い治療って、なんだろう」

省吾は再び手すりに背を向けて愛香の方に身体を向けた。

「死ぬほど？」

彼女は思わず眉間にシワを寄せた。

「そんなに辛い治療してるの？」

「いや、判らないんだ。彼女の友達がそんなニュアンスで言ってた」

「そう……まさか本人に面と向かって訊けないもんね」

愛香は風に踊る茶色い髪を指でかき上げた。

省吾は再び遠くへ続く空を眺める。

「ねえ……彼女の事……好きなの？」

「はあ？」

愛香は彼の声に思わず身を引くように瞬きをした。

「当たり前だよ。そんなの……決まってるよね」

彼女の作り笑いの意味を、省吾は察する事が出来なかった。

何時もより慎ましい彼女の姿は時折見せる魅力でもあるが、それは省吾と二人きりになった時に限る事だと彼は気付いていない。

「そろそろ戻るか」

省吾は髪をかき上げながら階段に足を踏み出した。

「うん……」

自分の前を歩く彼の姿を、愛香は何時もよりずっと澄んだ瞳で見つめた。

## 【9】募る想い・2

省吾は帰りの駅に着くとベンチに腰掛けた。

一緒にここまで来た裕也は到着した電車に直ぐに乗り込んだが、省吾は手を上げて彼を見送った。

澪が来るのを待つ。

彼女が電車に乗る前にメールを送ってくる約束だ。

ベンチに座った省吾は線路脇の看板を何となく眺めていた。

少して携帯にメールが入ると、その直ぐ後に到着した電車に澪は乗っていた。彼女をわざわざ降ろす必要は無いので、省吾はそのままその車両に乗り込む。

「今日体育でバスケをやったら突き指しちゃってさ」

澪は笑いながら、シップを貼った左の中指を省吾に見せた。

「バカだなあ」と言いながら、

……体育も普通にやってるのか。と思う。

「そしたらさあ、英美がね……」

彼女は相変わらず明るい笑顔で話し続ける。

この笑顔の何処にそんな辛さが隠れているのだろうか。

「いったい、彼女は家に帰るとどんな生活をしているんだ……省吾は、自分の知っている澪以外の彼女にも興味を抱いていた。

「なあ、澪」

「なに？」

「澪の家は、何時も誰かいるの？」

「えっ？ うん。お母さんがいるよ。あと、ヨッシーが」

「ヨッシー？」

「犬よ。ミニチュアダックスなんだ」

「そ、そうか」

「どうしたの？ あたしの家に来たい？」

澪は彼の心の中を察するように笑った。

「いや、お母さんがいるならいいよ」

「ああっ」

彼女はそう言ってクリクリと目を見開いて笑うと

「あたしの部屋でヤラシイ事しようとしてるでしょ」

そう言って、自分の身体を省吾にぶつける。

揺らいだ体をポールにしがみ付いて凌いだ省吾は

「そ、そんなじゃないよ」

彼は肩から落ちた鞆を再び掛けなおして

「女の部屋とか、あんまり見たことないからさ」

どちらにしてもウソだった。漣の私生活が気になるだけだ。どんな暮らしをしているのか気になって仕方がない。自分と会っている以外の彼女が。

「そう。別にシヨウちゃんの部屋と変わらないよ」

そう言いながら漣は身体を近づけて、ドアの窓から外を眺めた。

……この横顔だ。明るくおどけて喋る時とは正反対のこの何処か淋しげな眼差しが何とも謎めいているのだ。

親しくなる以前に省吾が毎朝見ていた漣の横顔は何時もこうだった。何処か謎めいた、果敢なげに憂いな瞳で外の景色を見つめるのだ。

「ねえ、どうしようか」

漣が窓の外を見つめたまま呟いた。

「どうするって？」

「だって、シヨウちゃんの降りる駅、過ぎちゃったよ」

漣は振り返ると笑顔でそう言った。

「あ、いけねえ」

結局省吾は漣と一緒に江古田の駅で下りた。

この駅で降りるのは、彼女が倒れた時以来久しぶりのことで、もちろん改札を抜けるのは初めてだった。

「ねえ、じゃあゲーセン行こうよ」

「ゲーセン？」

プリクラかあ……そう思っただけで省吾は彼女に付き合っただけ。しかし、もちろんプリクラも撮ったが、彼女の本命はそうではないらしい。すぐさまクレーンゲームに夢中になりだしたのだ。

「シヨウちゃん、これ獲ってよ」

「俺、クレーンゲーム超下手だぜ」

「いいから」

仕方ないとはかりに何チャラというキャラのぬいぐるみを狙うがなかなか獲れない。

「この腕、本当に景品つかむ気あんのか？」

「ちよつとどいて。あたしがやる」

結局澪が再び自分で挑戦する。と、いきなり目標のぬいぐるみをつしりとアームがつかんだ。

「やったあ」

澪はぴよんぴよんと跳ねて喜ぶ。

「なんでいきなり掴むんだよ……」

クレーンゲーム機の難易度調整は巧みで、簡単なものはアームの力の強弱が3〜4段階に変えられるだけだが、それだと弱に合わせただけの場合は永遠に景品を掴む事は出来ない。

しかし複雑な機械は何回に一回だけアームの力が強くなる。という確率的な調整もできる。それによってお客は金をつぎ込み、ある程度の満足感も得られるという仕組みなのだ。

それでも、そんな事を知らない省吾はなんだか妙に理不尽な思いに駆られながら、喜ぶ澪に釣られて笑みを浮かべた。

## 【10】逸る想い

「やっぱり、また今度にするよ」

ほの暗い通りに明かりが灯るその場所は、街路灯の明かりではない。大きな門柱とその隣に半地下の大きなガレージの扉。両隣の家がやけに小さく見える目の前の家は、いったい何坪の敷地なのか、建物がどれだけ大きいのか、いまひとつ判らなかった。

庭に設置された水銀灯が、黒い門柱を照らし出して、その上に設置された防犯カメラが省吾を捉えていた。

「何言ってるのよ、ここまで来て」

澪は大きな門扉の横にある小さな扉を開けると、省吾の腕を掴んだ。

「だつてさ……お母さんいるんだろ」

澪はハッとして彼の腕を離すと、薄暗い庭の奥を覗いた。

微妙に邸内が暗いのは、部屋の明かりが一つも灯っていないからだ。

「そう言えば、リビングの電気が消えてる。お母さんいないみたいよ」

「本当？」

澪はホッとする省吾の手を掴むと、再び引つ張った。

「本当にいないんだろうな」

省吾は澪に手を引かれるままおずおずと石畳に足を踏み入れて、玄関までのやたら長い距離を歩いた。

なんだか、玄関の扉が普通の家よりも大きい。

澪はドアノブを一端掴んで回すと

「やっぱり誰もいないわ」

そう言つて、鞆から鍵を取り出した。

省吾は既にやましい事でもしているように落ち着かず、まるで不倫の密会のように辺りをキョロキョロと見回す。

芝の敷かれたほの暗い庭の先の暗がりには、ちょっとした林になっている。

本当は植え木の先は直ぐに通りとを仕切る塀なのだが、暗闇がそう見せているのだ。

省吾は腕を引っ張られてハッと視線を移すと、扉は開いて澪は既に玄関の中にいた。

センサー式の電燈が淡い山吹色に灯る。

……広い。天井が吹きぬけた玄関は、それだけで省吾の部屋ほどはありそうだった。

「デカイ玄関だな」

「そう？」

澪は自分のローファアを脱ぎながら、省吾を促した。

「上がって」

省吾は自分のスニーカーを脱ぎながら「犬は？」

「ああ、たぶんリビングで寝てるわ」

「飼い主が帰っても、出てこないの？」

「リビングのケージに入ってるから」

「そう」

広い玄関から廊下が続いて、ほの暗い先には幾つかのドアが並んでいる。

省吾は彼女の後を歩きながら周囲を見渡した。大きな収納扉の横に階段があるが、その階段の脇にもドアがある。それは収納と言うより部屋のドアだ。しかし、どう見てもその上を階段が通っている。

「そのドアって、何？」

「ん？ ああ、そこは地下室よ」

「地下室？」

そんなのテレビでしか見た事がなかった。

廊下が広い……階段が広い……省吾はいちいち自分の家の寸法と比べてしまう。それ自体が無謀なのだが。

二階に上がると、再び長い廊下にドアが並んでいる。

溇の部屋のドアにはM I Oと書かれた木製のプレートが掲げられていた。

……このプレートなら100円ショップで見た事がある。土台と文字パーツを買って自分で貼り付けるやつだ。省吾はそれを見ただけで何だか溇を近くに感じた。

しかしドアを開けて明かりが灯ると

「広ー」思わず声を上げた。

十五畳くらいはあるだろうか……艶やかなフローリングとログハウスのような全面板張りの壁は、明らかに省吾の部屋の倍以上はある広さだ。

それでもほんのりと香る蒼リングの匂いは、何時も溇から漂う香りで、省吾は些細な安堵に浸る。

ドアの正面には勉強机があつて、ノートパソコンが乗っている。その横には液晶テレビ。

大きな窓の前には木目調の黒いローテーブルと3人掛けの赤いソファが在り、その部分にはピンク色のラグマットが敷かれて、入り口から一番奥にベッドが在る。

オレンジ色のミッフィーのカバーが掛けられたベッドはセミダブルだった。

省吾は口を開けたまま部屋の中をぐるりと見渡す。

「ナニか飲み物持ってくるね。ヨッシーにも何かあげてくる」  
「あ、ああ」

溇は机の椅子に鞆を掛けると、部屋を出て行った。

溇は部屋に戻って来ると、持って来たペットボトルからコーラをグラスに注いで、一つを省吾の前に差し出し、もう一つをその横に置いた。

ソファに座った省吾の後ろに回った彼女は、それを視線で追う省吾に

「着替えるからこつち向いちゃダメだからね」

「えっ？ あ、ああ」

他の部屋で着替えりゃいいのにと思いつつ視線を他所<sup>よそ</sup>へ移した省吾は、大きな窓ガラスに漑の姿が映っている事に気付いた。

しかし、彼女は何気にカーテンを閉める。別に映った姿に気付いた訳ではなく、外から見える気がして閉めたのだろう。

そして省吾の後ろでスカートとブラウスが身体に擦れる音が次々に聞こえてくる。

彼は落ち着かずに視線を上下左右に、狭い範囲で動かした。そして、急いで閉めたカーテンの隙間には僅かに下着姿の漑が映っているのを、省吾は見逃さなかった。

彼女は胸にプリントのある紺色の小さなＴシャツを着て、白いネル地のミニスカートを履いた。

細いカーテンの隙間に見入っていた省吾は、何時の間にかそれがガラスの向こうの風景のような錯覚に囚われていた。

映る人影が動いても、彼は視線を変えなかったが、ポンと肩を叩かれて我に帰る。

「どうしたの？ ボーっとしちゃって」

「いや、別に……」

漑はただ笑って、省吾の座っているソファに一緒になって腰を沈めると、テーブルのコーラを飲んだ。

「なあ、漑」

省吾は少しだけ真顔になると

「漑の病気って、酷いの？」

思い出した事を直ぐに口に出した。

あれこれ考えればまた何も訊けなくなると思ったからだ。彼女との距離も大分近づいて、少しは知る権利を得られたような気がした。漑は持っていたグラスをゆっくりとテーブルに置いた。

「酷いって言えば酷いけど、生活には支障ないわ」

そう言って左右の空いた手を組んで膝の上に置くと「エッチな事

も出来るし」

彼女の大胆な発言に、一瞬頬を紅潮させる省吾だったが

「いや……そうじゃない。別に俺はそんな事を気にしてるんじゃないよ。今は……」

澪は再びテーブルのグラスに手を伸ばして横目で省吾をみると、目を細めて笑った。

「判ってるよ。でも、本当に普段は平気なの。学校での体育もほとんど出てるし」

「ほとんど？」

省吾は僅かに眉を潜めるが、澪は笑顔のまま氷を鳴らしてグラスに口を着け

「生理が酷いときは、そりゃ休むよ」

「あっ……そう言うことか」

省吾は息をつくように、ようやく自分のグラスを手にした。

彼女の病気は思っているほど酷くは無いのかもしれない。週に一度死ぬなんて言ったのは、きっと心配性の英美をからかったの事だ。それを彼女が真に受けたのだろう。

彼は、澪の口から病気の事を少し聞いただけで、肩の荷が下りたような妙に晴れ晴れした気分になった。

何だか肩の荷が少し降りたような気がする、今度は二人だけの時間を有意義に過ごしたくなる。

「それで、さっきの事だけど」

「何？ さっきって」

「いや……ほら、エッチも出来るとかなんとか……それって、どうなのかなあ。なんて……」

澪はお下げの三つ編みを指で解きながら、小さく吹き出すように笑って

「ごめんね。これもさっきの話だけど……いま生理だから」

省吾は思わずソファの背もたれに、倒れるように身を投げ出して大きく息をついた。



## 【11】愁い

部屋のドアにノックの音が聞こえた。

「澪、誰か来てるのか？」

透き通るような男の声だった。

「あれ、お兄ちゃんいたの？」

「いや、いまちよつと寄つただけだ。玄関に靴があつたから」

「うん。友達が来てる」

澪はそう言いながら部屋のドアを開けた。

四角い黒淵のメガネを掛けた短髪の青年が部屋を覗いた。爽やかで真面目で、少し神経質そうな笑顔がソファにいた省吾を捕らえた。省吾は反射的に小さく会釈をする。

「お前にしちゃ、随分な珍客だな」

清楚で育ちのいい澪に、茶髪の省吾は確かにある意味不釣り合いかもしれない。

部屋を覗いた彼に悪気はないのだろう。その爽やかな笑みからそれは十分に伝わった。

「何て事言うのよ。失礼でしょ。もう」

頬つぺたを膨らませる彼女を、省吾は初めて見る。

そんな澪の表情を見た男は

「ああ、悪いね。気にしないでくれ」

澪の頭越に、省吾にそう声を掛ける。

省吾は苦笑しながら再び頭を下げた。

彼が澪の兄だと言う事は、さっきの彼女の受け答えで判った。

「あ、これお兄ちゃん」

澪は手短かに省吾に伝えると

「もういいでしょ」

そう言つて兄を部屋から閉め出す。

「あんまり激しい遊びは止めておけよ」

兄はそう言つてハハツと声をだして笑いながら、部屋から出て行った。

「まったくもう」

漑がソファに座ると再びドアがガチャリと開いた。

「あ、今日は母さん遅いつて言つてたぞ」

「判つたから、もう入らないでよ」

「判つた判つた」

その声がドアの閉まる音に僅かに被つてフェードアウトする。

「カッコイイお兄さんだね」

「見た目だけよ」

「大学生？」

「うつん、もう働いてる。お父さんの病院で内科と外科を受け持つてるの」

「へえ、すごいんだ」

「人手不足なだけじゃない」

漑はそう言つて、ペットボトルから、二つのグラスにコーラを注ぎ足した。

彼女の家を出たのは八時を過ぎていた。

せっかくだからと宅配ピザを注文して二人で食べた。そして省吾が再び驚いたのが、漑の部屋にも玄関のテレビインターホンが繋がっている事だった。それは各部屋に繋がっているらしい。

彼女は自室から門扉の前に来たピザの宅配店員を確認してから、階段を下りていった。

漑とはほとんどソファの上で過ごした。部屋が広くて落ち着かなかったが、ソファの上にいればそれもほとんど気にならない。

何かを食べて直ぐにキスをするなんて思いも寄らなかった。毎回歯を磨こうとも思わないが、彼女が嫌がると思った。

しかし、意外と漑も平気な様子で、ピザに付いて来たミルクティ

ーを二人で飲んだせいか、今夜のキスはミルクティーの味がした。まろやかに絡みつく彼女の舌は、ミルクティーそのものだった。しばらくの間はミルクティーを飲むたびに、彼女の唇や舌の粘膜の感触を思い出してしまう……そんな事を思いながら、門扉の中で見送る彼女に省吾は軽く手を上げた。

門を出て少し歩いた所で一台の白いベントとすれ違う。四ドアのセダンではない。二ドアの少し車高の低いタイプのやつだ。

省吾が目で追ったそれは、澪の家の前に止まって、オートメーションの駐車場の扉がゆっくり開くのを待つと、吸い込まれるようにその闇の中へ入って行った。

すれ違った時、運転していた女性の姿がプライバシーガラスの中に僅かに見えた。

毛先を少しカールしたような、ちょっぴりノスタルジックなショートボブの髪型が、妙に印象的だった。

あれはきつと澪の母親だろう。省吾は立ち止まった足を再び前に踏み出す。

路地が交差した場所で振り返ると、澪の家の二階のベランダに人影が見えて、こちらに手を振っていた。

直ぐに澪だと気付いて、省吾は遠慮がちに手を振り返す。

庭の明かりに照らされた華奢な身体が、スポットライトを浴びたように暗闇にぼっかりと浮かんで見えた。

澪は明るい。確かに英美の方が何処か飛んでいる感じはするが、今時の同世代としてごく普通の明るさは持っている。好意を抱く自分から見た澪の笑顔は、さらに30%増しだろう。

……なのに何故。

何故時折見せる真顔がせつなく、果敢なげに見えるのだろう。どうして、一瞬笑顔が消えて何処かを見つめる彼女の横顔は寂しさに満ちているのか……

省吾は歸りの電車の窓から通り過ぎる街の灯を見つめながら考えていた。

本当に漣は見かけ通り元気な娘なのだろうか。彼女が言う通り、その病気は命を脅かすほどのものではないのだろうか。

ふと自分に置き換えてみる。

自分がもし命の危機にさらされるような病気になった時、周囲に全てを話すだろうか。

彼女の笑顔の隙間に漂う憂いな横顔が、何時も省吾の脳裏を不安にさせるのは何故なのか。

無言で佇む彼女の姿を毎朝密かに見続けていた為に、深層心理に深く刻まれた残像のようなものなのだろうか……

流れる街並が途切れると、見慣れた駅のホームに進入して光の帳に包まれた。

## 【12】響める想い・1

見慣れた朝の喧騒に包まれて、省吾は自動改札へ定期を差し込む。目の前を歩くOLのタイトスカートの、後ろみごろの合わせ目が少し右にズれているのを見つけて妙に気になったが、わざわざ声を掛けて教えるほどでもない。

あまりそこに視線を向けるのもおかしいので、まあいいかと、ひと事として片付けて視線を上げる。

周囲には同じ学校の連中も大勢いるが、顔見知りでもよほど親しい仲でなければいちいち声は掛けない。それが朝の仕来たりと言うか、それだけみんな学校へ向う事で頭がイッパイなのだ。

「おはよう」

省吾が駅の階段を下りた所で、後から肩を掴まれた。

華奢でしなやかなその手が男のものでない事は、掛けられた声と同時に感じた。

「あれ、愛香。今日も朝練なし？」

後から声を掛けてきたのは神崎愛香だった。

「なに言ってるの、昨日のコンクールで三年は終わりよ」

「ああ、そう言えばそうか」

愛香の艶のあるキャメルブラウンの髪の毛が、秋風にサラサラと舞う。

「彼女、元気そうじゃない」

今朝も電車では漑と一緒にだった。同じ電車の愛香は、気を利かせて駅を降りるまでは省吾に声を掛けなかったのだらう。

「ああ、普段はね」

「週一回の治療って、まだやってるの？」

「ああ、そうらしい。あと、時々精密検査で学校を早退したり、遅れて行ったりね」

「見た目はあんなに元気なのにな」

愛香がそう言つて怪訝そうに微笑むと

「でも、ちよつと色白かな」

そう言う愛香も夏の日焼けがだいぶ収まつて、白い指先で髪の毛を遊ぶ。

「ねえ、お父さんから変な噂を聞いたんだけど……」

愛香は遠慮がちに言つた。

「この前ショウさ、彼女は死ぬほど辛い治療をしているって言つてたよね」

「ああ」

「なんかさ……」

愛香はそこで躊躇して言葉を飲み込む。

「なんだよ」

省吾は視線を愛香に固定したまま歩き続けた。別に必死で前を見ていなくても、この歩道は真つ直ぐな一本道だし、もう二年以上も通っている道だ。

「なんか……臨死させる治療があるって、医師の間でも噂があるらしいの」

「臨死？」

普段あまりにも聞き慣れないその言葉に、省吾は眉を潜めた。

「一端死なせて……正確には心停止させて、直ぐに蘇生処置を施すんだって」

「それがいつたい何の治療になるんだ？」

「判んないよ。何か、そうすると病状の進行がリセットされるんだって」

「リセットされる？」

後から自転車が来た事に気付いて、省吾は愛香の肩に手を添えろと歩道の内側に押して、自分も同じ方向に動いた。

愛香は一瞬その仕草に胸の高鳴りを覚えるが、それを覚<sup>さと</sup>られないようにグツと平静を保って彼の横を過ぎる自転車を目で追つた。

「そんなに何度もやれるのか？」

省吾はそんな愛香の心の動きなどは全く気づかずに、言葉を続ける。

「判んないよ。でも噂では、原因不明の血液の病気で、症状はよく知らないけど……その病気の進行は心停止させる事によって正常な状態に戻せるって」

呆然とその話に聞き入る省吾の腕を掴んだ愛香は

「でも、噂だよ。そんな噂が医師の間にあるって。お父さんも人伝ひとついでに聞いただけでよくは知らないらしいから」

しかし省吾はそれがどうして洩と繋がるのか、直ぐには判らなかつた。

ふと視線を上げると、高高度を飛ぶ旅客機の引く飛行機雲の白い線が、虚空に一本見えた。

「死ぬほど辛い治療じゃなくて、実は本当に死んでる……とか」

愛香は再び遠慮がちに呟くように声に出すと、それに反応した省吾は思わず立ち止まる。

「……まさか」

冗談を受け流すような、脅えるような複雑な笑みを彼は浮かべた。

教室に入って自分の席に着いた省吾は、何か物足りなさに気付き辺りを見回す。

「あれ、裕也がいないじゃん」

「本当だ、珍しい」

前の席に腰掛けた愛香も窓際の彼の席を見て呟いた。省吾は真ん中の列の一番後ろ。裕也は窓際の一番後ろの席にいた。

省吾はふと携帯を取り出すと、着信ランプが点いている事に気付いた。裕也が学校を休むなら、何か連絡があってもいいのでは。そう思ったのだが、やっぱり彼からメールが入っていた。おそらく電車内で着信したのだろう。

『風邪で休む。報告頼む』

メッセージはそれだけだった。

ちょうどチャイムが鳴って、品疎な風貌の男性教師の担任が教室へ入って来る。

「ああ、今日は休みはいるかな」

担任の荻野勤は、出席簿を一瞥した後、教室の中を見渡す。

いちいち全員の出席は取らない。休みは誰か探すだけで、それで終わるのが何時もの事だ。

省吾は仕方なく担任に声を掛けると、裕也が風邪で休む事を伝えた。

もちろん、職員室に電話を入れるのが本来の義務なのだろうが、最近友達にメールで連絡を頼む連中も多い。

だいたいそれで無断欠席は免れるのだ。もちろん、厳しい学校ならそれは通用しないのだろうが……

省吾はちよっぴり空虚な気持ちに浸って、空いた裕也の席を眺めた。

## 【13】響める想い・2

朝あんなに晴れていた空は何時の間にか低い雲に覆われて、隙間から覗く僅かな蒼も、昼にはすっかり隠れてしまった。

校舎のベランダへ出ると妙に冷たい風が吹いていて、急に季節を飛び越えたようだ。

省吾は食事を終えると、なんとなくベランダの手すりに肘を着いて遠くの空を眺めた。

家並みの向こうには、東京ガスの丸い緑色のタンクが小さく見えて、今にも怪獣が現れて、その辺一帯で暴れまわりそうなこの風景が、密かに彼は気に入っていた。

「なに黄昏ちゃってんの？」

教室の窓から声を掛けて来た愛香は白いカーデガンを羽織っていた。

朝は着ていなかったが、おそらく鞆にでも押し込んだのだらう。

「別に」

省吾は少しだけ振り返って応える。

「今朝の事気にしてる？」

「いや、別に」

今朝愛香から聞いた奇妙な噂話しは、あまりに突拍子も無い為、彼には今ひとつピンと来ないと言うのが本音だった。

わざと心停止させて再び蘇生させるなんて、素人が考えてもあまりにリスキーに思える。最近流行のナツクル系雑誌にでも載りそうなネタだ。

「外、寒くない？」

「ああ、ちよつとな」

省吾はそう言って、身体を完全に愛香に向けると、ベランダの手すりに背を当てた。

彼女は窓から手を伸ばしてチョコレートの着いたクッキーを袋ごと差し出す。

「食べる？」

いつの間に何処で買ってくるのか、コンビニの１００円コーナーによくあるお菓子だ。

省吾は左手を伸ばして一つ摘むと、それを口に放り込んだ。

その時、冷たい風がゴォツと吹き抜けた。

怪しい雲行きだった空は、あっという間に夕暮れのようなほの暗さに包まれると、突然バタバタと音が聞こえて、教室の中にいる連中も一斉に窓の外を振り返る。

「何？ 雨？」

愛香も省吾の身体越しに空を見上げる。

あっという間に校庭の色がくすんだかと思うと冷たい飛沫を感じて省吾はベランダの手すりから身体を離す。

ベランダの少し離れた場所にいた数人の女子が「ぎゃー」と、奇声を発しながらドアから教室へなだれ込んだ。

省吾は愛香の乗り出していた窓から直接教室へ飛び込むと、急いで窓を閉める。とたんにその窓ガラスには激しく水滴が飛び散った。外は一瞬で雨で煙っていたが、さらに雨脚は強まって風が吹き付けると、ザブザブとバケツで水をかけているように窓ガラスの景色は歪んだ。

「凄い雨」

教室の中にいる連中は、しばし果然と外の景色を眺めていたが、見ているもどうしようもない事に気付くと、再びそれぞれにお喋りを始める。

パツと省吾の頭に小さなタオルが飛んできた。

「頭拭きなよ」

愛香が放り投げた彼女のタオルだ。ミッフィーの絵が描いている可愛いものだった。

省吾はそれを両手に掴むと

「サンキュ」と言つて、頭をゴシゴシと拭いた。  
濡れたせいか、何時も愛香から香る甘いコロンの香りがタオルから染み出るように辺りに漂った。

午後の授業中には一端雨はあがり雲の切れ間から僅かに陽が注いだ空だったが、放課後には再び雨が地面を濡らしていた。

昇降口の電気は何時も半分しか灯っていない為、窓から光が入らない今日は妙に薄暗い。

その先にある体育館へ向うバスケット部の連中が通り過ぎる。

「省吾」

去年まで同じクラスだった、坂上圭介だ。

「あれ？ 圭介はまだ部活？」

「ああ、今日は紅白戦の助っ人」

そう言つて手を上げると、手に持ったバックを肩に掛け直して足早に歩き去る。

それに応えて省吾も手を上げて見せると、下駄箱の暗い影に挟まれながら靴を履き替えていた。

「たまには一緒に帰ろうよ」

昇降口で声を掛けて来たのは愛香だった。

「ああ、別にいいけど」

「駅までだけだね」

彼女が冗談っぽくそう言つて笑うと

「今日は濡は来ないんだ」

省吾はナイキに自分の足を押し込むと、上履きを靴箱に戻した。  
聞き覚えの無いその濡という名が、例の彼女だと言う事は愛香にも直ぐに判った。

「ああ、そうなの」

さり気なく帰す愛香の胸の鼓動は、いっぺんに高鳴っていた。

彼女が省吾と一緒に電車に乗ったのは、おそらく五月の終わり頃が最後だろうか。

その時は部活がたまたま休みで、帰り際に寄った駅前のコンビニで省吾と会ってそのまま一緒に帰ったのだ。

もちろんその時は澪の存在はなかった。確かに彼は既に毎朝澪を見つめながら登校していたのだが……

とにかくそれ以来愛香は部活が忙しくて、偶然を装うにも出来ない状態で省吾と一緒に帰る事なんて出来なかった。

愛香は何故省吾に心を惹かれたのか……

それは中学時代に遡る。

神崎愛香と北原省吾は当然のように中学校は一緒ではなかった。

彼女は小さい頃から楽器が好きでピアノ、バイオリンと齧<sup>かじ</sup>っていたが今ひとつピンと来なかった。

区立の中学に入って吹奏楽部に入部するとフルートの音色に魅了されて、直ぐに自分のフルートを購入し、特訓して6月の定期演奏会には既にレギュラーメンバー入りした。

今でこそ見た目は多少チャラチャラした愛香だが、意外と頑張り屋なのだ。

そんな彼女も中学三年の夏休みには、部活をサボって好奇心旺盛な仲間と渋谷に繰り出したりして夜中まで遊び歩くようになった。

この頃既に今の身長、160センチに達していた愛香はパツと見はもう高校生にも見える。

覚えてたのタバコや酒は、みんなよりもひと足早く大人の仲間入りをしたのだと、彼女に錯覚させた。

校則がうるさかったので髪は黒かったが、ちよつとマスカラを塗って淡い色のグロスを引きばいくらで高校生や大学生からナンパの声がかかった。

もちろん、元々睫毛の長い彼女はスツピンでも声はかかる。ただ、ロリ系の援交オヤジや怪しいプロダクションのスカウトも多いのが難点だ。

しかし、ウザい、キモイと言いながら、次々に声のかかるのは気持ちがいい。

愛香はそんなウソと欲情で固められた扉の向こうへ、僅かに足を踏み入れていた。

## 【14】響める想い・3（前書き）

零から少し離れて、愛香と省吾のエピソードが数話続きます。

## 【14】響める想い・3

「愛香、クラブのパー券貰ったんやけど、行く？」

携帯に電話をかけて来た関西弁の少女は悪友の真琴だ。まこ

通う中学は違うが、夜の街で知り合った同い年の彼女は、夜遊びの年季は愛香よりも上だった。

以前大阪に住んでいた彼女は、神戸、奈良にも住んだ事があって、少し甘ったるい関西弁を喋る。

いつの間にかクラスの花娘というより真琴というほうが多くなった。彼女は時折プチ家出などをして街を徘徊しているので、何時でも会う事ができるし、妙に気もあった。

その日の夜も、愛香は真琴に誘われるまま夜の街へ繰り出す。

眠らない夜の街は、夏休みの学生の胸を何故か高鳴らせるのだ。それは当時中学生だった愛香も同じで、高校生も中学生もいたるところで目的もなしに徘徊している。

いや、彼女達は徘徊する事が目的なのかもしれない。まるでそこから何かが始まると信じているように。

都知事の圧力で取り締まりは以前よりも厳しくなったものの、深夜徘徊する未成年のあまりの多さに補導も追いつかない。

欲望の渦に引き寄せられる大人たちの隙間を縫うように、彼女たちは光の街をさ迷う。

それでも愛香は塾には通っていた。

親がうるさいせいもあるが、彼女は彼女なりに年相応のやるべき事をわきまえていた。

もちろん時々サボるが、特別夏期講習などは朝の九時から夕方まできっちり出ていたりする。遊ぶのは夜だから関係ないのだ。

省吾を見かけたのは石神井駅前にあるその塾だった。

雑居ビルの二階と三階が塾になっていて、一階はコンビニが入っている。

省吾はというと、塾をサボる事も多く、時間に遅れてくる事もしばしばで愛香との接点はまったく無かった。

しかし八月の模試での事だった。

この日は参加者が少なく、長い机に生徒はまばらに座っていた。多い時でも模試の際は一つずつ椅子を空けて座るが、この日はそんな事をするまでもなく二人分も三人分も席が空いている机がざらだった。

教室には五人がけの長机が二列になって十個ずつ、全部で20個並んでいる。所々の机は規定通り三人が一つ置きに座っていたが、愛香の座った真ん中辺の机には端と端に二人いるだけだった。

それでもそんな事は気にも留めずに試験問題をこなしていた彼女だったが、急にシャーペンの芯が途切れた。

何度ノックしても芯は出てこないの、後のキャップを開けてペンを逆さまにしてみると中には一本もストックが無い。

愛香は直ぐにペンケースの中を見るが、そこにも芯のストックがなくて、しかも他には色付きのボールペンしか入っていなかった。

直ぐ隣に誰かいれば誰でもいい、声を掛けてシャーペンの芯を貰うだろうが、今日に限ってかなり離れた場所に見知らぬ男が一人座っているだけだ。まさか後を振り向くわけにもいかないし、前の席の娘を呼ぶわけにもいかない。

……マジ困った……どうしよう。

その時シャツと小さな音がした。

何かが机の上を滑って来て、愛香の手にぶつかり、彼女はとっさにそれを手のひらで覆った。

近くの席の何人かが、不審な音に思わず頭をあげる。が、再びテストに集中したのを見て、愛香はホッと息をつく。

教壇にいた講師も一瞬その音に視線をチラつかせるが、愛香は素知らぬふりをして顔を伏せていた。

さっき机を滑って来たものを掴んだ左手をそっと開けてみると、それはシャーペンの芯の入った小さなケースだった。

彼女は顔を伏せたまま、それが飛んできた四つ離れた席を盗み見る。

彼は素知らぬ顔で答案用紙に向かって手を動かしていた。それほどカッコイイ男ではない。

靴の踵は潰して少しガラは悪そうだし、夏期講習もたまにしか見かけないヤツだ。だいたい右手に時計をしているのが妙にカッコつけに見えた。

しかし、その憎たらしいほどにクールで些細な気遣いは、愛香の心を強く驚掴みにしたのだ。

「ね、ねえ」

愛香はテストが終わると慌てるように彼に駆け寄った。

さっきのテストが最後だったので、同じ机にいた彼はさっさと帰るところだったのだ。

「えっ？」

彼は少々無愛想に振り返った為、愛香は一瞬言葉に詰ったが

「さっきは有難う」

そう言っつて、残りの芯が入ったケースを彼に返す。そして満面の笑み。

自分がちよつとは人よりモデル事は充分に自負している。この男の気を引くことなんて造作も無い事だ。

「ああ、別にいいさ」

しかし彼は、それを左手で受け取るとさっさと教室を出て行った。愛香は自分の笑みに反応しない彼に一瞬拍子抜けする。

「ね、ねえ、ちよつと」

「俺さ、タバコ吸う女って、ちよつと。て、感じなんだ」

彼はもう一度振り返って、冷やかに笑みを作ると廊下を歩いて行った。

どこかで見られたのか……？ 愛香は初めて血の気の引く思いを

味わった。

タバコを吸う女は嫌い……そう思われる事なんて、今まで考えたことも無かった。それを吸う仕草は、自分では何処かいい女、大人の女をイメージさせていたのだ。

シヨックだった。そんな事、夜に出逢う男には言われた事がない。それが省吾と初めて言葉を交わした出会いで、その時以来彼女はタバコを啜えてもいない。

ある日、塾の昼休みにコンビニ弁当を食べる省吾を、愛香は見かける。その時、彼が左利きだとわかった。

文字を書くのは右手だったので気付かなかったが、箸を左で持つのはおそらく左利きだろう。

と言う事は、右手首に時計を掛けるのは、彼にとって至極当然の事だ。

「あれ、省吾って左利きなんだね」

近くにいた娘が何気なく話しかける声に彼は頷いていた。

その後愛香は省吾と時々顔を合わせたが、なかなか話をするチャンスは無いまま秋頃になって彼は塾を辞めた。

心のどこかに想いを留めたまま、月日は過ぎた。

楽しい事を追求め追いかけられる喧騒に包まれ、それに夢中になっていた彼女は、その留めた想いさえも、何時の間にか忘れていた。

ところが高校へ入ってから再び省吾と出逢ったというわけだ。

愛香は決して省吾を追いかけて今の高校に入った訳ではない。

父や母はせめて大学の付属校に入れたがっていた。それは小学校から中学に上がる時も同じで、愛香はその度に反発した。

勉強に追われて過ごすのはまっぴらだったし、今の高校は、校則があつて無い様な校風が何よりも気に入ったのだ。

そして、入学式の日には気付かなかった彼の姿がある日校舎で見かけて、しばらく忘れていた愛香の乙女心に再び火が灯ってしまつたのは言うまでもない。

勇気をだして彼女から声を掛けてみるものの、クラスが違う為か、なかなか距離が縮まらない。

しかも省吾は、同じ塾で愛香と会っている事も忘れていたのだ。クラスが違うからこそ付き合っている連中も大勢いるというのに、どうにも愛香には自分からその意思表示がうまくできなかった。

そのくせ他の連中や上級生からはよくコクられて、その度に屋上や体育館裏で「ごめんなさい」をしなければならなかった。

中学からの付き合いで真琴とはよく遊ぶが、以前のように夜な夜な遊びまわる事は無くなった。

当て付けに他の学校の男と付き合ってみたりしたが、極端に親しくなれない省吾には何の効力も無かったし、部活が忙しくて、けっきょく他の学校の男の子と付き合うのはかなり無理があった。

そんな状態のまま二年が経ち、三年生になった時にやっと念願叶って同じクラスになったというわけだ。

本命に關してだけは異常に奥手な愛香に、省吾との間に望む進展はかなりの難題だった。

## 【15】ふたりきり・1

傘から伝う雫が足元に何度も落ちて、その度に歩道に薄く溜まった雨水が小さな波紋を作って揺れるが、それは空から注ぐ雨の勢いであつという間にかき消される。

愛香が置き傘にしていた折り畳みの赤い傘に省吾と二人で入って駅までの道を歩く。

愛香は彼と腕が触れそうで触れない微妙な距離を保って肩を並べながら、つい右半身に意識が集中してしまう。

省吾は愛香が自分側に多めに傘を傾けている事に気付いて、柄をそつと手で押す。

「俺は頭が濡れなきゃそれで充分だから」

……普段は何にも考えてないようで、時折見せるこのさり気ない気配りにグツとくる自分が悔しい。

愛香はガラでもないと思いながら、火照る頬をこっそり空いている手で摩った。

駅の階段まで来て庇に入ると、彼女は傘を畳む。

「今日はどうして彼女と帰らないの？」

本当は話したくない彼女の話題を、愛香はあえて平静を保って切り出す。

「なんか運動会の練習があるらしくて。その後友達をご飯と食べるとか」

「雨なのに？」

「体育館で出来る練習なんだって」

「そつ」

愛香は足元を見ていた視線をふと上げて

「でも、彼女病気なんでしょ？ 運動は平気なの？」

「さあ……普段は元気だから、普通に生活できるらしいよ。体育とかも平気だって」

営業途中のサラリーマンが、死にそうなほどゆっくりと階段を上る横を、二人は何気に追いつ越した。

小脇に黒い鞆を抱えた、四十過ぎのいかにもくたびれた風貌の男だった。

省吾はこんな大人を見ると、あくせく働く毎日が自分にも訪れて、結局高校生などにオヤジ呼ばわりされるのかと思うとウンザリする。天井に当たる微かな雨音を聞きながら、二人は何となく無言でホームに佇んでいた。線路上の石は、普段は見せない艶やかな琥珀色に様変わりしている。

学校での二人は自然に何でも話しが出来るのに、他の空間に放り出されると途端に何を喋っていいのか判らなくなる。

学校では周囲にクラスメイトがいる事で、二人で喋っていてもつまり、それは二人きりではないのだ。

しかし今ホームにいるのは二人きり。

もちろん周りには他の学校や同じ学校の生徒もいるし、ゴミ箱の横に立っている娘は隣のクラスの顔見知りの綾子だ。

それでも、学校という枠で括られていないこの空間では、今隣にいる省吾と愛香は二人きりと言う事なのだ。

その証拠にすぐ横のベンチには学校とは無関係の、さっきのくたびれたサラリーマンが腰を降ろして栄養ドリンクを飲んでいる。

ホームに電車が入って来て、二人は無言のままそれに乗り込んだ。省吾は車内に連なってゆらゆらと揺れる吊革や空調の風を受ける

広告の吊りビラなどを、ぼんやりと眺めたりしていた。

「シヨウは家ではどうしてるの？」

「どうしてるって？」

「えっ？ 例えば……家で一人の時とか」

省吾の家が母子家庭と言う事は、当然リサーチ済みだった。

「そうだなあ。俺パソコンもあまりやらないし……ボケツとテレビ見てる事が多いかな」

彼は視線を窓の外に移しながら言った。

愛香が下りるのは一つ目の駅だ。

彼女は省吾ともうしばらく一緒にいたい、直ぐに車内アナウンスが流れてあつという間に次の駅に着いてしまう。

電車が減速を始めると、愛香はキュツと胸が苦しくなった。

もつと何かを話したいのに、それどころじゃない。

明日も会えるのにどうしてこんなに胸が苦しいのか判らなかつた。中途半端に彼と一緒にいた為に、想いが膨らんでしまったのだろうか……

バシユつと音を立ててドアが開いた。

動かない愛香を省吾が見て「お前ここだろ？」

発車メロデーが鳴った。

動かない彼女に省吾は困惑したが、無理やり降ろすのも妙だ。他の駅に用事があるのかもしれない。

愛香は何故か無言で頷くと、省吾の腕を掴んでホームへ飛び降りた。

「おい」

省吾は訳が判らずに腕を引かれるまま彼女と一緒にホームへ足を着いた。背中ではドアが閉まり、電車が走り出す。

駅に降り立った雑踏は、真っ直ぐ階段へ向って動いていた。

「おい、何だよ」

省吾は愛香が掴んだ腕を振りほどいた。

「だって、詰んないじゃん」

「はあ？」

愛香の冗談っぽい笑顔に、省吾は困惑した。

何が詰んないんだ……この時は、彼女の意図がまるっきり解らなかつた。

「せっかく二人なのに、全然喋れないし……」

「いや、けつこう喋ってたし……」

省吾は困惑を隠しきれない笑みを浮かべたが、彼女は急に笑顔を曇らせて俯いた。

「喋ってないよ」

「えっ？」

「喋ってない。全然話してない。せっかく一緒に帰れたのに、久しぶりに一緒に電車に乗ったのに……もつと一緒にいたいじゃん」

愛香は勢いに任せると子供のように一気に言い放った。言い出したら停まらなかった。

省吾にはそれが、何時もの少し大人びた彼女にはかけ離れた姿に見えた。

ホームの端から歩いて来た二人組みの主婦が、二人のやり取りにジロジロと視線を向けるのが何とも恥ずかしい。

……もつと遠慮して見るよ。省吾は刺さるような視線に嫌悪感を抱いた。

既に階段に足をかけた他の高校の連中も、愛香の声が聞こえたのか振り返ってチラ見している。

「いや、一緒にいたいって……意味判んねえし」

益々困惑した省吾は苦笑しか出来ない。愛香は、ついムキになってしまった自分が恥ずかしくて急に走り出す。

「あつ、おい。ええ？」

階段に向って駆け出した彼女を、省吾が追いかけた。人混みに阻まれて上手く前に進めない彼女は、強引にそれを掻き分けて階段を駆け上がってゆく。

「ちよつと……」

「待て」と声を出そうとした省吾は、自分が人混みの中にいることを思い出し、言葉を飲み込むと

「ちよつと、すいません」

そう言つて、ひたすら人混みをぬって階段を駆け上がった。

通路をダッシュする愛香の髪が激しく揺れて、短いスカートの裾は捲くれあがっていた。その背中を彼はひたすら追いかけて、今度は階段を駆け下る。

……何やってんだ、俺。何で駅で女の背中追っかけて、必死で走

ってんだよ。つうか、アイツ足速ええよ。省吾の頭にそんな思いが素早く駆け抜けて消えた。

「ちよっと待てって」

改札口の前で、ようやく彼女を捕まえた。

「なんだよ。どうしたんだよ」

息を弾ませて愛香の腕を掴んだ。

「ご、ごめん。あたし、つい……」

彼女も肩で息をつきながら、途切れ途切れに言った。

今追い越してきたばかりの雑踏が次々に改札を抜けてゆく中で、お互いのブレスと自分の激しい鼓動だけが、二人の耳には響いていた。

## 【16】ふたりきり・2

「き、気にしないでね、さっきの事。あたしはほら、男に困ってるわけでもないし」

愛香はそう言ってキレイにカットされた眉を潜めると、ちよつぴりムリめに笑って見せる。

二人は石神井公園の池の畔を何となく歩いた。

さすがの省吾も彼女の想いを感じ取っていたが、どうしていいのかイマひとつ判らない。

だいたい何時も何でも話せる女友達と思っていた彼女が、自分をそんな風に想っていたなんて、どうにもピンと来ないのだ。

高校に入って微妙なアプローチを繰り返していた愛香の態度は、全く省吾に届いてはいなかったのだ。

雨は上がって、濡れそぼる草木に弱々しい光が薄っすらと注がれ、まるで朝露に煙るように緑の景色は白く微かに霞んでいた。

ひょうたん型の池の一番窪んだ場所にかかるメガネ橋の上で省吾は立ち止まった。

雨で濁りきった水面に、時折魚の跳ねる音がして波紋を作っている。

「正直お前は可愛いと思うよ」

省吾はそんなセリフを面と向かって言う事は出来ずに、池の水面を見つめたままだった。

「そ、そんなの、当たり前じゃん」

愛香は照れ隠しにそう言い返した。同じく水面を眺める彼女は、チラリと彼の横顔を盗み見る。

「でもさ、俺……今は」

「ちよつとまつたあ」

愛香は咄嗟に省吾の腕を掴んだ。

「それ以上言わなくていいから」

慌てた顔を笑顔に変えて

「そんなの判ってるよ。だからちょっと言ってみたかったって言うか、弾みっていうか……だから……今日の事は忘れてよ」

省吾はこんなに慌てた彼女の表情も、駅のホームでの泣き出しそうな顔も、今まで見た事は無かった。

それはとても人間らしく、女の子らしいと思った。いつも自信に満ちて、周囲の女子からは容姿も成績も一目置かれ、年中誰かにコクられてはそれを断る優越感に浸っている素振りをみせる。

そんな彼女が眉を寄せて子供のように自分の思いを叫ぶ姿に一瞬、本気で可愛らしいと感じた。

でも今は……今は彼女の気持ちに応えてあげる事は出来ない。

省吾は答を出そうとは思わなかった。今はそれでいいような気がした。

高校生の自分が、まさか将来を考えて女性を選んでいるわけでもない。

ジョギングするお爺さんの姿が目映った。歩くようなスピードだが、池の周りの遊歩道をもつ三周以上は周っているだろう。

「お前の家、この近くの？」

「うん。この通りの向こうよ」

省吾は虚空<sup>そら</sup>を仰いでひとつ息をつくとき、自分よりも少しだけ視線の低い愛香を見た。彼女は省吾の視線を感じながらも、池の畔に視線を這わせている。

「一端駅に戻って、モスでなんか食わない？ 俺腹減ったよ」

「うん。そう言えば、お腹減ったよね」

愛香はちよつとだけ潤んだ目を細めて笑った。

「お前が走らせるからだぞ」

「運動不足みたいだから、走らせてあげただけじゃん」

省吾が歩き出すと、彼女はスカートを大きく揺らして小走りに彼に肩を並べた。

本当は手を繋ぎたいけど、そう言うわけにもいかない。

今日のは決定的な告白ではなかったけれど、何となく気持ちを伝えたら、どんよりと立ち込める曇った空模様とは裏腹に、彼女の気持ちは晴れやかになった。

その夜、神崎愛香は自分の父親の勤務する某大学病院へ来ていた。大きな敷地を横切って、急患用の通用口から入る。外来診療の終了した閑散としたロビーを抜けると、エレベーターに乗って五階の外科病棟へ向かう。

ナースステーションを横切って休息ロビーに入り、椅子に腰掛けて一息ついていると直ぐに一人の医師がやって来た。

みのわたのり  
箕輪忠典。彼は愛香の父親である神崎理かんざきあさむの下で働く外科医だ。

「ああ、愛香ちゃん。わざわざ来なくても」

「だって、箕輪さんなかなか捕まらないんだもの」

「いやあ、けっこうオペが立て込んでいてね」

箕輪はそう言って苦笑を浮かべると

「実は、この後もオペが控えてるんだ」

「時間はとらせないよ。この前の事、調べてくれた？」

愛香は立ったままでいる箕輪を見上げた。

「いや、やっぱり噂っただけで、詳しい事は何も見えてこないんだ。さり気なく他の連中に聞いても、みんな誰かに聞いたって感じで」

「臨死させる治療の事例はあるの？」

「そんなのあるわけないよ。そんな治療法が認められるわけないし……」

箕輪はテーブルを挟んで愛香の前の席に座ると再び笑みを浮かべ「ただ、治療法のわからない血液の病気が存在するのは確かなんだよ。精密検査ではどこにも異常は見られないのに、血中の白血球や

赤血球、その他の成分もそれぞれの数が異常に増えたり減ったりい  
ていくんだ。もちろん、骨髓にも異常はないらしい。でも、原因不  
明の病気は意外と多くて、世間に出るのは比較的症例の多いほんの  
一部に過ぎないんだよ」

箕輪はチラリと腕時計に目を配ると

「じゃあ、俺そろそろオペの準備があるから」

「うん。ごめんね。わざわざ」

彼女はそう言っ、優しく微笑んだ。

「いや、いいよ。噂の件は、それとなく他も当たってみるから」

箕輪は軽く手を上げて、休息ロビーを立ち去った。

彼女が父親から聞いたと言っ、省吾に話して聞かせた、臨死させ  
て治療する奇病の噂話は、実は箕輪から聞いたものだった。

愛香は病院から出ると、友人から入っていた携帯メールに返信を  
送り、タクシーを拾っ、帰宅した。

愛香はたまたま母親の使いで父の病院へ行っ、た時に箕輪みのわにあの奇  
妙な噂を聞いた。それを聞いた瞬間、何故か省吾の彼女の姿が浮か  
んだのだ。

症例のない奇病と臨死というモラルに反した……といより、もは  
や倫理を超えた治療法の噂が、省吾が言っ、ていた「よく判らない病  
気と死ぬほど辛い治療」に重なったのだ。

彼女は箕輪に頼んでその噂に関して調べてもらっ、ていたが、やは  
り所詮は噂。なかなかその真相には辿り着かない。

病院に関する噂話は以外に多く、そのほとんどが根も葉もないも  
のばかりだと言っ、事は、愛香自信がよく知っ、ている。

それでも、電車で見、る滯の何処か病的な白さを思い出すと、何だ  
か嫌な胸騒ぎがするのだ。

これは父親から受け継いだ勘なのだろうか。愛香は自分でも判ら  
ない不安に急かされるように、とにかく噂の真相が知りたかった。

根も葉もない、ありえない事ならそれでいい。

省吾は自分に振り向いてくれないけれど、彼の悲しむ姿は見たくない。

愛香は自室のベッドで横になったまま、ただ白い天井を見上げて省吾と歩いた石神井公園の、緑の生い茂る遊歩道を思い出していた。

## 【17】女心

少ない北窓から差し込む淡い光が、廊下のリノリウムの床に僅かに白い反射光を描いていた。

休み時間の象徴である教室の喧騒が、開け放たれたドアから風に乗って染み出るように廊下へ流れる。

「ああ、あたしも暇になったからバイトでもしようかなあ」

教卓に寄りかかった愛香が、両腕を頭上に掲げて伸びをしながら吐息混じりに言った。

「あんた大学行くんでしょ」

クラスメイトの陽子が言う。それを横で聞いた美紀は

「馬鹿ね。愛香は今更あくせく勉強しなくなつて、適当な大学なら何処でもいけるのよ」

「東大とか行かないの？」

陽子はそれが当然という顔で、愛香を見る。

「行くわけないじゃん。意味判んないし」

「でも愛香、あんたバイトしなくなつて、充分なお小遣い貰つてるでしょ」

少々妬ましい視線で見る美紀を、冗談っぽく嘲笑う愛香は

「暇つぶしよ。それと社会勉強かな」

教壇付近で戯れる女子たちの中にいる愛香の姿を、省吾は不思議な気持ちで見ている。

今朝、駅の階段を下りてコンビニに寄ると、愛香がいた。今までと変わらない笑顔で「おはよう」と言つて寄ってくる。

今までも時折あつたように自然のまま一緒に肩を並べて学校まで来て、ほぼ一緒に教室へ入つて来た。

昨日、一緒にモスバーガーに入つた時も愛香は既に何時もの彼女で、ハンバーガーを頬張りながらシェイクを口にし、少し長い睫毛をパタパタと瞬きさせて笑った。

一瞬憂いに俯いた彼女は何処かへ消えていた。

今、他の女子と何かを話しながら笑い会う愛香の姿は、その整った目鼻立ちも相まって満ち溢れた自信さえ感じる。

「女って判んねえよな」

省吾は横にいる裕也に聞こえるように呟いた。

「あ？ 何だよお前。今頃そんな事に気付いたのか。それってヤバくねえ」

「なんでだよ」

机に頬杖を着いたままジロリと裕也を横目に見た。

「だってよ、あの澪ちゃんだって、本当はどんな娘か判んないぜ」

「そんな事ないだろう」

裕也は、省吾の机に腰掛けると

「じゃあお前、澪ちゃんの事は何でも知ってんの？」

「いや、何でもってわけでは……」

裕也の言葉に省吾は内心ドキリとした。彼女の事は、知っているように未だに何も知らないような気がする。

ごく普通のカップルを装って池袋や新宿、渋谷に出かけたりもするが、彼女の病気の事はほとんど聞かないままだ。澪の家で訊いたあの時以来、省吾は彼女の病状には触れていないのだ。

別に具合の悪い素振りもないし、毎週土曜日には連絡がほとんど取れないという事意外は別に他の女の子と変わりはない。もちろん、その他にも検査などで朝会わない事もあるし帰りに会えない事もある。

それでも澪を傍で見ている限り、彼女が死に関係するような重病には見えないのだ。逆に、ちよっぴり会えなくなる秘密の時間が、彼女の魅力でもあるのかもしれない。

だいたい命に関わるような重い病気なら、もっと虚弱で、電車の中でも立ってられないとか、しばらく歩くと倒れそうになるとか、そんなイメージがある。

確かに親しくなったキツカケは、彼女が電車で倒れたせいだが、

あれ以来澁が省吾の前で具合を悪くした事は無かった。

「はい、退いた退いた」

始業のチャイムが鳴ると愛香が省吾の前にある自分の席に戻って来て、彼の机に座る裕也をそこから退かせた。

省吾は目の前に来た愛香を見て、一瞬わざと窓の外に視線を移した。一瞬省吾を見た愛香もさり気なく廊下の方へ視線を這わせる。

一瞬交差した二人の視線は、事無きようにそれぞれ違う場所を見つめる。

「お前ら、俺が休んだ隙に、何かあったのか？」

立ち上がった裕也は、愛香と省吾を交互に見て言った。

「な、何でそうなるんだよ」

「そ、そうよ」

「いや……何か前と雰囲気が違うっていうか」

裕也はそう言って笑った。もちろん、ただの当てずっぽうなのだが、彼の一言に愛香も省吾も一瞬鼓動が跳ね上がったのは事実だ。

何時も適当な事をいう割には、時折鋭いところを突いてくるのが裕也の恐ろしい所だと、省吾は度々感じる。

「バカな事言っていないで、早く席に戻れば」

愛香にそう言われて、裕也はズボンのポケットに手を入れたまま「ハイハイ」と、ガニ股に歩いて席へ戻る。

省吾は思わず愛香を見ていたが、その視線に彼女も気付いて

「な、何？」

「いや、別に」

省吾は慌てて返すと「ていうか、俺はただ前見てるだけだし」

「あ、そくだよね」

彼女も慌てるように、前方へ向き直った。

柔らかそうな茶色の髪が肩から背中にかけて落ちて揺れると、微かに甘い香りがした。

省吾はちよつとだけ彼女の髪の毛に触れてみたい気持ちを抑えて、廊下を歩く微かな足音に耳を澄ます。

入り口のドアが開いて数学の教師が大股で入ってくると、教室のざわつきは潮のように引いて、退屈な時間の始まりだ。

## 【18】真相

その日の放課後、省吾は何時ものように澪と電車内で待ち合わせ、一緒に帰った。

「ねえ、石神井公園の池にワニがいるって噂、知ってる？」

澪が幼い子供のように笑う。

「えっ？ それってかなり前じゃない？」

「最近それが大っきくなっただって噂よ」

「マジで？」

澪は省吾の腕を叩くと

「ねえ、石神井公園寄って行こうよ」

「えっ、今日？」

省吾は昨日愛香と歩いた場所を、今日澪と歩くのはどうにも気が引けた。

「何か用事とかあるの？」

「いや、別にないけど……」

省吾は澪に腕を引かれるように、石神井の駅を降りた。

近場で一番大きな公園と言えば、おそらく石神井公園だろう。昔、他の女性と歩いた事も在るのは事実だ。

それでも、確かに好きで付き合っていた昔の女性よりも、愛香と歩いた記憶の方がなんだか思い出深いのは何故なのか。

単に、時間の経過の順位がそう感じさせるのだろうか。

省吾は池の周囲を歩きながら水面の様子に目を輝かせる澪を愛おしいと思う反面、その無邪気さが何だか愛香の内面の一部とオーバーラップしてしまう。

『じゃあお前、澪ちゃんの事は何でも知ってたんの？』裕也が今日教室で言った言葉が頭の中を過った。

確かに判らない。そして愛香が自分に友達以上の好意を抱いていた事さえ昨日気付かされたのだ。

そして付き合っていると思っっている漣の事も未だに判らない事がある。

普通それは考え方や性格など内面に関しての事が多いのだろうが、彼女の場合は少し違う。もちろん、何かの病気を抱えた娘と付き合うのは初めてだからその心理の奥まではなかなか理解する事は出来ない。

それでも、少なくともキスをする間柄の人間に何時までそれを曖昧にしておくつもりなのだろうか……その間に完治してしまうような病気なのだろうか。

省吾はめがね橋の上から手招きする漣の姿に気付いて、慌てて傍に駆け寄った。

「あれってワニじゃない？」

「えっ？」

省吾は漣の指差す方に目を凝らした。

岸边に生える水草の陰に、確かに何かの黒い影が浮かんでいる。

マジか……確かに以前ここでワニの目撃騒動があったのは事実で、連日ワイドショーの報道陣がうるついていたのをわざわざ見に来た事が在る。

省吾は漣の手を引いて、今まで歩いて来た対岸へ渡ると、黒い影の見た場所へ駆け寄った。

駆け出して直ぐにハッと振り返る。

……愛香のつもりで思わず駆け出したが、漣は走らせて大丈夫なのだろうか。

しかし、心配は無用なようで、彼女も普通に駆けている。確かに昨日の愛香のように全力に近いスピードで走っているわけではないが、小走りは何の無理もなさそうだ。

黒い影の見た辺りで立ち止まると、水草を覗き込む。

「いる？」

漣は完全に何かがいると思っっているようだった。

「いや、よく見えないよ」

「石投げてみようか」

澪が言った。

「逃げちゃうんじゃないか？」

「動けば何かがここにいてるって事でしょ」

「ああ、なるほど」

別にワニを捕まえに来たわけじゃないのだから、至近距離で何かが見ればそれでいいのだ。

澪はベンチの横の大きな岩に手を添えた。

「その持ち上がらないだろ」

「ダメ？」

「それに、そんな大きな岩みたいな放り投げたらみんな振り向くよ。そんなのちよつと恥ずかしいだろ」

省吾はそういつて、草むらに落ちていた拳よりも少し小さな石を二つ拾うと、一つを澪の手のひらに乗せた。

「どっちが先に投げる？」

澪は目を輝かせるように訊いた。

「じゃあ、澪がやれよ」

澪は省吾の腕に掴まって、池の畔ほとりを覗き込むように身体を伸ばすと、思い切つて石を放り投げた。

ジャポン！ と意外と気の抜けた音だけが水面に響いた。

省吾は澪の手を掴んだまま彼女に寄り添うと、一緒に池の中を覗き込んで、自分が持っている石も放り込もうと左手を振りかざした。その瞬間、ズバツと水面が大きく揺れて、大きな影が一瞬水中を動くのが見えて飛沫が上がった。

「きゃっ」

澪は思わず省吾にしがみ付いて、彼も後ずさりをする。

「いるよ、何かいる」

「あ、ああ。ワニなのか……」

省吾は澪を抱きしめたまま、池の水面に出来た大きな波紋を見つめていた。

何かがあそこの池にいるのは確かなのだろう。しかし、二人にはそれを確かめる術などなかったし、何かがいる事実を見ただけで気持ち的には充分楽しかった。

公園を出て駅へ向う頃には緋色の空が上空を埋め尽くして、西に広がる雲に太陽は隠れていた。

住宅街の横を通って駅に続く道で、省吾はロータリーの人影に目を止める。

改札を抜けてきたのは愛香だ。

どこかで遊んできたのだろうか。

暮色の景色の中で、駅の周辺は街路灯や照明が多い為、彼女の姿ははっきりと見えた。

省吾は愛香がこちらに気づかない事を心の何処かで祈りながら、澪と繋いだ手は離せなかった。

いきなり離したら、澪が不自然に思うだろうと考えた。

ちょうど自分の右手を繋いでいたので、省吾は時計を見るふりをしてさり気なく澪との手を一端解く。

愛香が商店街の路地へ入るその時、街路灯に照らされた省吾たちの姿を彼女は見つけてしまった。

省吾は、自分を確かに見つめる愛香の視線を捉えて、踏み出す足がおぼつかなくなる。

しかし、彼女は立ち止まる事なくそのまま直ぐに視線を向き直して、歩き去っていった。

一瞬合った視線は無言のまま、まるで何分もの長い間見つめられているような気持ちだった。

彼女が入った商店街の路地は買い物客が取り巻いていて、愛香の姿はもう何処にも見えない。

「どうしたの？ 何か買う物在る？」

商店街へ続く路地を見つめる省吾に澪が言った。

「いや、何でもない……」

【19】噂

裕也は学校帰り、阿佐ヶ谷のバス停で中学時代の女友達に会った。  
「なんだ由奈、久しぶりじゃん」

相田由奈。小学校から知っている彼女は中学の時からカッコも行動も派手だった。

とりあえず高校には入ったが、願書と金を出せば入れるような学校で、それは彼女にとっては女子高生という肩書きの付いた楽園の切符のようなものでしかない。

「ああ、裕也。あんたまだシャバにいたんだ」

冗談でも彼女にそんな事を言われる彼は、素行のいい中学生でなかったのは確かで、それでも、ちよつと自己主張が強い為に時折いざこざを起こす以外は、いたって普通の中学生だった。相田由奈に比べれば。

商店街のファーストフードに入って久しぶりの会話に盛り上がる。

「あんた北高行ったんだっけ」

由奈は黒く縁取った目をクリクリさせて笑った。

「ああ、俺にしちゃ勉強頑張ったぜ」

「今は？」

「それがさ、下には下がいるもんだから、何とかドンジリにはならずに済んでるよ」

「マジで？」

由奈はげらげらと大きな口で笑うと、ジャラジャラと沢山の腕輪を着けた手をテーブルに出して頼杖を着いた。

「そう言えばさ、この前ウチのオネエチャから変な話聞いたんだ」

「なんだよ」

「なんかあ、原因不明の病気を治す為に、一度殺してまた蘇えらせるんだって」

「なんだよ、それ」

裕也はアイスコーヒを飲みながらバジルポテトを摘んだ。

「ほんとだつて。ウチのオネエチャ、病院で看護婦やってんだもん」  
「お前の姉貴、看護婦なの？」

この女の姉は昔、小学校の頃に見た事がある。彼女と六歳違いで、やけに大人に見えたものがやたら派手好きで、その流れから考えると今の由奈の容姿は至極当然だ。

「なんかあ、その病院の娘が治療不可能な病気で、一度死ぬと病状が無くなるんだつて」

「死んで蘇えらせるなんて、出来るのか？」

「ほら、心臓停まった時によくドラマとかでバチンツてやるじゃん。電気みたいなの」

「電気ショックか？」

「そうそう、アレで停まった心臓をまた動かせばいいらしいよ」

「動かなかつたどうすんだよ」

「そんんの知らないよ。動くようになってるんでしょ」

由奈は面倒くさそうにそう言つて、携帯電話を開いた。

「何処の病院で、そんな事してんだよ」

「そこまでは知らないよ。ただの噂だもん」

由奈は再び大きな口で笑うと、次の楽しい話題に移った。

\* \* \*

みのわただのり

箕輪忠典は大学病院の最上階に在るレストランで相田美智子と食事をしていた。

一階の奥に従業員食堂もあるが、お昼時間を大幅に過ぎた場合はレストランの一区画で食事をする事ができる。

「で、ミツチャンがいた時は、かなり深刻な状態だったんだね」

「うん。その娘、かなり酷い様子で、入院はしないけど、毎日病院

に来てたのよ」

美智子はそう言いながらカルボラーナをホークに巻く。

彼女はこの病院の内科に勤務する看護師で、外科の箕輪とは飲み会などでしか親しい面識は無かったが、看護師伝に彼女が以前働いていた病院での事を耳にしたのだ。

「で、今はその娘、全然病院に来てないのかい？」

「そうらしいよ。この前久しぶりにそこに勤務する友達とご飯食べたら、最近はめっきり見かけないって」

「亡くなったとかじゃないのかい」

スパゲティを頬張る彼女を前に、箕輪はカツサンドを齧る。

「だって医院長の娘さんよ。亡くなったら判るでしょ」

「そりゃそだな……」

箕輪はそう言ってコーヒーを啜る。

美智子はこの大学病院に来る以前、個人医院で働いていた。彼女がいた病院の医院長の娘は血液に関する難病に掛かっていた。

治療に携わっていない彼女にはその詳細は判らないが、治療方の無い珍しい病気と言う事は伝わっていた。

美智子とその病院に勤務していたのは、医院長の娘が小学校の時に、ほとんど毎日病院に顔を出しては薬の投与と検査を繰り返していたらしい。

その少し後に美智子は今の大学病院へ転職した為、その後の少女の事は判らなかった。

しかし、数日前に以前の同僚と久しぶりに夕食を共にして、何気ない会話の中からその少女の話を久しぶりに聞いた。

「なんかね、最近あの娘、元気みたいよ」

以前の同僚である清美は、食事の後で入った居酒屋でぬる缶のぐい呑みを片手に言った。

「あの娘って？」

「医院長の娘さんよ」

「ああ……」

職業意識の強い彼女は、看護師としての評判は上々だが、自分に  
関係ない患者の事はあまり気にならないタイプだ。

「でも、おかしいのよね」

「何が？」

「だって、完全な治療法も無いまま、一時は昏睡になったら終わりと  
まで言われて毎日血液検査をしたのに、急によ」

「何か、いい薬剤が見つかったんじゃないの？ 医者の伝で、未認可の海外医薬とか？」

「それにしてもね……最近ほとんど病院にも来ないのよ」

美智子の元同僚はマユを潜めると、小声になってテーブル越しに身を  
乗り出した。

「なんか、自宅で治療してるらしいのよね」

「自宅で？」

「ほら、機器メーカーの園辺さんそのへにいたでしょ。彼のところで、医  
院長の自宅に心拍計や除細動器やら何やらをこっそり納入したって」

美智子は清美との会話をそのまま箕輪に話して聞かせた。

その時、箕輪が彼女の話に口を挟む。

「医療機器を自宅に？」

「ええ、そうらしいよ」

美智子も彼の問いに頷く。

「何のために？」

「だから、自宅治療でしょ」

「心電図や除細動器まで？ だって薬剤とかはどうする？」

「だって、医者の家よ。何考えてるかなんて解らないわ」

箕輪は再びコーヒーを飲んで息をつく。ほんの少しの間思案を巡  
らせていたかと思うと、伝票を掴んで徐に立ち上がった。

「その病院って、確かに南澤医院なんだね」

確認する彼に向かって、コーヒーを啜りながら美智子は頷いた。

「自分が働いていた病院だもの、間違えないわ」

「有難う、今度呑みにも行こう」  
そう言った箕輪は足早にレストランを出た。

## 【20】暗闇の真実

恵比寿にある高級イタリアレストランに、愛香の姿はあった。

彼女はフランス料理よりイタリアンが好きだった。

クリーム色の壁には、シチリア島の大きな風景画が間接照明に照らされている。

「ありがとう、かなり参考になったわ」

彼女は目の前にいる箕輪忠典に言った。

蘇生して治療するという噂の、新しい情報があるからといって、彼に呼び出されたのだ。

「いや、たまたま看護師にそう言う事に詳しい娘がいて……でも、どうしてそんな噂にこだわるんだい？」

箕輪は白ワインを口にする。

彼は、以前南澤病院で働いていたという看護師から聞いた話をひと通り愛香に話して聞かせた。

「うん。だって面白そうじゃん」

愛香はいかにも好奇心旺盛な高校生らしさを強調するかのようになり、悪戯っぽい笑みで彼をみると、普段よりも長きてくつきりした睫毛を瞬きさせた。

「女子高生の考えは解んないな」

箕輪はそう言っただけ肩をすくめると

「また、食事に誘ってもいいかい？」

愛香は無言で瞳を細めると、口角を上げてみせる。返事はしなかった。

箕輪はまだ二十九歳と外科医としてはまだまだ若い方だが、愛香の父親である外科部長にも認められるほどの腕前で、執刀する数は現在院内一と言ってもいい。

高級外車も乗っているし、顔もまあまあ。白衣を脱げば、実年齢よりも三つは若く見える。

それでも愛香には今ひとつ興味の湧かない存在だった。父親の近くにいる為、彼とは自然に親しくなったが、今回のような頼み事でもなければ二人きりで食事などしないだろうと思った。

まだ、渋谷で知り合うヒップポップ崩れのノリノリの連中とジャンクフードを齧る方が楽しいだろう。

愛香は軽く頬杖を着いて、久しぶり着たミニ丈のワンピースから長く出た細い脚を、そっと組み直す。

ガラス張りのビルは互いに光を映し出して夜の街を煌々と照らしている。

黄色いポルシェボクスターのサイドシートに、愛香は脚を揃えて座ると、屋根の無い景色に光の粒を見上げた。

「何処か寄つてくかい？」

箕輪はチラリと横目で愛香を見た。僅かに巻き込む風が、彼女の柔らかな髪をたなびかせている。

「えつ？ いいよ。明日も学校あるから」

「前は平日でも遊び歩ってたんだろ」

「前はね。最近はそんな元気ないよ」

愛香は箕輪を見ずに、フロントガラスの先にある眠らない街の灯だけを見つめていた。

新宿を抜けて甲州街道を走ると高層ビル群は消え、中央には首都高速、歩道には街路灯が連なつて街路樹と共に流れる景色に次々と消えてゆく。

環七通りの三車線道路を加速して、オーバーパスを何個か越えたと青梅街道に入った。

右手に少し古いタイプのラブホがある。モーターという看板が掲げられて、通り沿いの入り口に大きなスタレの下がつている造りだ。愛香の視界にもそれは入っていたが、全く無関係な景色として捉えていた。

しかし、箕輪は素早く車を減速させるとそのスダレを潜った。

「ちよつと、何やってんの？」

次第に落ち着いた暗がりに変わって行く景色の流れを、ただ何となく見ていた愛香は、驚いて声を上げる。

「いいだろ、少しぐらい付き合ってくれても」

「なんで、噂話聞いたくらいでこんな所に付き合わないといけないわけ」

「昔はどうせ遊びまくってたんだろ」

箕輪は愛香の身体を強く引き寄せて抱き着くと、彼女のシートベルトのバックルを外した。

「ちよつと、止めてよ」

彼が無理やりキスをしようとして、愛香は慌ててそれから逃れようと身体をくねらせた。

「ほんとムリだから」

そう言って両手で箕輪の顔を掴んで押しのける。

「あの噂は本当だよ」

「えっ」

愛香の身体が停まった。

「裏をとったよ。あの病院の娘は臨死と蘇生を繰り返す事で生き延びてる。生きる為に死んでいるんだ……それがキミとどういう関わりなのかは知らないけどね」

箕輪の顔を、愛香は唇を震わせながら見つめていた。

「だけど、あそこの医院長は学会にも顔を出すほどの医者だから下手な詮索はできない。おそらく真相を知っている連中は他にもいるかもしれないよ」

愛香は後ずさりするようにボクスターの小さなドアを開けると、後ろ向きのまま降りた。

「家まで送るよ」

箕輪は立ち上がった彼女を見上げた。

「いいよ。ここまでで」

「家までまだ大分あるよ」

「いいったら、いいよ」

愛香は駆け出して、ゴムラバーで出来た大きなスタレを払いのけながら街道の歩道へ飛び出ると、しばらく夢中で走った。

100メートルほど走ってから早稲田通りへ抜ける路地を入って再び走る。

閑静な闇にアスファルトを叩くローヒールのパンプスの音だけが染み込むように、何処までも響き渡る。

大きく肩で息を着きながら住宅街の真ん中で突然立ち止まると、その静寂の中で溢れ出る涙が何故だか止まらなくなった。

善人と思っていた箕輪に突然迫られたシヨックなのか、人間の裏側を久しぶりに垣間見た恐怖なのか……それともまだ面識さえない漣を哀れに思う雫なのだろうか。

しかし、そんな漣を思う省吾の気持ちを考えてとそれが何処か不憫で、冷たい杭を胸に深く突き刺さされたような痛みを感じたのは確かかもしれない……

「シヨウ……どうして彼女を好きになっちゃったの……」

走った為に乱れる呼吸に混ざって嗚咽が漏れるのを必死でこらえながら、街路灯の照らす電柱に手を着いて、愛香はひとり肩を震わせた。

## 【21】上り坂

「しかしあんた、部活に励んでるわけでもないのによく食べるわね」  
少し遅い夕飯と一緒に食べていた母親が、省吾の食べっぷりを見て言った。

「何にもしなくたって腹は減るさ」

「バイトでもしたら？」

「ああ、でも夏のバイト代がまだ残ってるし、冬休みまでには考える」

省吾はそう言ってから「おかわり」

母親は呆れた顔で息子の茶碗を手にした。

食事が終わればサツサと自分の部屋へ戻るのが省吾の習慣だった。母親が一人で淋しくないだろうか……時折そんな事も思うが、逆に高校生にもなって母親とリビングで団欒するのも何だか照れくさい。

省吾は部屋のテレビを着けると、ベッドの上に横になった。

すると、携帯電話の着メロが鳴る。

「もしもし」

「……………」

省吾が電話に出ると向こうは黙っている。ゴオオツと車が走る騒音が聞こえた。

「愛香だろ？」

携帯の着信モニターに彼女の名前が表示されたのが見えた。

「今、暇？」

愛香の声がか細く聞こえる。

「な、なんだよ。いきなり」

「暇かなあ、て思って」

「別に忙しくはないけど……」

再びゴゴゴオオツとトラックか何かが走る音がした。

「……お前、何処からかけてんだ？」

「ちよつと外から」

「外って？」

「外は外よ」

一瞬の沈黙が二人の電話機の間を広がつて、省吾はなにげなくその向こうの夜気が発する微かな音に聞き入っていた。

「迎えに来て欲しいんだけど……」

何時もの彼女の声とは違って、愛香の声は消え入りそうだった。

「迎えって……何処に？」

少しの間があった。自分の場所が何処なのか愛香の探している気配が伝わる。

「下井草……かな」

「下井草？ 何やってんだよそんな所で」

「いいじゃん。環八真つ直ぐで来るでしょ」

「そりや真つ直ぐは真つ直ぐだけどさ……俺、チャリしか無いんだぜ」

「いいよそれで」

「いいよつて、動力が俺だぜ」

「じゃあいいよ、他当たるから」

そう言つてプツリと電話は切れた。

「何だよ、何であいつ歩きでそんな所にいるんだよ」

省吾はそう呟いてから溜息をひとつ零すと、切れたばかりの着信履歴にリダイヤルした。

夜の環八通りは意外と車が空いている。だからと言って車道を走るわけでもない省吾が早く目的地へ着けるわけでもない。

「こんな時間に出かけるの？」

出先に背中から聞こえた母親の声に省吾は

「ああ、なんか学校の友達が急用だって」

そう言つて玄関を出た。

優等生ではないが、息子を信頼している母親は「夜だから気をつけてね」と、特にそれ以上追求もしない。

省吾もそんな母親に「ああ、判つてる」と、悪びれる様子も無く応える。

水銀灯の連なる明るい歩道をA T Bで駆け抜けけると西部新宿線 of 路線を越えて早稲田通りに入る。

直ぐにコンビ二があつて、雑誌を立ち読みする愛香の姿が窓から見えた。その姿は、どこことなく切迫したさっきの彼女とは打つて變つて、のんびりと暇を潰すような雰囲気だった。

息を整えながら、思わず省吾は溜息をつく。

彼が外からガラス窓を叩くと、彼女は顔を上げて微笑み小さく手を振る。何だか判らない不安と共に全力で自転車を飛ばして来た省吾は、思わず拍子抜けして肩をすくめた。

「はい、差し入れ」

コンビ二を出て来た愛香が省吾に冷たいスポーツドリンクを差し出した。

「あ、ああ」

何だか未だに事態が飲み込めない省吾はそれを受け取ると、とりあえずキャップを開けて勢いよく口へ流し込む。

ふと彼女のこじやれたサーモンピンクのワンピースに目を留めると

「何やってんだよ、こんな所で。しかも何だかよそ行き風？」

「デート」

「デート？」

省吾は歩道から辺りを見渡して「相手は？」

「逃げて来た」

「逃げて来た？」

益々省吾には判らない。

「さあ、出発う」

愛香はそう言つて、省吾の自転車の後ろに立ち乗りして、彼の背

中をポンポンと叩いた。元々荷台のない彼の自転車は、立ち乗りしか方法は無い。

省吾は何だかぶつぶつと言いながら、自転車をUターンさせると来た道に戻った。

環八通りから路地へ入って上石神井を抜け愛香の家に向う。

「がんばれ、もう少しだぞ」

後ろで愛香が笑った。

「お前な、全部俺の動力だぞ」

緩い下りの後は緩い上り坂が待っている。省吾はそれに備えてギヤを下げた。

「うん。ごめんね」

愛香は前かがみになって、彼の背中にそつと頬を当てた。はたらく彼女の髪の毛の香りが微かに漂った。

「いや……別にいいけど……」

省吾は背中に感じる愛香の頬の温度を感じながら、石神井の緩い坂道を駆け上がる。

「あんまりくつつくなよ」

「だって、風がちよつと寒い」

「背中に口紅とか着けんなよ……」

## 【22】文化祭1（前書き）

【中間あらすじ】

電車で倒れた澪を助けた省吾は、以前から心を惹かれていた彼女と親しい関係になってゆくが、彼女には省吾の知らない秘密がある

……

臨死させる難病の治療：愛香は父親の勤務する病院で妙な噂を聞き、その真相を探った。そして彼女の胸騒ぎは当たっていた。

省吾に思いを寄せる愛香は、澪を愛する省吾を不憫に思い、涙を隠しながら彼の背中にそっと頬を着けた。

## 【22】文化祭1

キャンディーレッドに染まる雲の群れが、音も無く静かに浮かんでいる姿を見上げて、微かに漂うサツカリンの匂いを感じる。

それは、果敢なげに甘く切ない死の香り。

逆光が眩しくて視線を少しだけ動かすと、緋色の虚空そらに浮かぶシヤンパンゴールドの三日月がクレーターを露に月影を落とす。

地上は真っ白な砂丘に覆われて、二つの光に照らされた自分の影は何処にも無い。

業火に包まれた太陽と、水の精が羽ばたくような涼しげな月が共存するこの世界で、1分20秒の静寂に佇む。

生と死の境界線は限りなく曖昧で時の流れを感じない。

その永遠の中で、再び全身に息吹が沸き起こるのを、ただ静かに待つのだ。

甘い死の香りを感じながら。

年に一度、一般の観覧者が校舎の中を普通に歩き回る光景は何とも異様で、小中学生がざわめきながら廊下を行き交う姿は普段は絶対にあるえない。

文化祭の一般公開日。省吾の通う学校は、体育祭は一般公開されないで、文化祭が一般客を唯一校内に招き入れる行事だ。  
「裕也」

体育館の横に設置された屋台村の人垣から声がして、鉄板焼きそばの屋台で汗を流していた裕也は顔を上げた。  
「裕也」

再び声が聞こえると、人垣の中から相田由奈の派手な顔が現れた。

「うわあ、随分派手なのが登場したな」

横でキャベツを切っていた省吾は小さく声に出すと、微かな失笑で裕也を見た。

「お前、いまあれと付き合ってたの？」

「バカいうな。ありや中学のダチだよ」

由奈は同じように目の周りを真っ黒にした女友達をひとり連れて、裕也の屋台に近づいて来た。

「なんだよ、来るなら言ってくりやあ良かったのに」

「今朝思い出してさ」

由奈は真っ赤な唇から白い歯を見せて笑った。

「ちよろつとぶらついてくれば」

省吾が気をきかせてそう言ったが、裕也はイマイチ気乗りしない様子で

「あ、ああ」

「なんだよ、ダチなんだろ」

「そうだけどさ、アイツと校内歩くのはちょっとな……」

省吾は裕也の気持ちもなんとなく判った。

いくら派手な娘好きの裕也でも、それは限度がある。相田由奈と紹介された娘とその友達は明らかに裕也の趣味の限度を越えている。それでも仲の良かった中学の同級生だから、外で会うのは気にならないのだろ。しかし、自分の通う学校内を一緒に歩くのはまた話が違うという事だ。

上手い具合にお客が立て続けに来て、一端はその状況から逃れた裕也だったが、再びお客が引いて暇になると

「ねえねえ、少し学校の中案内してよ」

由奈が言った。

「観念して行つて来いよ」

省吾はひと事のように笑って言った。

渋々エプロンを外した裕也は、由奈とその友達を連れて、校舎の方に向かって人混みに消えた。

「あら、シヨウひとり？」

裕也が消えて間も無くすると、省吾の屋台に愛香が来た。

「ああ、今裕也はちよつと出てる。友達が来てさ」

「じゃあ、あたし手伝ってあげようか？」

彼女は妙に明るい笑顔を見せた。

「別にそんなに忙しくもないぜ」

「いいじゃんいいじゃん」

そう言つて裕也のエプロンを着けて屋台のカウンターに楽しげな愛香が入ると、やはりお客はげんきんなもので、あつという間に大学生や同年代の男が集まってくる。

「ねえねえ、何年生なの？」

「三年です」

「名前は？」

「ひ・み・つ」

「これって、彼女が焼いたの？」

「そうですよ」

「いいなあ、彼氏とかいるの？」

「さあ、どうでしょう」

愛香が店頭で焼きそばを売る間、省吾はひたすら具の準備をする。それを取つて愛香が鉄板で調理して、省吾が透明のパックに詰める。男性客は愛香にお金を払い、愛香から焼きそばを受け取りたがるから、省吾は完全に裏方に回る。

「なんて奴らだ……」

省吾は高校生以上、特に大学生つばい客のナンパじみた客に呆れて思わず溜息をつく。

「いいじゃん、売れば。けっこいい線いくかもよ。この屋台」

愛香はそう言つて、小声でぶつぶつ言いながらキャベツを切る省吾の脇腹を突くと、再びお客に愛想を振り撒く。

「お兄さん、くださいな」

屋台の横から声を掛けられた省吾は、ハッとして顔を上げた。

見慣れたお下げでないのは休みの日は何時もそうなのだが、人波から身を乗り出す彼女があまりにも違ふ雰囲気に見えて、省吾は手に取ったキャベツを箱の中に落つこととした。

「頑張ってるね。凄い混んでるし」

澪が、しゃがんでいる省吾を屋台の仕切り板越に見下ろした。

「あ、ああ。愛香の……その娘のお陰でな」

省吾は愛香を澪に紹介するべきが一瞬戸惑いを感じた。

「始めまして、神崎愛香です」

愛香は、客の合間をぬって、すかさず自己紹介すると小さく頭を下げて笑った。

「南澤澪です」

屋台の縁に手を掛けて彼女も笑う。

省吾はしゃがんだまま、少し高い位置で交わされる女同士の初対面を交互に見つめた。

「ほら、シヨウ、早くキャベツ切ってよ」

ぼんやりと二人を眺める省吾に愛香が催促した。

「あ、ああ。判ってる」

省吾は洗ってあるキャベツの葉をまな板に乗せると、ざくざくと切り始めた。

## 【23】文化祭2

昼の時間に近づいたせいか、屋台村は人の出が増える一方だった。愛香は鉄板で次々に焼きそばを焼くが、お金の受け渡しもあるし何時までも話かける大学生もいる為、何だか何倍も忙しく感じる。

「あたしも手伝おうか？」

頬につけたファンデーションを伝う愛香の汗を見た漑が、屋台の横から見かねて声を掛ける。

「えっ？」

省吾は少し後ろから思わず声を出したが、漑は屋台の後にまわつて来ると、丸椅子の上に在った予備のエプロンをサツと頭から被った。

それが良かったのか悪かったのか、省吾は横でキャベツを切りながら少々困惑してそれらを見つめていた。

大きな鉄板で焼きそばを焼く愛香と、その隣で次々に容器に詰める漑。

もはや男性客は漑でも愛香でもどちらでもいいと言うカンジで集まっている。

女子は、校内で教室を使った喫茶などに参加している娘が大半で、今回の文化祭の一押しは、三年二組と二年四組で競合しているメイド喫茶らしい。

それに反して、屋台村の出店は男子生徒が中心なのだ。

その中であって店頭に二人も女子が立つこの屋台には不順な動機ではあるが、男性客が自然に集まっていた。

省吾はもはや自分の手には負えないお客のニーズを、一歩引いた位置から眺めていた。

終いには、周囲の屋台を出している仲間も、暇を見ては省吾の屋台に顔を出す。もちろん、見慣れない笑顔を振り撒く漑に声をかける為だ。

「うわっ、すげえ混んでんじゃん」

裕也が戻ってくるなり、自分の屋台周辺の人混みを見て仰天した。しかも店頭に出ているのは女子二人。そしてその一人は私服だ。裕也は澪のお下げを解いた姿を見た事がないので、その長い髪の娘が誰なのか最初は判らなかった。

裕也は、後ろで黒子のように働く省吾に近づいて声を掛けようとした時、愛香の隣の娘が澪だと初めて気づく。

「わっ、み、澪ちゃん。何やってんの？」

「あ、久しぶりい」

澪は一瞬手を振るが、直ぐにお客の方を向いた。

「遅っせえよ、裕也」

省吾はキャベツの葉を剥がしながら言った。

「なんでうちの屋台に澪ちゃんが立ってんだよ」

「そんなの成り行きに決まってるだろ」

「ていうか、愛香までなんているんだ？」

「それも成り行き」

省吾はそう言っ、自分の持っていたキャベツを裕也に渡した。

一時間ほどすると、だいぶお客が引けてきた。体育館でのバンド演奏などが始まる時間のせいもある。

「おい、愛香。お前演奏何時からだ」

省吾が声をかけた。吹奏楽部OBも体育館で演奏がある。

「二時だから、まだ大丈夫だよ」

「じゃあ、昼飯食えよ」

「あ、あたしお弁当持って来たよ」  
澪が言った。

「あ、でもあたしも持つて来てるから」

愛香はそう言いながら、エプロンを外すと「ちよつと取ってくるね」

「シヨウちゃん、あたしのバックにお弁当は入ってるから食べて」

愛香の姿を見送った彼女は、代わりに鉄板の前に立った。

「お前、なんて羨ましい奴なんだあ」

裕也が叫んだ。

「お前だって、ラブラブで何か食べて来たんだろ」

「ああ、ケーキセットを三人分の値段でな」

省吾が弁当を広げる頃、愛香が息を弾ませて戻って来た。

屋台の後ろに置いた、本当は縁台の長椅子に腰掛けて、愛香も自分の弁当を広げる。

横で漣の手作り弁当を頼張る省吾の姿に、僅かながら複雑な思いが過る。

「なんか多くねえ」

彼女の弁当を見た裕也が言った。

「み、みんなで食べれるようによ。気が利くでしょ」

「さすが愛香」

裕也がすかさず愛香の弁当を摘んだ。

「お前は後だ。とりあえず店に立てよ」

省吾に言われた裕也は渋々、というか少し照れながら漣と肩を並べて屋台の店先に立つ。

愛香はその姿を見る振りをして、漣の後姿をマジマジと見つめていた。

……七部袖のカーデガンと花柄のスカートはおそらくマックスマ  
ーラ。カジュアルにさらりと着ているけど、どっちも一着4万円前  
後はする洋服だわ。

艶やかな黒髪は自分とは正反対で、普段三つ編みにしているせい  
か、下半分が微妙にウェーヴしている。それが何故か、清楚な中に  
漂う微かな色気にも感じた。

南澤澪……彼女が抱える病気は本当にそれほど深刻なのだろうか  
……本当に臨死と蘇生を繰り返して生き長らえているの？

愛香の思考が、この前聞いた箕輪の言葉と共に交錯した。

「髪、三つ編みじゃないと、けっこう色っぽいんだね」

「そ、そう？」

裕也が澪に妙な事を言うので、省吾は後ろから梅干の種を力いっぱいぶつけた。

「痛ってえ」

「どうした、愛香。ぼんやりして」

省吾に声を掛けられて、箸を口に着けたまま澪を見ていた愛香は慌てて振り返った。

「えっ、うつん。何でもない」

愛香はそう言って出し巻き玉子を口に入れると

「あなたにはもったいないと思ってさ」

「そ、そうかな」

省吾はそう言って立ち上がると、澪の横に立った。

「澪も少し食べるよ。俺がやるから」

「えっ、シヨウちゃん出来るの？」

「あのなあ、元々ここは裕也と俺の屋台なの」

「あ、そくだよね」

澪は舌を出して笑うと、愛香の隣に腰掛けた。直ぐに女同士で何かを話し始めると、キーの高い笑い声が聞こえた。

「なんだよ」

省吾は横目で自分を見る裕也を見返した。

「いや……そくだよな。元々男所帯だったんだよな。ここ」

裕也はそう言って残念そうに、軽く息をついた。



## 【24】文化祭3

「よう、裕也。あれ、省吾は？　ここの屋台メチャ混みだつて聞いたぜ」

クラスの斉藤健二と沼田徹がヒヤカシに来た。昼時に屋台村を通りかかった連中に、この屋台の混みようを聞いたのだらう。

「おお、健二、徹。ちょうどいい、お前らもちよつとやってみないか？」

「はあ？　やるつて？」

裕也の言葉に健二が返した。

「屋台だよ。ほら、二人共中に入れよ」

裕也は二人を誘つて、有無を言わず屋台の中に引き込んだ。

もう昼の時間もだいぶ過ぎたので、人出もまばらになりそんなに忙しくは無いが、とにかくストックで作った分は完売しなければならぬ。

それでもポツリポツリとはお客が来るので、完売も時間の問題だらう。

「なんだよ、省吾は何処が行つたのか？」

「ああ、今散歩に行つてる」

「そう言えば愛香は？　それに見知らぬ可愛い娘がいるって聞いたんだけど」

見知らぬ可愛い娘というのは、当然漣の事だらう。

この学校の生徒、特に省吾と裕也を知る者にとつて、どうして二人の屋台に私服の知らない娘が立ってお客とやり取りしているのか、非常に興味をそそる光景だったに違いない。

沼田が促されるままにエプロンを着けたのを見た裕也は

「ああ……残念だけど、その娘はシヨウの専属なんだ」

省吾は漣を連れて体育館に来ていた。

愛香が出る吹奏楽部の演奏がちょうど始まった。

「へえ、愛香さんてフルート上手だね。音色が隣の人と全然ちがう」  
省吾の隣でパイプ椅子に腰掛けている漣が言った。

「えっ？ そんなの聞き分けられるの？」

省吾には、愛香のフルートの音色なんて他の音に混ざって全然聞きとれない。楽器に口を着けているから吹いている事は判るが……それはフルートだけのパートになっても一緒に、三人いるフルート奏者の音はただの心地よいハーモニーでしかない。

「あ、あたし、少し変わってるから」

「漣も楽器やつてたの？」

「うん。ピアノを中学まで習ってたけど、それとは違うみたい」

「耳がいいんだろ」

「耳じゃないかも」

漣は正面の舞台を見ている視線を、チラリと意味ありげに省吾に向けて笑ったが、直ぐにそれを舞台に戻した。

その時、愛香のフルートソロが少し入った。

指揮者の指揮棒の動きに合わせて揺れるように、穏やかに響き渡るそれは、確かにキレイな音色だ。クラシックや管弦楽を聞きなれない省吾にもそれはハッキリと判る。

「愛香の事だから、どうせ高いフルート使ってるんだろ」

彼は両脚を組み直すと、両腕を胸の前に組んで呟くように言った。

「じゃあ、あたし帰るね」

夕刻が迫る頃、文化祭に訪れた人波は消えて、残りの僅かな一般客も出口へ向って歩いていった。

終始賑やかだった校内のあらゆる場所は、荒涼とした夢の痕と化

す。

体育脇で屋台の片付けまで手伝った漑は、他の三人に手を振った。  
「最後までいて、シヨウと一緒に帰れば？」

愛香の言った言葉に、省吾は思わず彼女を振り返る。

愛香なりの女同士の気遣いなのだろうか、彼は思った。

「うん。でも、クラスメイト同士の用事もあるだろうし。あたしは何時でもシヨウちゃんに会えるから」

漑は意味深な笑顔を愛香に一瞬向けると、今度は省吾に目を配る。  
「じゃあね」

彼女は小さな手を何度も振りながら、閑散とした屋台村の跡地を去っていった。

「漑ちゃんって、いい娘だなあ」

裕也がポツリと呟いた。

愛香は漑の視線が何だか気になって、彼女が消えた裏門へ続く体育館の先を、しばらく眺めていた。

「さて、とりあえず点呼に行くか」

省吾がそう言って、校舎に視線を向けた。部活のイベントのないものは、教室へ戻って定時まで学校にいた証拠を、専用のノートに残さなければならない。

部活のイベントがある連中は、それぞれに出欠を取っているのでその必要がないのだ。

「その前に、売り上げ届けようぜ。小銭が多いから重いよ」

裕也が、布で出来た専用の袋を手にはら下げていた。

「ああ、そうか」

裕也の後から歩き出す省吾に、愛香が駆け寄ると

「ねえ、漑ちゃんて、勘がイイとかあるの？」

「なんで？」

「う、うん。べつに……」

愛香はそう言うってから、しばらく黙って二人の後を付いて行った。あの視線とあの言葉。まるで自分と省吾が少しは一緒にいれる時

間を作ってあげる。とでも言いたげな雰囲気は、愛香の中で静かな戸惑いに変わっていた。

……あの娘は、省吾を想うあたしの気持ちに気付いているのだろうか？

愛香は、省吾や裕也とは全く違う意味合いの興味を、漣に抱いていた。

## 【25】戯れ

低く立ち込めた鉛色の厚い雲は完全に太陽光を遮り、まるで地上全体を押し潰しそうなほどに重く広がっていた。

「何時まで続ける」

南澤病院の医院長室で、大きな漆塗りの机の向こう側に腰掛けた南澤正蔵が、ザラついた声で言った。

身なりはそう大きくないが、個人病院をここまで大きくして来た自信と貫禄が、全身から湧き出ている。

未だに自身も執刀を受け持つ彼には、外科医としても一流の誇りが在るに違いない。

それは、額や目尻の小さなシワにさえ感じる。

「俺は、漚が生きるなら何度でも、何時までもやります」

この病院の外科と内科の両方を受け持つ南澤渉は、大きな机を前みなみさわあゆむに言い放つ。

磨かれた漆の光沢に、彼の姿が映り込んでいた。

「しかし、妙な噂が流布しているそうじゃないか」

「医院長は……いや、今は父さんと呼ぶべきでしょう。漚の命よりも、この病院の体裁や保身の方が大切なんですか？」

正蔵は何も応えずに、大きな椅子の背にもたれ掛ると、息子の姿を見上げた。

「ひとり娘が可愛くない親がいるものか」

「それじゃあ、放っておいて下さい。何かあれば、俺が全ての責任を取ります。医院長には迷惑はかけません」

「週に一度の臨死治療で何時までも……リセットされた症状が安定しているのは僅か一週間だぞ。その度に殺される漚の身にもなってみろ」

「死んだ方が、楽だと……？」

渉は唇を噛み締めるように言った。

「繰り返す臨死体験が、他にどんな影響を及ぼすかも知れん」

「それでも俺は、澪に生きていて欲しいんです。澪の血中成分の異常は、身体の異常ではなく、おそらく脳に問題があるんです。臨死する事によって、一時的にそれがリセットされます」

渉は漆塗りの艶やかな卓上に両手を着いた。

「それを薬効で押さえられる手段が見つかれば、彼女を臨死させなくとも治療する事が出来るはずなんです」

「それを解明できるのか？」

正蔵は前かがみになった息子の真剣な眼差しに問い質した。

「判りません……」

渉は一瞬視線を下に向けて机に映る自分の姿を見たが、また直ぐに顔を上げると

「それでもきつと解明します。妹の命を救うために、全力で。アメリカのミシガンに一人同じような症状をもった患者を見つけました。今症例の情報交換をしている段階です」

「それも、治療法は模索段階なのだろう」

「しかし、手掛かりは在るかもしれない」

正蔵は小さく溜息をつく、前屈みになって机に乗せた両手を組み合わせた。

優秀な外科医の手にしては、あまりにもありふれた指先だ。

「まあ、お前がそこまで言うなら、私は止めん」

落ち着きなく、彼は再び椅子に背を任せて、胸元で両腕を組む。

「しかし、もし澪が望んだら、その時は永遠に眠らせてあげなさい」  
非情な言葉に思えるが、それは澪自身も考えている事かもしれない。  
臨死を繰り返す精神的負担は、誰にも判らないのだ。

しかし、今度は渉が返事を返さなかった。

沈黙した視線を父親に送ると、机に乗せた両の手を離して直立する。

「それじゃあ、オペの予定が入っているので失礼します」

そう言って踵を返し、彼は大またに歩いて部屋のドアを開けた。

重いドアが閉まってから、正蔵は再び溜息をついた。それは、さつきとは比べ物にならない、地の底へ届きそうなほど深いものだった。

学校帰りの何時もの駅に電車が滑り込んで来ると、チェックのスカートからスラリと伸びた足が、車両とホームの間の小さな隙間を跨いだ。

ドアを抜けて直ぐに見えた澪に、愛香は愛想よく微笑む。

「久しぶり」

「あ、うん、久しぶりね」

澪は少し驚いた笑顔で、慌てて返す。

今日は省吾が風邪で学校を休んでいる。例によって裕也にメールを送った省吾だったが、彼は最近年上の専門学校生の女の子と付き合いだしたらしく、時折学校をサボる。

『俺も休む』

そう返信された省吾は、仕方なく愛香に連絡を頼んだ。

肩をすくめながら二人の病欠を、もちろん裕也は仮病だが……報告した彼女は、一人で澪に会って話すチャンスだと思っていた。

さり気なくチェックを入れていた二人の待ち合わせる電車の時間。それが今日こんな場面で役に立つ。

「シヨウは風邪だってね」

愛香が会話を切り出す。

「うん。そんなに酷くも無いみたいだけど、だるいから。だって」  
当然の事だが、澪も省吾の事は知っている。しかも、より詳しい容態を。

愛香はその言葉を複雑な気持ちで聞き入れて、早々に頭の隅へ追いやった。

「最近シヨウとはどう?」

「相変わらずよ」

さり気ない問いに、澪もさり気なく応えて笑う。

「澪ちゃんのお父さんて、お医者さんだつて?」

「うん、ウチが病院だから。だから兄もそこで働いてるの」

「へえ、お兄さんも医者なんだ」

愛香は笑顔を絶やさずに

「あたしのお父さんも病院に勤めているのよ」

「ああ、そうだってね。大学病院の外科部長とか。凄いやね」

澪はそう言つて、少しだけ高い位置にある愛香の顔に視線を向けて笑う。

「どうして知ってるの?」

「シヨウちゃんが前に言つてた」

「ああ、そうか」

車内アナウンスが流れて電車の揺れが減速力に変換されると、愛香の降りる駅に着いた。

しかし、彼女は降らない。せめて澪が降りる駅まで彼女と話をしようと思ひに決めてきた。

「愛香さんはどの駅?」

「う、うん。家は石神井だけど、今日はちょっと」

愛香はそう言つて落ち着かない素振りですぐに再び電車が走り出すのを待った。

「ね、ねえ」

ドアが閉まって再び電車が走り出す。

愛香は少ない時間を有効に使わなければならないという決意みたいなものに後押しされて切り出した。

「澪ちゃんは、病気……大変なの?」

「どうして?」

「え? どうしてって……何となく」

再び車内アナウンスが流れて、喧騒と慌しさが広がる。

「週に一度、あたし……りん……をして……しているの、………るんでしょ」

澪が言った言葉は、愛香には飛び飛びにしか聞き取れなかった。

「えっ？」

愛香は再び同じ言葉を聞きたくて澪に訊き返すが、彼女は黙って微笑むだけだった。

「愛香さんは、シヨウちゃんの事好き？」

「やっぱり……彼女の問いに、愛香はそう思った。」

「な、なんで？ そんな事訊くの？」

「うん。何となく」

澪は再び笑顔を返す。決定的な事を言っでは、何となくはぐらかす感じた。

愛香は窓の外に視線を向けて、遠くの家並みを見つめると

「好きって言ったら、どうする？」

一瞬沈黙があった。

愛香は微かな緊張の中で澪の姿を横目で盗み見る。彼女も窓の外を眺めていた。

「別に。どうもしないよ」

澪は視線を変えずに言った。

愛香は思わず彼女の方に顔を向けて「あたしが横取りしたら？」

「その方が、シヨウちゃんの為かもね」

車両のノイズに包まれながら、澪は外の景色に視線を向けたまま小さく呟いた。

愛香はその横顔にドキリとする。

果敢なく愁いな澪の横顔は、愛香の胸を一瞬キュツと締め付けた。

……シヨウは何時もこの横顔を見ているのだろうか。いや、きつと見ているに違いない。

ふつと振り返った澪は、瞳を細めて歯を見せずに口角を上げた。

……無理だ。何不自由なく、きわめて健康な今の自分に彼女以上に省吾を惹き付ける魅力はない。澪は確かに綺麗な顔をしているが、

美貌や可愛さとは違う何かが彼を惹き付けているのだ。

愛香は思わず見入ってしまった澪に向かって、笑みを作ると

「澪ちゃん、駅どこ？」

「あたしは江古田」

「そう。あ、もう次だね」

そう言っている間に、再び車内アナウンスが流れて減速する慣性に二人の体が同時に揺れた。

「それじゃあ」

「うん。またね」

ドアを抜ける澪が手を振ると、愛香もそれに応えて微笑んで手を振り返す。

階段の雑踏に消えてゆく澪の小さな背中を、愛香は完全に見失うまで目で追いかけていた。

## 【26】テスト前

青い空に浮かぶ雲が日増しに高くなって、気が付けば朝の肌寒さに夏羽毛の布団の中で身体を丸めて目を覚ます。

そろそろパジャマを着ようかと思いながら、まどろみの中で考える。もちろん今夜からの事なのだが。

省吾は洪々布団から出ると、制服のズボンにワイシャツを羽織って、とりあえずキッチンへ降りた。何時ものように簡単な朝食を済ませ、ブレザーの袖に腕を通して玄関を出る。

朝方に少し降った雨は路面を濡らして、所々出来た水溜りには秋晴れの空が映り込んでいた。

省吾は完璧にその水溜りを避けて、自転車を走らせる。

彼の乗るA T Bは小さな泥除けが付いているものの、激しく水を撥ね飛ばすと背中に水滴の模様を作ってしまうのだ。

文化祭が終わって少しすると、勉強嫌いの彼らには憂鬱な日々がやってくる。

「数学の試験範囲って、ここからだっけ？」

「いや、そこは一学期に出てるだろ」

休み時間、珍しく省吾と裕也が教科書を広げていた。

「やべえよ。俺今回数学で赤点取ると、期末で挽回できない」

裕也が頭をかかえる。

今週半ばから中間考査が始まるのだ。

「お前は、リーダーもそう言ってなかったか？ お前、授業サボり過ぎだよ」

「出ても変わんないって」

裕也の言葉に省吾は肩をすくめた。

「なにに、あたしが特別に教えてあげようか？」

わざわざ愛香から離れるように裕也の席にいたのに、彼女が笑顔で近づいて来た。

さつきまで教室にはいなかったもので、何処かへ行っていたのだらう。

「何処が判んないの？」

「全部」

裕也がヤケクソ気味に愛香に言った。

「じゃあ、裕也には特別な勉強方がいいね」

愛香は今買ってきた食パンとチューブ入りのチョコレートホイップを取り出した。

「何だよそれ」

省吾が言う。

愛香は「ふふん」と笑って、食パンの上にチョコレートホイップで公式を書き出した。

「はい、裕也はこれ食べな」

「何だよ、それ」

愛香の差し出す公式の書かれたパンを見て怪訝な表情を浮かべる。「知らないの？ こうしてパンに文字を書いて食べると記憶が早いんだよ」

「おまえ、それ暗記パンだろ」

横にいた省吾が言った。

「あ、当たり。判った？」

「そのネタ、前に俺、何かの漫画で読んだ」

「うそ……そうなんだ。なあんだ。詰んない」

愛香はそう言って、小さく口を尖らせる。

「なあんだじゃないよ。それってタダの食パンだろ？」

裕也は、愛香の手からパンを取ると

「ていうか、購買に食パン売ってねえし、どこから買って来たんだよ」

そうボヤいてパンを一気に口へ入れた。

「あ、じゃあ何で食べんのよ」

「食えるもんはとりあえず食うよ」

愛香は裕也の顔をみて頬を膨らませた後、省吾の方を向いて笑みを浮かべる。

「シヨウも食べる？」

省吾が肩をすくめて頷くと、彼女は何だか楽しそうに、再びパンの上に数学の公式を書いた。

帰りの電車で省吾は、漣と肩を並べて揺られていた。

「漣のところは、試験問題も難しいんだろうな」

「どうなのかな？」

漣の学校も明後日から中間考査にはいる。だいたいどの学校も今週半ばかり土日挟んで来週の頭までが日程となる。

「試験中はずっと勉強？」

「うん……どうだろう」

漣は少し曖昧に答えて省吾の顔を見上げると

「シヨウちゃんは？」

「俺は、それなりにヤバイのだけ頑張って終わり」

「じゃあ、あたしといっしょだ」

「ヤバイ限度が全然違っただろうけど」

漣の笑顔に向って省吾が言った。

翌日は二人共午前授業なので、この日の省吾は潔く帰宅して試験勉強を齧る事にした。

明日一緒に昼ご飯を食べる約束をして、駅で漣に手を振る。

次の日、午前中で授業の終わった省吾は、下り電車に乗って漣の待つ駅へ向かう。

ひばりが丘にパスタが評判の店があると言って漣が行きたがった

為、この日は珍しく下る事にした。

漣の待つ隣の駅に着くと、彼女と同じ制服がうじゃうじゃと駅を占領していて、省吾は思わず圧倒される。

部活などが休みの今日は、下級生も含めて一斉に下校しているのだろつ。

漣は省吾を見つけて、一緒にいた英美に手を振ると素早く車両に乗り込んだ。

「すごいな、圧倒された」

「今日は部活も休みだからね。何時もはもっとまばらよ」

漣はそう言つて、走り出した車窓から見慣れない景色を眺めた。

漣が乗ってから一駅。直ぐに電車を降りる。

「じゃあね、漣」

駅の改札を抜ける時に、彼女の学校の生徒が手を振ったので、漣も笑顔を返す。同じ車両の少し離れた場所にいた二人組みのクラスメイトだった。

駅の階段を降りきった時、美容院のティッシュ配りをさり気なくかわそうとした省吾だったが、漣は差し出されたそれを受け取った。「こういうのは持つてると重宝するでしょ」

女性と男性の違いなのか、省吾は一切こういう物を買った事がない。街頭で配るものを貰ってもただ邪魔になるだけだし、普段からポケットにハンカチ代わりのバンダナが入っているが、ティッシュなど入れてないのだ。

デカイ家に住みながら、街頭で貰ったティッシュを嬉しそうに鞆に入れる彼女の姿を、省吾はちょっと不思議な気持ちで眺めた。

駅前の狭い商店街を抜けた閑静な場所にイタリアンパスタの店があった。

店頭にはイタリア国旗柄の小さなパラソルが立てられて、お勧めセットなどが書かれたボードがイーゼルに立てかけてある。店内に入ると、お昼時は過ぎたが、まだ席は半分以上が埋まっていた。

奥のテーブルが空いていたので、窓際のそこへ二人は腰掛け、一

緒にメニューを眺める。

「スパゲティーってこんなに種類あるんだ」  
省吾が呟いた。

「あたしも、半分は知らないよ」

「ナポリタンって無いの？」

省吾はメニューの裏まで眺めて言った。

「あれはイタリアには無いのよ」

澪が微かに失笑して、それでも楽しそうだ。

「そうなの？」

「そうよ」

あまり聞いた事の無い名前のパスタも多く、二人は結局メニューの写真を頼りに注文した。

窓の外は住宅街とも繁華街とも言い難い曖昧な景色が在るだけで、どうしてこんな所にお客が沢山集まるのか少し不思議だったが、パスタは確かに美味しかった。

## 【27】残り香

テストが始まるともうまな板の上の鯉だ。翌日の必要科目を一夜漬けで頭に叩き込むしか方法は無い。

二日目の金曜日、テストが終わって軽く裕也と雑談を交わす。彼は直ぐに時計を見ると

「じゃあ、俺急ぐから」

そう言って小走りに教室を出てゆく。

どうやら専門学校生とうまく言っているらしい。

省吾も帰ろうとして、他の連中と教室を出ようとした時、愛香が声をかけて来た。

「あ、先に行ってくれ。じゃあ」

彼は他の友人達に軽く手をあげる。

「明日、澪ちゃんの治療の日、だよな」

「あ、ああ」

「澪ちゃんには、何か訊いてみた？」

「いや、前に少し訊いて以来は、訊いてない」

愛香は妙に眉を曇らせるように笑うと

「訊いて見た方が……よくない？」

「何でお前がそんなに気にすんだよ」

「だって……ほら、この前の文化祭で仲良くなったしさ……」

愛香はそれだけ言くと、足早に教室を出て行った。

「今日はテスト、何だったの？」

「古典と数学。そっちは？」

「リーダーと世界史」

試験中の学生らしい会話が飛び交う。

試験が始まって二日目の金曜日。試験中は学校が早い為、それだけ考えれば嬉しいのだがテストという現実問題を考えると、思いは複雑だ。

それでもテスト前日から省吾は澪と毎日お昼を一緒に食べて、二人の時間を過ごしていた。

毎週金曜日は省吾にとって何度も心の中で質問を繰り返す日でもあった。しかし、それを澪に直接言う事は出来ない。

半分は彼女を困らせたくないという気持ち。残りの半分は恐怖だ。真実を知る恐怖がそこにはある。

彼女が口に出したがない土曜日の治療とはいったいどんなものなのか……省吾は毎週のように平静を保ちながら、心の奥で考える。今日愛香に言われた事が無性に引つかかる。彼女は澪の事を何か知っているのだろうか……

省吾の心は揺れた。

「あ、明日は……また、治療の日だね」

省吾の言葉に澪は明るく「うん」

まるで、決まった習い事でもしていて、それに通うような素振りだ。

そんな彼女の表情が、一日会えない理由とあまりにもかけ離れているのだ。

「どんな治療なの？」

省吾は躊躇いながら訊いた。

澪はさり気なく視線を逸らして窓の外の風景を眺めた。

「そんなこと訊いてどうするの？」

「いや、どうするって……」

省吾は澪の応えに困惑した。

「知りたいだろ。澪がどんな病気なのか。どんな治療を受けているのか」

「知っても、ショウちゃんにはどうにもできないから」

「けど……」

その時、漣に手を引かれて彼は電車を降りた。省吾の降りる駅だった。

「今日は何か買って、シヨウちゃん家でお昼食べようか」

水色の空に浮かぶ白い雲は、千切れた木綿のように薄く広がっていた。外の明るい光が入らないように窓のカーテンは締め切って、それでも薄っすらと陽光が部屋の中を照らし出す。

机の上で開いたままのラップトップやそこに伸びるアーム式のデスクライト、20インチのテレビや漫画ばかりが入った本棚。それらが黒いオブジェとなって時間が止まったように佇んでいる。

「恥ずかしいから」そう言った彼女の要望を聞いて、省吾は部屋のカーテンを閉めた。

昼間なのにほの暗い部屋は、それだけでドキドキと鼓動が高鳴り、敏感になった嗅覚は、彼女の生きた香りだけを捉える。

漣の静かなブレスが省吾に届いた時、彼は彼女を抱きしめた。

二人きりのほの暗い部屋で、漣は省吾に抱かれるまま、黒い三つ編みを振り解いた。

省吾は漣と結ばれるのはもつとずっと先だと思っていた。「冗談交じりのダメ元でやりたい素振りなどを主張して見せても、それは本気ではなく、彼女がそう簡単にキスの先へ事を進めてくれるなんて思っていなかった。

もっと時間をかけるか、何か彼女の踏ん切りを見極めるしかないと思っていたから。

「なんで……？」

「わかんないよ。別にしたくないわけじゃなかったし」

「そ、そうか」

二人は薄いタオルケットと一緒に包まって肌を寄せ合っている。  
「きつと勇氣の出せる日を探してたんだよ」

漑はそう言つて省吾の頬に唇を着けた。

薄っすらとカーテンを抜ける弱い明かりに照らされて、二人は再び唇を合わせた。

その夜、省吾は勉強が手に付かない。肝心のリーダーの訳を丸暗記する必要があつたが、全然そんなものが頭に入る余地が無い。

心の中で何かが弾けた様に熱く輝いて、身体の内側から真夏の陽差のようにギラギラと全てを照らし出す。

鼻孔に残つたような漑の全身のあらゆる匂いが鮮明な記憶となつて蘇えると、じつとしていられない思いが彼の身体を刺激して、月曜日分のテスト勉強をしようと机にへばり着く省吾を尽く妨害するのだ。

集中しようとするが、5分と立たないうちに午後のほの暗いこの部屋での出来事が、あまりにも鮮明に蘇えり、それを振り払うのに再び時間を要する。

今日はいくらやつても無駄だ……土、日があるさと諦めて、椅子から立ち上がりベッドに倒れ込む。

漑の残り香が省吾の鼻孔を再びくすぐって、脳裏に果てしなく甘い官能を蘇えらせた。

## 【28】土曜の朝

水面に映る蒼い空とそこに浮かぶ白い雲。水際から枝を伸ばして緑の葉を茂らせる樹木は、いったい何の木なのか。

小波が揺らす空は何処までも青く澄んで、まるで湖に広がるそこが本当の虚空のようだ。

揺れる雲が動いて消えると、再び違う雲が姿を現す。

二つの虚空を分けるように間に広がる黄緑色の世界は、眩い光に照らされて魂を喰らい、それを葉緑素に変えているのかもしれない。満天の星空の舞う漆黒の世界が、時には樹海に浮かぶ二つの空に変わる。そして、紅い黄昏に染まる太陽と月が共存する幻想の世界。そのどれもが、自分の鼓動さえ聞こえない静寂の中にある。

バンツ、と音を立てて景色が震えると、突然風の音が聞こえる。それが、自分の発するブレスの音だと判ると途端に激しい喧騒に包まれる。

鼓膜の奥から響く激しい脈動は、蘇えった鼓動の波に煽られて全身に温度を分け与える。

凍えた魂は再び息吹を起こして、1分20秒間の生と死の小さな隙間に囚われた時間は終わりを告げる。

次の日の土曜日、省吾は朝の早い時間に澪の家の近くにいた。

……澪はいつたいどんな治療をしているんだ。

自分の家の病院へ通うのだろうか。

省吾はそれを確かめたいとか、そんな確固たる思いがあったわけではないのだが、家にじっとしていられずここまで来てしまった。彼女に会いたい思いはあるが、押しかけてまで会うつもりも無い。

今まで土曜日は会えないのが当たり前で、それは澪と知り合って早い時期に知った事だし、自分の無理な要望が通るレベルの話で無い事も知っている。

しかし、昨日の行為が澪をより身近に感じさせて、もっと近くにいたいと思わせたのは確かだ。

朝の風景に見る大きな建物はまた違った雰囲気で、周囲の家並みに比べてもそのデカさは一目瞭然だった。

省吾は百メートルほど離れた通りの路地に佇んで彼女の家を眺めていた。

今それ以上近寄る事は、裸体を見る以上に彼女の聖域に立ち入るようで躊躇われた。

「行かないの？」

後から急に声がして、省吾は慌てて振り返る。

見慣れた顔だが見慣れない髪型。何時もはしない、まとめ髪にした為に露になった首筋は、日焼け跡も取れてもう大分白くなっている。

「あ、愛香」

後ろには愛香が佇んでいた。

「お前、何してんだ。こんな所で」

「た、たまたま通りかかってさ」

「たまたま？」

愛香は省吾の家の近くでうろうろしていた。何となく彼の気配を近くを感じたくてそんな行動をとったのは、今の省吾と同じ気持ちからかもしれない。

そんな時、思いがけない時間に家から出て来た彼の姿を見て、それを追って来たのだ。

しかし、そんな事を正直に言えるはずも無い。

「こ、この近くに昔の友達がいるのよ」

「へえ」

省吾は何だかよく判らなかったが、とりあえず頷いた。

「行かないの？」

再び言った愛香の言葉に、省吾は白を切る。

「行くって、何処に？」

「あそこ、漑ちゃんの家なんでしょ？」

「何で知ってんだよ」

「あんたがじつと見てるからよ。あんな大きな家、普通じゃないじゃん。いかにも医者のお宅って感じ」

「別に、家を訪ねようと思って来たわけじゃないよ。俺もこの辺に用事があったさ」

彼はあくまでも言を構えた。

「こんな午前中に？」

「いいだろ、別に」

省吾はそう言っ、漑の家とは反対方向に歩き出す。

「ついでに寄ればいいじゃん。あんた、彼氏なんでしょ」

「だって、今日は治療の日だぜ」

省吾が駅に向かって歩く後を、愛香が足早に追いかけた。

「じゃあどうするの？」

「どうするって？」

「もう帰るの？」

愛香の言葉に、省吾は応えなかった。

彼女は不意に立ち止まると

「じゃあ、あたし彼女の家に顔出してくる」

そう言っ、踵を返し、ズンズンと漑の家に向って歩き出す。ロー

ライズのタイトなジーンズは、彼女の長い脚を強調していた。

「えっ、ちょっと」

省吾が振り返ると、愛香はどんどん漑の家の方へ歩いて行くので、慌てて彼女を追いかけて肩に手をかけた。

「おい、やめろよ。何でお前が行くんだよ」

「だって、あたしだって友達だし。別にいいじゃん」

「今日は止めておけ」

省吾は真剣な顔で言った。

愛香も本気で彼を困らせるつもりは無い。

「……わかったわよ」

彼女はようやく身体の向きを変えると「じゃあさ、これから何処に行く？」

省吾に顔を突き出すように微笑んだ。

「何処かって、何処に」

「うっん、何処でも。どうせ一日暇なんですよ」

愛香はそう言って、省吾の手を引いた。

本当は手のひらを掴みたかったが、勇気が出ずに彼の手首を掴んだ。

「ていうか、お前、パンツ見えてるぞ」

ローライズのベルトループには太いダブルホールのベルトが巻かれ、ミニ丈のトップスとの間には大分白くなった背中が露出している。

上に羽織った白いデニムジャケットもショート丈なので、あまり役には立っていない。

「ムラムラする？」

「いや、別に……」

「見せパンだよ。いいでしょ、学校では見れないんだし」

「つつか、背中寒くないのか？」

「べつにいい」

愛香は省吾の手首を掴んだまま、歩き続ける。

省吾は少し諦めた表情で小さく肩をすくめて彼女の横顔を見つめると、愛香に引かれるまま駅への道を歩いた。

……どうせ、ここでもんもんとした時間を過ごしても仕方が無い。一人でいるよりかえって気も紛れるだろう。

そう思いながらも通りの角を曲がる時、省吾は名残惜しそうに遷の家を一度だけ振り返った。

その彼の頭越しに、愛香も遷の家を一瞬だけ見つめた。

沈黙した佇まいだけが午前中の陽の光に照らされて、大きなバルコニーの手すりが銀色に光っていた。

## 【29】つかの間

「おう、愛香。なんや、新しい男できたん？」

金髪に色白肌で、真つ黒なマスカラに塗られた睫毛がバタバタと瞬きして笑っていた。

省吾と愛香が一緒に出た池袋で真琴が声をかけて来たのだ。

池袋を彼女が歩き回っているのは珍しい。普段は渋谷辺りをうろつく事が圧倒的に多いのだ。

肩にはブランドショップでくれるショルダーの紙袋をぶら下げて、ギラギラした長い爪がそれを掴んでいる

中学からの愛香の遊び仲間で、現在吉祥寺の高校へとりあえずは通っている彼女だが、あまり学校へは行っていないようだ。

真琴は中学一年の時に大阪の堺から東京へ越して来たが、未だに関西弁は抜けない。

「そんなじゃないよ」

「そうやな、愛香にはちよつと地味か」

「そんな事……」

愛香は思わず否定しそうになって、口をつぐんだ。

省吾は濡から見ればちよつと素行が悪く映るが、遊び慣れた愛香やその仲間から見れば、どうと言う事のない平凡な容姿だ。茶髪だつて、今時その辺にゴロゴロしている。

寧ろ、ジーンズを下げずに普通に履く省吾は、地味に映るのかもしれない。

確かに中学の頃は彼も周囲の流行に倣うようにそんな履き方をしていた。しかし、そんな姿が何だか情けなく見えるようになってからは、せいぜい腰骨にベルトが掛かるような履き方しかなかったのだ。

真琴は、少し慌てる愛香の様子を見透かしたように

「あれれ？ 愛香って、もしかしてこんなのがタイプなん？」

「こんなのって、なんだよ」

二人の会話に耐えかねた省吾が声をだした。

「だって、愛香ってば昔からいい男に声掛けられとつても、ぜんぜんその気にならんし。そうか、こんなんが好きやったんか。そうかそうか」

真琴はそう言つてほくそ笑むと、一人で納得して頷いた。

「それより、真琴。午前中にこんな所にいるって事はさ」

「その通り。オールやったよ」

「一人？」

「さつきまで、知恵とか夕菜とか一緒やったけど、なんか親からこつち携帯掛かつて来て、渋々帰つて行つたわ」

真琴は喋り続けた。

「凄かつたでえ。携帯耳から放しても、ムチャクチャ声が聞こえて来んねん。あたしまで怒鳴られてる気分やったわ」

「これから、また何処か行くの？」

彼女の話が一瞬途切れた瞬間に、愛香は声を差し込む。

付き合いが長いので、話の入れ替え所は踏まえているのだ。そうしないと、彼女が何時までも喋り続ける事も知っている。

「そうやな。あたしもいつたん帰ろうかと思つてんけど、金なくつてさ」

「そんな事だろうと思つた」

愛香は真琴に笑みを送ると、小さなリュックから財布を取り出して二千円を彼女に渡す。

「おい、愛香」

二人の事をよく知らない省吾は、簡単に金を手渡す彼女に不信感を覚える。

「いいのよ。貸すだけなんだから」

真琴は借りた金は絶対に返す娘だった。それだけは知り合つた頃から変わらない。だから愛香も信用できたし、一見いい加減に見える付き合いの中で何故か繋がりを保てているような所があった。

もちろん、気が合うのが一番なのだろうが。

「ありがとう。今度何時出てくる？」

「ううん、あんまり最近出てないしなあ」

「ほな、次の週末ご飯でも食べようや。そん時返すから」

「うん、いいよ」

「ほななあ」

「じゃあね」

真琴は駅へ向って雑踏に消えていった。

「おい、彼女何時もあんななのか？」

「そう……かな。あんな感じ」

「あんな簡単に金かして大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。彼女は必ず返してくれるから。だから信用できるの」  
そう言って、愛香は歩き出した。

ファミレスで安い昼食をとり、映画を観てからあちらこちらで時間を潰して池袋駅に戻って来たのは、もう夕暮れが迫る頃だった。

駅周辺には土曜出勤から帰宅するサラリーマンとこれから遊びに出て来た連中とが交錯して人混みを作っている。

「ねえ、もう帰る？」

「えっ、だってこれからどうするんだよ」

愛香は省吾にそう言われて一瞬押し黙る。

「澪ちゃん、もう治療終わったのかな？」

場を誤魔化すように愛香は切り返した。

「ああ、たぶんな。でも、どうせ今日は外へは出られないんだ」

「そうなの？」

「一応、一日自宅療養になるらしい」

「そう……」

心停止させるのだから当然だろう。いくら、上手く蘇生できても、24時間はその後の経過が気になるはずだ。

愛香はおぼろげな知識で何となくそう思った。

「ねえ、シヨウは夜遊びに出たりしないの？」

「中学の頃は夜な夜な出た事もあるけど、逆に今は用事が無けりや出ないな。裕也と飯食ったりはするけど」

「じゃあさ、夕飯まで一緒にいようよ」

「でも、俺金無いぜ」

「しょうがない、夕飯くらいおごってやるか」

愛香はそう言っ、省吾の腕にもたれかかるように掴まった。

「いや……別にそうしてもらわなくてもさ」

省吾は息をついて視線を逸らすと、彼女の細い指の感触を腕に感じていた。周りに同級生がいないと、どうも調子が狂って上手く切り返せない。

それでもただのクラスメイトだから、飯や映画くらいはいいかと、半ば彼も考えていた。

夜に繁華街を歩くのは省吾にとって久しぶりだった。

最後に来たのは、夏休みに裕也に誘われてインディーズバンドのライブに出かけた時だ。

新宿の飲み屋の前で酔っ払いの喧嘩に巻き込まれそうになり、二人で駅までダッシュした事を思い出す。

つかの間の恋人同士のようにさ迷う二人の時間が、省吾にはゆつくりと、愛香には足早に過ぎて行った。

「今日は有難うね」

帰りの西武線に乗って二人が何となく無言のまま窓の外を見ていた時、愛香が視線を動かさずに言った。

「いや、別にいいけど」

省吾は、少しマジ顔の愛香を見て思わず言葉に詰り、視線を再び外へ向ける。

ちよっとわがままにリードしようとする彼女が自然で、それに引つ

張られる日常が当たり前のような気がした。

「毎週土曜日はあたしと……なんて無理だね」

窓の外を眺めながらそんな事を呟く愛香の横顔を、省吾は盗み見た。

線路沿いに連なる街路灯の明かりが次々と彼女の瞳に映り込んで、真横に流れる涙のように見えた。

しかし、省吾がそれに答える事は無かった。

彼女が降りる駅に着くアナウンスが流れると、電車は減速して周囲の人混みが一斉に斜めに身体を揺らす。

ガタツと止まってドアが開くと、愛香は

「じゃあ」

そう言って笑顔を省吾に向けたままホームに足を降ろした。

「ああ、またな」

省吾は自分でも驚くような声を出して周囲の視線を浴びたが、ホームへ降りた愛香がそれに応えて手を振ったので何も気にならなかった。

ただ、走り出した車内で俯く自分が、少しだけ空虚に思えた。

【30】夢（前書き）

【第30話】は澪の一人称でお送りいたします。

## 【30】夢

私は時々夢を観ます。

それは限りなく鮮明なわけでもなく、朧気でも無い、きわめて曖昧でしかもリアルな夢なのです。

何時からそんな夢を見るようになったのか……きっとあの頃からに違いない。

海で溺れたのが始まり……いえ、私にはこの方法でしか今を生きれないのです。

何度も死んで、何度も蘇える。

あの幻想的な死の淵に佇むと、見えてはいけないものが見えるのかもしれない。

眩しい太陽が謎めくオーロラの光が、いえ、もしかしたあの秘密めいた大きな月の輝きが、私の中の何かを呼び起こさせるのかもしれません。

白い靄もやの中で電車で揺られていた私は、学校の友人と話し込んでいました。

しかし、気がつくと隣には誰もいません。

友達だけじゃない……下校時間のはずだというのに、電車の中は閑散として靄もやの中で吊革がゆらゆらと静かな振動に揺れていました。他には誰の姿も見えません。

私は急に景色が歪むのを感じました。

電車内の靄もやは急激に濃度を増して私を包み込みました。

目の前は真っ白になって、自分の立ち位置を見失った私は、平衡感覚までも失って倒れました。

バタンツと大きな音が聞こえました。

それは、私が床に倒れた音です。

意識が遠のいてゆく中で、誰かの気配を感じました。

靄に包まれて姿はよく見えません。

少し大きな温かい手が、私の身体に触れました。

「大丈夫？」

優しい声……その記憶はあっても、声自体は覚えていません。

浮遊感を感じて、私は移動していました。

誰かが私の身体を持ち上げて抱きかかえているのは解りましたが、やはり靄が濃くて腕の辺りが僅かに見えるだけでした。

私は自分が目を開けているのか瞑っているのか解りません。

さつき意識が遠のいたのだから、気絶しているのでしょうか……それとも、とつくに目が覚めて、抱きかかえる誰かを見つめているのでしょうか。

自分の身体の陰になって見えないはずの、誰かの腕時計が見えました。

男物の時計を右手首にかけているのが見えて、私を抱える誰かは男の人なのだと解りました。

どうして、最初の声で気付かなかったのでしょうか……

事務室のような、スチール用品を沢山置いた独特の匂いを感じて目を静かに開けると、人の気配が数人感じられました。

でも、そこが何処なのか私には解りません。

少しだけ視線を動かすと、彼の身体が胸から下だけ見えました。

靄は晴れているのに、なぜかソフトフィルターでもかけたように

霞んで、彼の右手の時計だけがハッキリと見えました。

何故か、周りの景色は灰色で、何も見えません。

彼の話し声が聞こえました。

確かに私を抱き上げた彼の声だと判るのに、その声の記憶がありません。

再び目を閉じた私は、カーテン越しに陽の光を感じて夢から目覚

めるのです。

私には北原省吾という彼がいます。

彼と初めてのキスをした夜、私は再び夢を見ました。

灰色の空の下で、誰かがショウくんを追いかけていました。

背景もショウくんも白黒なのに、彼を追いかける誰かの髪の毛だけはダージリンティーのような綺麗な色を靡かせていました。

女性だと言う事がわかります。

ショウくんは歩いているだけなのに、走っている彼女は彼に追いつく事はできません。

灰色の景色には、木が生い茂っていました。

よく見ると、足元はドライアイスを敷いたように煙ってよく見えません。

それに、ショウくんを追いかける彼女の顔が何故か見えないのです。

ショウくんの顔は見えて、彼女の顔もこちらを向いているのに、目鼻がみえません。

本当にこんな人がいたら怖いはずなのに、私は平然と彼女を見つめていました。

「ショウ！」

彼女はショウくんをそう呼びました。

親しい誰かなのでしょうか。どうしてショウくんを追いかけるのか、その時の私には解りませんでした。

ショウくんはちょっとだけ後ろを振り向いて、再び歩き出します。私が一番気になったのは、彼女はショウくんに追いつけないかわりに、決して離れない事でした。

一生懸命追いかける彼女とショウくんの距離は一定でした。

紅茶色の綺麗な長い髪が、頬に纏わり着きながら後にはためいていました。

その時ショウくんは私に気づいて

「よう、元気なのか？」

そう言いました。

後にいた彼女の姿は、消えていました。

白黒の木が生い茂る灰色の木洩れ日の中で、私がショウくんと手を繋いだ時、目覚ましの音が聞こえました。

私は時々夢を見ます。

鮮明ではないけれど、臆気でもない……そして、夢の中の誰かとは、後に必ず出会うのです。

死の淵をさ迷う自分には、それまで見えなかったものが見えるのです。

### 【31】地下室

日曜日、省吾は再び江古田の駅で降りて澪の家に向う。今度はちゃんと門扉を開けて彼女の家に入った。

みんな出かけてるし、勉強するといつても一日中するわけではないのでよかったら来ないかと、澪の方から誘って来たのだ。

玄関を入ると、毛むくじらの黒い物体が床を飛び跳ねるように足を滑らせながら走って来た。

澪の言っていたミニチュアダックスのヨッシーだ。

胴長のわりに足が短い為、身体の長い毛が床に着いてまるでモツプのようだ。

省吾に対してもやたらシッポを振って、鼻面をひよいひよいと動かすので、何だか愛着が湧く。

「ずいぶん人懐っこいんだね」

「ヨッシーは座敷で飼っている割には、人見知りしないのよ」

澪はそう言って笑うと

「きつと泥棒が入ってもシッポを振ってるかも」

初対面の自分にこれだけシッポを振るのだから、ありえるだろうと省吾も笑って見せた。

澪の部屋で話をして、自分の教科書を広げる。

ついだから試験勉強も少ししようと思ったので、とりあえず持って来たのだ。

まあ、遅れを取り戻すにもいいかもしれないと、省吾もリーダーの教科書とノートは持って来た。

澪はとりあえず教科書を眺めると

「これ今やってるの？」

「あ、ああ。そうだけど。なんで？」

「う、ううん。ウチでは二年の時に使ったページがあるから」

そこまで授業に差があると思っていなかった省吾は、言葉が出な

かった。

「じゃ、じゃあさ、これ訳が解んないんだけど書いてくれよ」

省吾は授業で聞いていなかった部分やノートを書かなかった部分を澪に訳させて、それを何度も復唱した。

一時間もしないうちに省吾は段々飽きてくる。まだ丸暗記できたのは3分の1ほど無い。

澪は省吾のノートに挟んであった英語の小テストの問題を見つけて、面白そうに眺めている。基本的に勉強の好きな彼女は、問題用紙などを眺めるのが好きなのだ。

「な、なあ」

二人はソファに寄りかかって床に直に座っていた。そして省吾は澪の腕を掴む。

澪は彼の行動の意味を察して

「ほら、まだぜんぜん覚えてないでしょ」

「大丈夫だよ。後は家で一夜漬けるから」

そう言っただけをラグの敷かれた床に押し倒す。

彼女も別に嫌な訳では無いので嫌悪は感じないが

「ダメよ。昨日治療したばかりだから……激しい事はダメなのよ」

「そつとするから」

「ダメよ、息が荒くなっちゃうでしょ。心拍も上がるし」

「それは澪が感じ……」

澪は省吾の頬つぺたを両手で摘んで横に引っ張った。

「あいたたた……」

省吾は彼女の細い指で頬つぺたを引っ張られたまま発する言葉を変えた。

澪はそのまま素早く彼の唇に自分の口を着けると、フレンチなキスをして

「今日はこれだけ」

そう言っただけで目を細めて微笑む。

省吾は、彼女が別に嫌がっているわけではないのだと思うと、無

理に迫る事を止めた。病気の治療があつたのだから仕方がない。

……て事は、これからも日曜日はダメなのか……

省吾はそう思いながら、テーブルの上に置かれたアイスティーのグラスを手にした。

暫くたつた頃、省吾はトイレに行くといつて部屋をでた。二階の突き当たりに在るといわれ、一階と二階にトイレが在る事を知る。

トイレの帰りに何かの気配を感じて階段の下を覗くと、ヨッシーがいた。

下から見上げる彼に、省吾は思わず階段を下りて触りに行く。

省吾が階段を下りてゆくと、犬は喜んで廊下をぐるぐると小さく回ったりして、彼に着いては離れを繰り返す。廊下の床が滑るらしく、時折転びそうになるのが見ていて愉快だった。

その時、省吾はふと階段の直ぐ横にあるドアに目が行った。漑が地下室と言っていた、真上を階段が通っているドアだ。

……地下室ってどんなだろう。ちゃんと部屋のようになっているのか、それとも物置みたいなものなのか？ ワインセラーが並んでいたりするのだろうか？

彼は不意に異常な興味に駆られて、気づいた時にはドアのノブを左手で掴んでいた。

漑の家とは言え、赤の他人の家だ。勝手にドアを開けていいわけが無い事は省吾も十分に判っている。しかし、妙な好奇心は消えなかった。

……誰かの寝室ならともかく、地下室だ。ちょっと見るくらいどうと言う事はないだろう。

省吾は掴んだ左手に力を入れた。が、その時

「やあ、キミがいたのか」

声がして、省吾は慌ててドアノブから手を離すと、振り返ってヨッシーに向って屈んだ。彼と遊んでいるふりをしたのだ。

それから声のした方を見る。

「ヨッシーが一人で走り回ってるのかと思ったよ」

漣の兄である渉が廊下の奥で笑顔を覗かせていた。おそらく位置関係や雰囲気からダイニングだろうと思った。

「あ、今日は……」

省吾はとつさに笑みを返す。

ヨッシーは渉に呼ばれると、ツルツルの廊下を少し滑りながら駆けに行った。

「ケージに入っていたはずなのに、勝手に出たんだな」

犬を抱き上げながらそう言つて、渉が省吾に近づいて来た。

「あ、すいません。勝手に。トイレに来たら犬がいたもので」

「いや、遠慮はいらないよ。漣は上？」

「あ、はい。じゃあ俺戻ります」

省吾は片言を交わして、階段を上がった。

渉は彼の影が見えなくなるまで、階段の上を見つめていた。

### 【32】不審な行動

「実はあたし、今困ってて……」  
布団を肩まで引き上げた友恵ともえが言った。

「なに？ 俺に出来る事なら力になるけど」

裕也は、高校生とは思えないセリフだなと自分でも思いながら、そんな言葉を声に出して言った。

「本当に？」

「あ、ああ。俺に出来るならね」

確認するような彼女の笑みに、裕也は少しだけ声のトーンを下げた。

川島友恵は裕也が半月ほど前から付き合っている専門学校生で、彼女は彼よりも二つ年上だ。それでも小柄な友恵と並ぶと、背の高い裕也は、とても高校生には見えなかった。

「実は、学費が足りなくてさ……」

「仕送りとか、貰ってないの？」

「学校の分だけね。でもここの家賃とかは全部バイト代で払って……」

実家が群馬にある友恵は、上京して一人暮らしをしている。

「ほら、服飾の学校って教材にけっこうお金掛かるから、急に必要になったモノとか買う余裕はなくて、先月分の家賃が未払いのままです」

友恵はそう言ってベッドに起き上がると、少し俯いて見せた。

「いくら？」

「ここの家賃丸々だから、六万円」

「六万かあ」

そう言っただけ裕也も起き上がったが、彼女はそれに被せるように

「そ、それと……今月分もマズイんだ」

「今月も？」

「夏休みの課題に使った教材がけっこう在って、そのしわ寄せがけっこう来ててね」

「全部で十二万？」

裕也は小さく息をついて再び枕に頭を乗せる。

友恵はその彼の胸に頬を着けると

「あたし、ヘルスにでも行こうかな」

「だ、ダメだよ。そんなの」

友恵は新宿の小さなクラブでホステスをしている。

「でも、裕也にはお金のこと無理でしょ。ウチの実家、商売が上手く行って無くて、これ以上お金の事は言えないし……」

「何とか考えるさ」

裕也は白い天井に嵌め込まれた照明器具を見つめて、呟くように言った。

「ねえ、裕也は今日も休み？」

朝の教室で、愛香が省吾に声を掛けた。

「ああ、メールが来た。今日は午後から来れたら来るって」

「先生になんて言うの？」

「具合がよくなったら来るって伝えるさ」

省吾は担任教師にもそう伝えた。

裕也は中間検査が終わった翌日から学校を休んで三日になる。メールが来るという事は元気なのだろうが、いったい何が理由で休んでいるのか、それが風邪で無い事は確かだと判っているだけに省吾も心配だった。

「よう」

その日の昼休みに入って直ぐ、裕也は教室に顔を出した。

「よう、じゃねえって。お前何やってんの？」

机に鞆を置く彼に、省吾が歩み寄る。

「いや、ちよつとな」

裕也は苦笑しながらそう言って「ふう」と息をついて自分の椅子に腰掛けた。

何だか異様に疲れている様子の彼を、省吾は見下ろした。

「ちよつとつて？」

「まあ、いいじゃん。野暮用だよ」

「あの専門学校生の娘か？」

「まあ、当たらずも遠からず」

裕也はそう言って笑うと

「でもな、別に彼女に会ってて学校休んだ訳じゃないぜ」

彼の妙にくたびれた様子に、省吾も何か他の理由がある事は察した。

「でもお前、あんまりサバると単位がやべえぞ」

「だからこうやって来たんだろ。リーダーはギリギリだからな」

裕也は途中で買ってきたらしい菓子パンを齧ると、缶コーヒーのプルタブを小気味よい音をたてて引いた。

その日の帰り、省吾はハンスへ行きたいという漑に付き合って池袋へ出た。

裕也は午後の授業中ずっと机に突っ伏して寝ていたかと思うと、ホームルーム終了と同時に帰って言った。

ハンスから出た時には陽の光は何処にも無くて、そこには夜の光と共に昼間とは違う喧騒が広がっている。

「あら、あんた」

背中から声が聞こえて、省吾は漑と一緒に振り返った。

「ああ、いいところで会ったわ。これ愛香に返しとってくれる。週末あたしの方で用事が出来てな、愛香には伝えてあんねんけど、ちようどよかったわ」

真琴はそう言つて、素で三千円を差し出す。

省吾はいきなり声を掛けて来て、反応を返す前にペラペラと喋る彼女にあっけにとられた。

「あ、ああ。いいけど……」

真琴の差し出したお金を受け取る彼の姿を、澪は事情が判らずただ見つめていた。

「しっかしあんたも隅に置けんやつちやな」

真琴はそう言つて笑つと

「あんまり無茶しなさんな。ほなな」

ブランドの手提げを肩に掛けて、彼女は人混みに消えていく。

省吾と一緒にそれを眺める澪が「誰？」

「あ、愛香のダチだつて。この前会つてさ。愛香に金を借りたらしくて、それを返してくれつて事だよ」

省吾はやけに長い言葉を返す。

「大阪の人？」

「えっ？ いや、東京だろ」

「でも関西弁だつたよね」

「ああ、そういえばそうだな。生まれが向こうなんだろ」

別にどうと言う事でもないのに、澪の質問にしどろもどろする。

「隅に置けないつて？」

「あ……それは、澪みたいな娘とか、連れて歩いてるから……じゃないか」

省吾はそう言つてわらうと「行こうぜ」

しかし、何気なく動かした視線に街道に近い工事現場が見えた。

道路の改修か何かは判らないが、とにかくサンシャイン通りと街道が交差する場所で工事が行われている。

省吾は思わず視線を止めて見入った。

鉄の資材を運ぶ裕也に似た姿がそこに見えたのだ。



### 【33】訳あり

「ちょっと待って」

省吾は澪にそう言って、駅とは反対方向に歩き出した。

「どうしたの？」

澪は怪訝な笑みを浮かべて、それでも省吾について歩くと、彼は前方の工事現場を目指している。

その先で作業をする妙に背の高い男を目指して、省吾は足を速めた。澪も遅れを取らないように小走りになる。

「ねえ、何？ どうしたの？」

澪は彼が一心に見つめる方向を見て「あっ」と小さな声を出す。「裕也」

省吾は工事中の低い柵越しに名前を呼んだ。

作業服に身を包み、安全第一と書かれた黄色いヘルメットをかぶって忙しく動き回る長身の男は正しく裕也だった。

「なんだよ、こんな所に」

裕也はそう言って片手を軽く上げると、あまり見られたくはなさそうな様子で苦笑する。

「おまえこそ、こんな所で何やってんだ」

省吾が声を大きく言った。

舗装を砕く機械の音が、急に轟きだしたからだった。

「ちよつとな、バイト」

裕也は再び苦笑して見せると「今ちよつと手が離せないからさ」そう言って小走りに資材に駆け寄って行った。

「裕也くん、アルバイト始めたんだね」

「あ、ああ。そうみたいだ」

駅までの途中、澪に言われて省吾は軽く頷いた。

……しかしおかしい。アルバイトと言っても、他にいくらでも在りそうなものをどうして工事現場で働く必要があるのか。

想像できるのは一つ。即金で稼ぎたいからだ。ああいう所は日払いか週払いで給料がもらえる事が多い。

しかし、学校が休みの期間ならわかるがどうしてこんなハンパな時期にあんな重労働をするのか……

省吾は澁と何気ない会話を交わしながらも、帰りはずっとそんな事を考えていた。

翌日省吾は、真琴に頼まれたお金を愛香に渡す。

「ああ、真琴から電話があつた」

「神出鬼没な奴だよな。あの娘」

「そうだよ。何処で逢うか判らないから、シヨウも気をつけた方がいいかもね」

愛香はそう言って、省吾からお金を受け取る。

「べ、別に俺は何処で誰に会つてもやましい事はないよ」

それは本当の事なのに、何故かおかしな動揺に包まれる。

「ナニナニ、愛香、省吾の愛人にでもなったの」

省吾からお金を受け取る愛香の姿を見た陽子が、興味に満ちた笑顔で近づいて来た。

「冗談やめてよ、この百倍は必要だつての」

愛香も笑って返す。

省吾が少し驚いた顔で「そんな高いの？」

「当たり前じゃん」

愛香は省吾に悪戯っぽい視線を返すと

「でも、特別半額にしてあげてもいいけどね」

省吾は「ハイハイ」と肩をすくめると、愛香の相手は陽子に任せて自分の席に戻る。

その日も裕也が学校へ来たのは三時間目が終わってからだった。担任には最近体調がよくないと伝えてあるらしい。もちろん、工事現場であくせく力仕事に追われてるくらいだからウソに決まっている。

おそらく夜遅い時間まで重労働を強いられるから、翌朝起きられないのだ。

彼は結局昼休みまで爆睡を決め込んで、腹が減ったのか昼休みのチャイムでようやく目を覚ました。

「お前、なんであんな所でバイトしてんだ？ あれが彼女と関係してるのか？」

省吾は裕也が目を覚ましたので、一緒に購買へ行きながら話した。  
「ああ、ちよつとな」

「何だよ、サラ金とかじゃないだろうな」

「いや、そうじゃない」

久しぶりの屋上で、省吾と裕也が購買で買ったパンを齧る。

直接受ける風はだいぶ肌寒くなって、思わず手すりの陰で風を防いだ。

裕也は、友恵の事を簡単に話した。

お互いあまり付き合っている女性の事を訊かないし、自分からも話さない。本命の女の事は尚更そうなのが、何時の間にか出来た二人の考え方だった。

もちろん、遊び半分の異性の話で盛り上がる事は多々あるし、誰々の噂話などもする。

だから、裕也が自分の彼女の事を、全てではなくとも省吾に話すのも珍しい事で、さすがに難問を抱えている事は省吾にも直ぐに理解できた。

「そうか、苦労人の彼女なんだな」

省吾は金持ちの澤と付き合う自分が、何だか後ろめたく感じた。

「お前、身体大丈夫なのか？」

「俺は、大丈夫さ。丈夫がとりえだからな」

そう言って笑う裕也の背中を、省吾は拳で軽く叩いた。

### 【34】優しさのあり方

その日の夕方は久しぶりに新宿まで出て、省吾は漑と一緒に映画を見に行った。

帰りはファーストフードでお茶をして、ブラブラと駅へ向う。

陽は完全に暮れて、行き交う人の波が街の明かりに照らされていた。

その時省吾の目に前に、以前一度だけ見た女性の姿が目に残る。スーツを着た茶髪の優男と腕を組んで楽しげに歩くその女性は、間違いなく裕也の彼女だ。

……という事だ？ 一緒にいるあの男は誰だ。

「漑、ちよつとここで待っててくれ」

省吾は駅の出口付近に漑を待たせて、裕也の彼女、友恵を追った。スーツの男とべたべたと寄り添う友恵が、その男とどういう関係なのかは察しがついたが、省吾は信じたくは無かった。

「あれ、どうした。高校生の下僕を作ったって言うてたろ」

「うん、まあまあ頑張ってるよ」

「いいのか、高校生は感受性が強いぞ」

「あたしだって変わんないよ。だってしょうがないじゃん」

友恵は男の肩に顎を乗せるようにして

「でも、たかが知れた金額だもん。楽しんだ代金だと思えばいいでしょ」

「どうせ、そいつがダメでも、他に何人も同じ事させてるんだろ」

「あたしは別に強要してないもん」

「そんな事じゃあ、結婚できないぜ」

「今が楽しければいいよ」

そんな話し声が聞こえてくる。

省吾は二人に駆け寄っていた。自分で自分を抑える事は出来なかった。

友恵の肩を後から徐に掴んで振り向かせる。

左手の拳を思わず振りがぶつていた。

友恵も一緒に振り返った男も何事が起こったのか判らずに、ただ驚いて後に身を仰け反らせたが、省吾に掴まれた友恵は上手く動けなかった。

二人はこの界限の賊にでも襲われたと思ったのかもしれない。

省吾は振りかざした左手に力を込めたが、ひとつ息を飲むと、震えるそれをダラリと力無く下におろした。

「な、何よあんだ。警察呼ぶわよ」

友恵は省吾を覚えていないようだった。強気で彼を睨む。

「呼べるもんなら呼んでみる。お前、ふざけんな」

「何よいきなり、頭おかしいんじゃないの？」

「こんど裕也に近づいてみる。拉致って荒川に放り投げるぞ！」

省吾は彼女の肩を掴んだ右手を力任せに激しく揺すって、大きく怒鳴った。久しぶりに出した自分の大声に、自分の身体が震えた。

裕也の名前を聞いて、友恵の顔色が変わった。

「な、なんだ。お前」

スーツの男が、友恵の肩を掴んでいる省吾の右腕に触れた。

反射的に怒りの矛先は、あまりにも自然にそちらへ飛ぶ。

男は省吾が左利きだとは知らずに右手を制するつもりだったのかもしれない。彼の手首を強く掴んだのだ。

「手を離せよ、このガキ」

しかし、省吾の利き腕は反射的に男の顔面を捉えた。

ゴキツと鈍い音がした。鼻が潰れたかもしれない。

「うつ」と、だらしく呻いて、男は大げさとも思える感じで歩道に転げる。

その光景を見た友恵は、初めて身体を震わせた。

「判ったのか？ もう裕也には近づくな。絶対だぞ！」

省吾は再び彼女の肩を大きく揺すった「判ったのか！」

薄でのカーデガンの衿がビリツと音を立てる。

「は、はい」

友恵の震える唇が微かに動いた。

「電話もするなよ。もしアイツに近づいたら、いくらでも仲間集めるからな。警察に言わない代わりに東京で暮らせないようにしてやるぞ」

ハッターだ。集まる数なんてたかが知れているし、女を拉致る度胸なんて在るわけが無い。本当にやるとしたら……裕也くらいだと省吾は思った。

スーツの優男は、いいかげん立ち上がれるはずなのに起きて来ない。ひっくり返ったまま事が終わるのをこっそりと待っているのだろつ。

怒りの収まらない省吾は再び左手の拳を振り上げる。が、殴るつもりはない。

友恵は肩をすくませて一瞬目を強く瞑った。

ふと周囲の通行人の目が自分に、しかもかなりの数が注がれている事に省吾は気づいて友恵の身体から乱暴に手を離す。

直ぐ横に在った東京電力の制御ボックスを思い切り蹴飛ばした。

友恵は再びビクリと身をすくませて、涙を零してしゃくり上げる。

「くそつ。女は得だぜ」

省吾はそう言っただけを返し、零の待つ場所へ足早に戻った。

\* \* \*

翌日の昼休み、裕也は学校へ来ると落ち込んだ様子で席に着いた。

「よう、昨日もバイト頑張ってたのか」

省吾が近づいて話しかけた。

「ああ、でももういいみたいだ」

「なんだよ。何かあったのか」

省吾はもちろん、昨晚の事は言わないつもりだ。

「昨日の夜遅くに友恵のアパートに行ったらいなくてさ、携帯にかけたらもう会いたくないって言われたんだよ」

「なんだよ、また振られたのか？」

「訳わかんねえよ。今日また電話してみたら、携帯解約されたらしい」

裕也は困惑した顔で、虚ろに窓の外を見上げた。

「ま、いいじゃねえか。金も必要なくなっただろ。結局女つてのは解んねえんだよ」

省吾はわざと残念そうに彼の肩を叩いた。

裕也はふうつと息を着くと

「今日、焼肉でも行くか？」

「ああ、オゴリか？」

「澪ちゃん呼ぶか。彼女には俺がおごってやるよ」

省吾は肩をすくめる素振りを見せて、一緒に窓の外を眺めた。  
青い空には、薄っすらとウロコ雲が高く連なっていた。

### 【35】返らないメール

午後の陽差は教室中をうつろいだ風景へと変えていた。

省吾は、机の上にとりあえず開いた教科書に自分のヨダレが落ちるのを感じて目を開けた。

六時間目、ふと顔を起すと珍しく愛香が机に突っ伏している。

省吾は何となく心配に思ったが、彼女も寝不足なのかと思い、とにかく声はかけずにそっとしておいた。

授業は物理の大柴だから、何も言わずにひたすら一人で授業を進めている。

ざっと教室を見渡しても、十人は机に突っ伏しているか頬杖をついて居眠りをしている。

「神崎は珍しくお疲れだな」

省吾の斜め前、つまり愛香の左隣の席に位置する山本が声を潜めて言った。

隣といっても全ての机は接していないので、山本の机も愛香からは人一人分離れてはいる。

「それともアレか？」

山本は続けて言った。

「違うよ。何だかだるいんだよ」

愛香は顔を伏せたまま首を回すと、山本の方に向って小さく声を出した。

「どうやら彼女は眠っていたわけではないようだ、その気だるい仕草は何時もの彼女らしくないのは確かだった。」

帰りのホームルームでも、愛香はほとんど顔を上げない。

チャイムが鳴って、掃除の当番でないものは次々に席を立てて教室を出てゆく。

「愛香、大丈夫？」

陽子が寄って来て、虚ろ気な彼女に声をかける。

「うん……もう帰る……」

愛香はそう言って顔を上げると、大きく髪の毛をかき上げた。

「おい、大丈夫なのか？」

省吾の声に振り返った愛香の顔は、妙に白っぽくて弱々しい笑みだけが彼を見据えていた。

「あ……まだいたんだ」

「いや、今ホームルーム終わったばかりだから。そんなマツハで帰らねえよ」

省吾は思わず陽子を見上げて

「大丈夫か。保健室に寄ってった方がいいんじゃないか？」

「愛香、保健室寄ってく？」

陽子も彼女にそれを勧めた。

「うん、いいや。帰って寝る」

鞆を掴んで立ち上がる彼女の姿は、何処か力なくて省吾は思わずふらつく彼女に手を差し出した。

「大丈夫か？」

「なんだ愛香、体調悪いのか？」

裕也が近づいて来た。グッスリと居眠りしていた彼は、今日覚めたらしい。

陽子は駅からバスなので、省吾と裕也と一緒に帰る事にした。もちろん、駅までは陽子も一緒だが。

「愛香具合悪いの？」

安倍川美紀が声をかけてくる。

彼女は掃除当番の割り当てなので、一緒に帰る事は出来ない。

「メールするね」

「うん」

美紀の声に、愛香は小さく返事を返した。

省吾は途中で薄にメールを入れる。

愛香に付いて行くからとは書き込まなかったが、急用で先に帰ると伝えた。彼女からはOKの返事が直ぐに届いた。

「なんだよ、じゃあ焼肉は明日だな」

駅のホームで思い出したように裕也が言った。

「そうだな。ていうか、愛香がよくなつてからでいいだろ」

「それまで俺の懐に金があればな」

二人の会話に、愛香は弱々しく笑った。

電車に乗り込んで直ぐ

「漑ちゃん待つててもよかったのに」

愛香は言った。

「別にいいさ。何時でも会えるし」

省吾と裕也は愛香と一緒に駅を降りて、とりあえず彼女の家まで付き添って歩いた。閑静な住宅街に入ると、愛香の家は周囲の民家を嘲笑うかのように大きな白い外壁を堂々と見せ付けていた。

周囲の民家も、比較的大柄な建物が多いが、愛香の家は完全にそれらを上回っている。

「デカイ家だな」

裕也が門扉の前で見上げた。

省吾は漑の家で免疫がついたのか、さほど驚きはしないが、とりあえず想像していた通り、洋風造りの瀟洒な建物だった。

「明日休む時はメールしろよ。学校に伝えてやるから」

「うん。ありがとう」

愛香が玄関ドアに入るのを確認してから、省吾は裕也を促して駅へ戻った。

「大丈夫か、アイツ」

「大丈夫だろ。風邪じゃねえの」

心配する省吾に対して、裕也は楽観的だった。

西日が眩しく二人を照らし出して、長い影がアスファルトに伸びていた。

次の日は、やはり愛香は学校を休んだ。

直接担任に連絡がいったらしく、省吾も裕也も彼女からは何の連絡も無かった。

何となく心配になった省吾は、昼休みに愛香宛のメールを送るが、返信は無かった。

### 【36】秘密

愛香は結局週末まで学校には出て来ず、そのまま土日を迎える。

その間も、愛香との連絡は取れないままだった。

メールが出来ないほど容態が悪いのだろうか……陽子と美紀に聞いてみたが、彼女たちが送ったメールにも、返信は来てないらしい。「インフルエンザとかじゃないの」

裕也はそんな憶測を呟いて笑った。

陽子や美紀も、そうかもね。と半ば納得していた。

\* \* \*

日曜日、澪は朝一で父親の病院へ出向いていた。血液検査をする為だ。

休日の病院は静けさが漂い閑散としていて、この光景が澪は好きでは無い。しかし、彼女がこの病院に来るのは、できるだけ休診日なのだ。

静まり返った廊下は、何処か死の臭いを感じずにはいられない。

検査を終えて廊下にでると、澪は思わぬ相手に出くわした。

「あ、愛香さん」

「ああ、澪ちゃん」

「どうしてここに？」

「う、うん。ちょっと検査にね」

愛香の答えに、澪は怪訝な笑みを浮かべる。

彼女の父親が大学病院の外科部長だと知っている澪は、どうしてもわざわざこの病院に来たのか反射的に考えを巡らせたのだ。

父親のいる病院では、何か都合が悪いのだろうか……婦人科はな

いから、そう言ったことに関わりはないだろう……それにしても何故。

「どんな検査？」

「うん。ちよつと、ね」

「そう……」

漣はそれ以上は訊かなかった。

「じゃあね」

「うん。じゃあ」

二人は少しよそよそしい笑顔を交わして別れた。  
第一検査室のドアが開いて、渉が顔を覗かせる。

「彼女、知り合いなのか？」

「えっ、うん。省吾君のクラスメイトよ。前に文化祭で親しくなったの」

「そうか……」

渉が深く息をつくのを見て、漣は嫌な胸騒ぎがした。

「彼女、どうしてここへ？ お父さんが大学病院に勤めているのに」

「ああ、向こうから依頼があつたようだ」

「向こう？」

「彼女の父親だろう。向こうの外科部長直々に、ウチの病院に見てくれないかって、父さんに依頼が来たらしい」

「知ってるの？」

「大学時代の後輩だそうだ」

愛香の父親の方が当然若いので、彼が自分の父親の後輩に当たるのだらうと、漣には直ぐに判った。

漣の「どうして」は、本当はそんな事を訊いたのではない。あるいは、渉もそれを判ったうえではぐらかす様な回答をしたのかもしれなかった。

「これから出かけるのか？」

「うん。午後からシヨウちゃんと約束してる」

「判ってると思うけど、彼女の事は言うなよ」

「う、うん……判ってるよ」

病院での守秘義務があることは漣にも判っている。父親の病院で受診をしないのは何か訳が在るのだ。

渉は漣が何かを感じ取ったのを察して、念を押したのだろう。

漣は今見た愛香の姿をかき消すようにして、小さなバツクを手に、病院を出て一度自宅へ戻った。

日曜日の午後。秋晴れの下、省吾と漣は上野の不忍池の畔をブラブラと歩いていた。家族連れも多く、ここそこで子供の高らいだ声が響き渡る。

「ねえ、愛香さん……」

「えっ？」

「ううん。何でもない」

漣は今朝の事を省吾に言ってしまうおうか迷って、言葉を呑み込んだ。

「最近愛香に会ったの？」

「う、ん。ちよつと見かけただけだけど。それだけ」

池の水面には青空が映りこんで、時折魚の跳ねる小さな波紋が見えた。

「そうか。アイツ、この前体調崩してさ、そのまま週末まで学校に来なかったんだ。メールしても返事も来ないからちよつと心配でさ」

「そう……」

並木脇のベンチに腰をおろして、漣はカップルの乗った池のボートに視線を移す。

省吾も彼女の隣に腰掛けて、池の中央を眺める。

「何か、あまり人には言いたくない何かがあったのかも……」

漣はそう言って、省吾の肩に頭をもたげた。

「ああ。そうなのかな」

澪が言つと何か妙に信憑性があつて、省吾はそれ以上何も言わなかつた。

「こころの中では「澪はどうなんだ？」そんな言葉が過るのは仕方ない事だつた。」

## 【37】訪問

月曜日の朝、一度学校へ来た愛香だったが、授業は受けずに早退していった。

省吾は得体の知れない不安を抱えたまま、廊下で見た彼女の後姿を黙って見送る。

クラスの中には、愛香が妊娠したのではないかと囁く者もいたが、省吾にはとても信じられなかった。

もちろんそれがありえる経験を彼女自身がしていないとも思えないが、そんなヘマをするようには思えないのだ。

そう言った情報はクラスの中では親しい陽子や美紀にも半ば謎だそうで、愛香自身は雑談の中でも決定的な発言はしないのだと言う。もちろん、陽子も美紀も愛香が今更処女だとは思っていないだろう。

昼休みに、省吾の携帯が引つ切り無しにバイブレーションした。相手先は非通知。非通知からこれだけコールが何度も掛かるなんてそうそう無い事だ。1分以上コールし続けるのが三回。省吾は四回目にかかった電話をトイレの中で受けた。

「ああ、やっと繋がったわ」

何となく聞き覚えのある声。いや、声よりもその関西弁だ。

「ま、真琴？」

「いやあ、覚えててくれたん？」

関西弁の知り合いなんて、他にはいない……

「もう大変だったで。あんたの番号調べて家に電話してな」

「家に電話したのか？」

「そうや。いいやんか別に。若い声のお母さんやな。そんであんたの携帯番号教えてもらってな……」

「いや、そんな事より何？ 学校は携帯で話すのは禁止なんだよ」  
今日は、母親は休みだと言って朝から買い物に行っただけだが

直ぐに帰ってきたのだろうと一瞬思った省吾だったが、今はそんな事はどうでもいいのだ。

トイレで携帯を使うのも、メールならまだしも直接話すのは限界がある。

「そうは思ってたんやけどな、ちょっと愛香の事でさ」

「愛香？」

省吾は電話を強く握りなおして

「愛香は、どうしたんだ？ 何で今日は直ぐに帰ったんだ？ お前、何か知ってるのか？」

矢継ぎ早に問いかけの言葉を繰り返す。

「ああ、やっぱり今日も授業は受けなかったんや。明日から入院やで」

「入院って？ どうして」

「それは、彼女が話す気になったら直接訊くとええよ。あたしから言うのは失礼やしな」

「妊娠……なのか？」

省吾は躊躇いながら言った。

人に言えない入院の理由といえば、真っ先に思いつくのはやはりそれだ。

「そうならよかったのにな……」

彼女の明るい声が一瞬くぐもった。

「なら何だ？」

省吾は苛立った。

「だから、それは本人に訊くしかないで。あたしにはここまでしかやってあげられへん。たぶん愛香は手術の前にあんなに会いたいのはずや」

「手術？ 愛香、手術するのか？」

「あとは、あんたが自分の判断で行動しいや。ほなな」

真琴は省吾の質問に応えないまま、電話を切った。

……愛香は病気なのか？ でも何の？ どうして手術をするんだ？

疑問だけが省吾の頭を埋め尽くす。

彼はトイレを出ると、足早に教室へ戻って鞆を掴んだ。

「おい、シヨウ、バックレか？」

裕也がそれを見て声をかける。

「ああ、腹痛くなっただって言っといてくれ」

省吾は途中で駆け足になって駅へ向い、来た電車に飛び乗ると愛香の家に向かった。

駅を降りて改札を抜けると、省吾は再び小走りになって彼女の家を目指す。商店街の真ん中辺りで路地に入って住宅街を抜ける。

主婦の乗った買い物途中の自転車に危うくぶつかりそうになるが、向こうは素知らぬ顔で行ってしまう事に一瞬唖然として立ち止まり、再び小走りになる。

住宅街に入って路地を曲がると愛香の家が在る。深く息をひとつと、省吾は白い門扉の支柱にあるインターホンのボタンを押した。

間を置くと臆する気持ちが膨らんで、行動できなくなるような気がしたのだ。

機械の中で奏でるチャイムの音が、遠く小さく聞こえる。

「はい」

微かなノイズの後に聞こえた初めて聞く声は、愛香の母親のものだろうか。

「あの……愛香さんのクラスの者で北原と言いますが、愛香さんはいますか」

緊張する中で、省吾は出来るだけ丁寧な言葉を選んで発する。

「あ……ちょ、ちょっとお待ち下さい」

インターホンの向こう側で微かに慌てる素振りが覗えた。数分、いや一分ほどだったかもしれないが、門柱の前で佇む時間はやけに長く感じた。

インターホンがプツツと音を立て

「あの、どうぞ中へ」

その言葉を聞いて、省吾はゆっくりと門扉を開いて玄関のドアまで歩いた。

ちようと測ったように、彼が玄関の前に立つとドアが内側からゆっくりと開いて髪の高い女性が顔を覗かせる。

「ど、どうも……こんにちは」

省吾がギクシャクと小さく頭を下げると、彼女は笑顔になって

「あ、いいえ。始めまして愛香の母です」

細っそりとして少し背の高い黒髪の姿は、派手さは微塵も感じない。

彼女は省吾を促すと

「さ、上がってください」

「あ、いえ、ここで。愛香さんは？」

その時愛香が階段を下りて来て、廊下に顔を見せた。

二人は無言で見つめ合うが、省吾も愛香も最初の言葉が出なかった。

「よお」たまらず省吾が声をだして、軽く左手を上げる。

「うん……」

愛香も肘の所まで小さく手を上げた。

### 【38】熱情の雫

「お母さん、ちょっと買い物行つて来て」

愛香が玄関まで歩いてくると、母親に言った。

顔色もそんなに悪くは感じないし、いったい彼女は何の為に手術が必要なのだろうか、省吾は愛香の顔を見つめていた。

母親は省吾と愛香の二人を比べるように眺めると

「あ、ああ。そうね。じゃあ、ちょっと行つて来るわ」

そう言つて一端リビングへ引込んで、再び玄関に現れる。

「上がつて」

愛香に促されて、省吾は黄色のニューバランスをいそいそと脱いだ。

母親は省吾と入れ替わるように玄関のドアを開くと

「じゃあちよつと行つて来るわね。……二、三時間くらいで戻ると思ふから」

そう言つて、外へ出て行つた。

「来て」

愛香はゆつくりと廊下を歩いて階段を上る。

省吾はその直ぐ後ろを歩きながら、彼女が着るザックリとした藍色のワンピースの揺れる裾口に視線を漂わせていた。

「どうしたの？ 急に」

愛香は階段をゆつくりと上りながら、振り向かずと言つた。

「急につて、お前こそどうしたんだよ。急に」

省吾は視線を上げて、左右に揺れる彼女の後ろ髪を見つめた。

「だって、あたしの場合は急だったんだもの」

「何がだよ」

愛香は一瞬黙つて、階段の最上段に足を乗せて止まる。

「もしかして、真琴に聞いた？」

「え？ あ、ああ……ちよつとだけ。でも、何がなんだかさっぱり

でさ。もつと寝込んだりしてるのかと思つたよ」

「うん。けつこう元氣よ」

愛香は止めた足を再び動かして部屋まで省吾を促すが、後は振り返らなかった。

部屋のドアを開けた途端、ほんのりと甘い果実のような香りが省吾の嗅覚に届いた。

溼の部屋ほどではないが、愛香の部屋も充分大きかった。白い壁にピンク色のベッドカバーがやたら目立つ。

ただ、木目調の勉強机と黒いアップライトピアノが、何処かシックでエレガントなイメージを醸し出している。

省吾は床に敷かれたグレーのカーペットの上に腰をおろす。カーペットは部屋の中央にだけ敷かれて、ピアノの下などはフローリングのままだ。

「何か飲む」

愛香は省吾と視線を合わせようとせずに淡々と身体を動かす。

「あ、ああ」

愛香の部屋には小さな冷蔵庫と食器棚がある。彼女はそこから長いグラスを二つ取り出して黒いローテーブルに並べると、冷蔵庫から出したアップルジュースをそれらに注いだ。

「はい」と愛香が省吾の前にグラスを差し出して、愛香も腰を落ち着かせた。

省吾はそれを二口飲んでグラスを置いたが、愛香は俯いたり窓の外を眺めたりして省吾と視線を交わそうとはしなかった。

省吾も、何だか気まずさを覚えて彼女の目を見れない。

それから二人は黙ったまま、時間だけが勝手に流れてゆく。

外の庭木から小鳥の囀りなえずが聞こえて、省吾は思わずそれに耳を傾けたりするが、こうしていても仕方がないと腹を括る。

「おまえ、手術するって……」

沈黙の中、省吾は言葉を発した。

「うん……」

愛香は省吾を見て、やけにサバサバ答えると僅かに微笑んだ。

瞳がキラキラと輝いているのは潤んでいるのだと彼にも判った。

視線を合わせようとしなかったのは、その瞳の奥を見られなくなつたのだろうか。

省吾は少し彼女と視線を交わしただけで、直視する事が出来ない。

「何の……手術を？」

「何だと思う？」

愛香はわざと大きな笑みを浮かべると、アゴをツンと突き出しておどけて見せる。

「そんなの判るわけないだろ」

それを見て、省吾は少し苛立ちを感じた。

どうしてそんなに意地をはって笑顔を見せるのか……その裏側をどうして見せてはくれないのか……

省吾は震えるような気持ちを隠せなかった。

すると、愛香は着ていたワンピースの上から下着のホックを外すと、もぞもぞとブラを外してワンピースから抜き取った。

淡いライラックのそれは、カーペットにパサリと落ちる。

「な、何してんだよお前」

省吾は反射的に、後ろにたじろぐ。愛香の考えている事が読めないからだ。

そして、愛香は膝立ちになると、ローテーブルを迂回して省吾に近づいた。

省吾はどうしていいのか判らずにとりあえず後ずさりするが、暫く後ろへ下がると背中がベッドの縁に当たった。

大きな窓にかかる真っ白なレースのカーテンを抜けた陽差が、少し眩しく感じた。

「触ってみて」

愛香は膝たちのまま省吾に近づくと、胸を突き出すでもなく直立したまま彼にそう言った。

しかし省吾には、彼女が何処を触れと言っているのかは理解でき

た。

「でも……」

「いいから触って」

愛香の真剣な表情に、彼女が冗談でこんな事をしているのでは無いと悟った省吾は、反射的に利き腕ではない右手を彼女の身体に伸ばす。

何故か利き手を出す事に躊躇した。

「違う、逆」

「逆？」

「右を触って」

愛香に言われて、省吾は彼女の右胸を触るために結局左手を差し出す。別に、右手のままで触れるのだが、向かい合った状態ではそれが自然な行為だろう。

後に着いた右手と寄りかかるベッドに自然と体重が乗って、気持ちはずさを続けていた。

零よりは明らかにふくよかな彼女の胸を真直にして、差し出した手を寸前で止める。

省吾は胸にあつた視線を愛香の顔に向けた。彼女が何をしようとしているのか判らなかつたから、何とかそれを読み取ろうとしたのだ。

セックスを強請<sup>ねだ</sup>っているようでもない。

その時、愛香は省吾の左手を掴んで自分の胸に押し当てた。

ワンピースの生地越しに明らかかな彼女の肌の感触と柔らかい胸の造形の細部が、そして暖かな体温が伝わった。

「もっとちゃんと触って」

「いや、一応触ってるけど……」

省吾は思わず苦笑して見せた。あまりにも愛香の胸の感触がリアルで、何も考えられなかつた。

愛香はワンピースの裾を空いていた方の手で大きく捲り上げると、掴んだままの省吾の手をその中に素早く入れて直接胸に押し当てた。

「なっ、お前……」

「ちゃんと触って」

再び愛香は真剣な表情で言った。その瞳からは、今にもガラス玉のような雫が零れ落ちそうだった。省吾は困惑するばかりだ。

「そんな事言ってもさ」

彼女の胸は熱かった。しかし、愛香の胸の温度を直に感じながら、省吾は微かな違和感に気づく。

「お前……これ……て？」

省吾はそれ以上言葉が出なかった。乳首の下に微かなシコリを感じたからだ。

ほんの小さなものだろう。しかし、確かに何かが皮膚下に在る。

彼は真剣な顔つきで、それを親指の腹で撫で回すと

「痛いのか？ これ」

愛香は小さく首を横に振った。

「これってさ……」

省吾はその後の言葉が言えなかった。

「乳癌だっ」

「に、乳癌？ そんな……」

自分の指先に感触があるにも関わらず、半分は愛香の言葉が冗談だと思った。いや、彼はそうであって欲しいと思ったのだ。

「知ってる？ 今、二十五人程度に一人の女性は乳癌になる確率なのよ」

「そんなに？」

省吾はやけに口の中が渴いているような気がした。

「でも、そんなの……周りではなつた人いないぜ」

「だから、統計的確率よ」

「確率……？」

「そう、だからあたしがなつても別に不思議じゃないのよ」

愛香は、穏やかな口調で言った。

省吾は眉を潜めると「直るのか？」

「大丈夫みたい。早期発見ってやつかな……」

愛香は小さく微笑んで「でも、この胸はなくなってしまう」

省吾が引き抜こうとした左手を、彼女は両手で包み込むようにしてその胸に抱いた。

「無くなる前に触って欲しいじゃん……」

大粒の雫がその上に零れ落ちる。

小さく震える生地に染み渡るその雫は、憂愁のパトスとなって省吾の手に届いた。

### 【39】温度

省吾は言葉が出なかった。

やけに喉が渴くのは、うまく唾が出てこないせいだと思った。

自分は男だし、女性が胸を無くす痛みは計り知れないと想像はしてみても、その繊細な精神の奥底までは判らない。

ただ、この左手が触れた温かくて柔らかなものが彼女の身体の一部で、それが無くなるのかと思うとやりきれない思いだった。

「胸のない娘は抱く気になる？」

愛香は俯いたまま、小さな声で呟くように言った。

「そんなの、関係ないだろ。好きになったら関係ないよ」

省吾は自分でも不思議なほど即答で応えた。

「あたし……まだなんだ」

「まだって？」

愛香はフツと笑みを浮かべて「まだした事ないんだよ」

小声で、しかも粗雑に言い放つ。

愛香の言葉に省吾は少しだけ驚いた顔を隠しきれなかった。

そんなのとづくに経験済みのようなイメージがあった。

愛香はワンピースを捲り上げると、一気にそれを脱ぎ捨てた。恥ずかしさを前面に置く余裕など無い。

夏休みが終わった始業式の日、あれだけ健康的に日焼けしていた彼女の肌は、眩いほどに白くなっていた。微かにビキニの水着跡が残っている。

「俺さ……」

愛香は省吾の言葉を遮るように、彼の頭を大きく胸に抱え込んで抱きしめた。

「初めてだから……シヨウに触って欲しかった。この胸があるうちに……」

省吾は両腕を彼女の身体に絡めた。

まるで激流に身を投じたように、流される自分を止める事は出来なかった。

思った以上に愛香の身体は細くて、その繊細な肌の感触を両腕の全てで感じ、産毛がフツと逆立った。

そのまま少し毛足の長いカーペットに愛香を押し倒す。

甘いピーチのような香りが彼女の上気した身体から香って、省吾は脳の奥のほうでその芳しい香りを堪能する。

省吾は彼女の右胸に、そつと唇を這わせた。

この、彼女の一部が無くなってしまうのかと思うと、それがどうにもたまらなく愛おしく感じて切なくなる。

愛香が吐息を漏らして身体を僅かにくねらせると、胸の下に微かにアバラが浮き上がった。

彼がそれをそつと手でなぞると、彼女はフツと息をもらすように笑った。

「ごめん、ちよつとくすぐりたい」

肩にアゴを埋めるようにして省吾を見下ろす。

省吾はそんな彼女と視線を交わすと笑顔を返して、愛香の身体伝いに這い上がり目線の位置を並べた。

「ご、ごめん。続けて」

「いや……この先はこれから出会う誰かの為に取って置けばいいさ」  
省吾は愛香の肩にそつと手を添える。

「でも……」

「お前なら、胸が無くたつてイイ男いくらでも捕まえられるって」

「じゃあ、捕まえられなかったら、ショウが責任とってくれる？」

「いや、それは……」

困惑する省吾に愛香が自分からキスをした。それは初めてではないが、彼女にとって本気で好きな相手とのファーストキスだった。熱い吐息が二人の間に交わされると、一瞬心が通じたような気がした。

唇をそつと離した省吾は

「お前、寒くないのか？」

愛香はそう言われると急に自分の姿が恥ずかしくなって、起き上がると同時に慌ててワンピースを拾い上げて頭から被る。クシャクシャになった髪を手グシで一所懸命に直した。

省吾も起き上がると、後ろに着いた手にカサツと何かが触れて振り返る。それは最初に愛香が外した下着だった。

「ほら、忘れ物だよ」

彼は慌ててそれを拾うと、足を投げ出すように座った愛香の膝元にそっと放り込んだ。

彼女は両手で丸めるように下着を掴んで

「じゃあ、ちよつと着けるからあっち向いてて」

「えっ？　だつて今」

「いいから」

「わかったよ」

省吾は少々不服そうに後ろを向いた。

今さつき自分に裸をさらした彼女が、どうしてそんなに恥ずかしがるのか、その複雑な心理は判らない。

カサカサと衣服が身体に擦れる音が聞こえる。

その音が消えて「もういいのか？」と訊こうとした時、省吾は愛香に後から抱きしめられた。

「ありがとう」

「あ、ああ」

素直に後を向いていた事に言っただのか、それとも彼女の最後の胸を抱きとめた事に言っただのか判らなかった。

「手術は何時なんだ」

「早い方がいいからって、3日後」

「そうか……」

省吾は自分の首に回した愛香の腕に、そつと自分の手を添えると「見舞いとかって、行ってもいいのかな」

「うん、シヨウだけは入れてあげる」

彼女の腕に添えた省吾の手に、何度も熱い雫が落ちるのを感じたが、彼はわざとそれを目で確認しようとはしなかった。

愛香の肩が震えているのが判ったから。

翌日から再び学校を休んだ愛香は、担任の口から病氣療養の為に伝えられた。陽子も美紀も心配していたが、省吾は何も言わなかった。

時が来れば、陽子や美紀には愛香自身が話すかもしれないし、言わないかもしれない。

裕也は「しばらく焼肉は無しだな」

そう言って少々他人事のように笑っていたが、内心は心配している事が省吾には判った。

窓の外を見つめる彼の笑った視線が、何時に無く淋しそうだったから。

それでも彼女の事を話す気は無い。周囲の連中と同じく、何も知らない素振りで日常を過ごす。

省吾は、それが彼女に対しての礼儀でもあるような気がした。

## 【40】秋の陽差の下

省吾の日常は愛香のそれとは関係無しに、今までとなんら変わらない。

今頃手術なのか……省吾はちよっぴり冷たい朝の風を頬に感じながら駅のホームで空を見上げた。

乾いた喧騒の中で、頭上に広がる虚空そらだけは何事も無く優美に広がりを見せる。

省吾は視線を落として愛香の胸を感じた左手を見た。熱い温もりがその掌に蘇える。

……自分にしてやれる事はない。今は。

近くの踏み切りの音が響き渡ると、省吾は顔を上げて乗降位置へ歩み寄った。同時にアナウンスが流れて電車が進入して来る。

扉が開いて溼の顔を見ると、心の中に暖かい火が灯る気がした。

しかし、その日は二人共口数の少ないまま、省吾は何時もの駅で降りる。

省吾は、愛香が南澤病院……つまり、溼の家の病院に入院し手術を受ける事を知っている。そして溼も、愛香が自分の病院へ入院した事や、今日彼女が手術をする事を知っていた。

ただ、省吾も溼もそれをお互いに言うべきか言わないべきか迷うあまり、つい口数が少なくなる。

おそらく知っているだろう。それは二人共感じていた。

しかし、その話題を二人で話していいのか、迷っていたのだ。それでも、お互いに彼女を思う不安が話題の提示を急ぎ立てて、それを呑み込む事の繰り返しだった。

何かを言いたげに電車を降りる省吾の笑顔を、溼は同じ類の笑顔で見送った。

「漣ちゃん」

愛香は、早朝に病室を訪れた漣の姿に、ベッドで身体を起こした。

「通院の日？」

愛香はそう言って笑う。

「うん。あたしはほとんど病院へは来ないから」

漣も笑顔を投げかける。

「様子が気になって……あ、ごめん。お兄ちゃんに訊いて……」

「そう」

「手術、頑張つてね」

「うん。でも、頑張るのはお兄さんでしょ」

執刀医は南澤渉。漣の兄だ。

「それもそうだね」

漣は思わず声を出して笑った。

「元気そうでよかった」

「ありがとう」

愛香は漣を見つめて言った。臨死と蘇生を繰り返す彼女を前に、弱音は吐けないと思った。どちらが幸福なのかなんて、今は考えられない。

ただ、これから手術を目前に控えた愛香にも、漣の白い笑顔は相変わらず果敢なげに映ったのは確かだ。

漣はベッドサイドの小さな丸椅子にそつと腰掛ける。

「あたしの治療の事、知ってるんでしょ」

漣の言葉に、愛香はどう応えていいのか判らなかった。ただ、何故漣がそんな事を知っているのか、不思議だった。

「どうしてそれを？」

漣は、窓の外に広がる朝の眩しさに染まる街並を眺めると

「死の淵をさ迷うとね、普段は見えないものが見えて、普通は聞こえるはずの無い事が聞こえたりするの」

漣は外に向けた視線を愛香に向けて微笑む。

「いいよ。シヨウちゃんに言っても。あたしの事」

「そんな事……どうしてあたしに言うの？」

「シヨウちゃんが好きなんでしょ」

漣は何でも知っている。

尋常ではない治療を繰り返す彼女の言葉は、ひたすら信憑性に包まれて、愛香の心の中へ入ってきた。

「言わないよ……シヨウに隠すのが辛いなら、自分で言いなよ」

愛香の言葉に、漣はクスツと笑って俯いた。

「そうなのよね。別に悪いことしてるわけでも無いのに、隠すのは辛いよね」

それは愛香の心に小さな針を刺したような、チクリとした微かな痛みをもたらした。

自分は省吾に身体を預けようとした。彼が漣と付き合っていると知りながら、彼が漣を好きだと知りながら、自分の哀れな姿を楯に省吾に抱かれようとしたのだ。

「漣ちゃん、あたし……」

「でもさ」

漣は、愛香の言葉を遮るように口を開いた。

「ウソも大事だよ。ていうかさ、それを口に出さない事で誰も傷つかないなら、それもいいのになって」

彼女はそう言って椅子から立ち上がると

「じゃあ、あたし行くね。お兄ちゃんは、アレでもお父さんも認める名医だから安心してね」

「うん。大丈夫、うちのお父さんのお墨付きだもん」

愛香は、病室のドアを開ける漣に向って微笑んだ。

それと入れ替わりに、看護師が入って来た。



#### 【41】罪と罰（前書き）

【中間あらずじ】血液の病氣治療の為に禁断の治療を続ける漑と付き合う省吾。その省吾を思い続ける愛香。

しかし、愛香を突然の病魔が襲った。彼女の入院前に、省吾は愛香の思いを受け取る。

漑は愛香の病状を知っていた。彼女が入院したのは、自分の父親の病院ではなく、漑の父親が運営する病院だったのだ。

## 【41】罪と罰

庭木の木洩れ日が地面を照らすと、まだらに光を浴びたスズメたちが小さく跳ね回る。

入院患者の誰かがこっそり朝食の残飯の一部をそこに捨ててのを知って、彼らは毎朝木洩れ日の中に入り込んでくる。

秋の陽差に白い病棟が聳え、窓には青空が映り込み、白い雲が流れる。

「どうや？ 具合」

術後、両親以外で初めて愛香の病室を訪れたのは、真琴だった。もちろん、彼女が何処の病院に入院したか知る者は少ないので、これから先も訪れる姿は限られるだろう。

「うん、少しだるいけど」

小さく笑う彼女に、真琴は大きな笑顔を返す。

「まあ、当たり前やな。それだけの手術だったんやし」

愛香の手術は無事終わって、術後の経過も順調だった。

「真琴、学校は？」

「そんなもん、バツクレや。何時もの事やん」

真琴がそう言って笑うと、愛香も小さく笑って

「そうだったね」

窓から入る午前中の淡い陽差は、揺らめくように愛香の白い頬を照らす。

真琴はそんな彼女の姿がいかにも弱々しく見えて、胸に何かが込み上げる。

「愛香はあれやな、マスカラなくても睫毛長いんや。うらやましい。あたしなんか、マスカラ取っただけで『おまえ誰や』言われるで」

自分で意識して笑う事なんて、彼女の日常にはあまり無い事だった。

「今日は天気よくって外は暖かいから、はよう散歩出れるようになる  
とええな」

真琴は喋り続ける。

愛香はそんな彼女の話を聞きながら、笑顔で相づちをうつ。

何時も喋ると止まらない真琴の話が、全く苦にならなかった。

真琴はベッドサイドに置かれた小さな丸椅子に腰を下ろして、小さく息をつく

「省吾には、会えたん？」

「うん……会えたよ」

「ご、ごめんな。余計な事して。ほんま、あたしらしくない事したわ」

真琴は苦笑する。

愛香は小さく首を振ると

「うっん。ありがとう。ショウが来てくれると思わなかったから、嬉しかった」

「そうか……そやったら、あたしもおせっかいの甲斐があったかな  
そう言って、真琴は首を小さくすくめて笑う。

「でも真琴。よく、省吾の携帯判ったね」

「そんなもん、家にかけて訊いたら判るやん」

「家に電話したの？」

「そや。お母さんとちよつとだけ、仲良うなったわ」

「でも、自宅の番号は？」

学校の違う真琴が、省吾の自宅番号を知るはずもない。

「そうそう、大変やったで。あの辺の住所は愛香に聞いたから、  
電話帳で片っ端から北原って家に電話したわ」

「全部？」

愛香は思わず目を丸くした。

「でもな、あの辺に北原って家は6軒しかなくて、3軒目にヒット  
したで。あたし、くじ運いいからな」

真琴がそう言っであっけらかんと笑うので、愛香もつられておか

しくなった。

彼女はそんな愛香を見つめると

「でも、省吾には澪ちゃんって娘がおるんやろ？」

「うん」

愛香の返事に、真琴は彼女の瞳を見続ける。

愛香は彼女の視線の意味を感じて、クスクスと吹き出すように笑った。

「してないよ。あたしたち」

「そ、そうなん？」

「あたしは、して欲しかったのかもしれないけどね」

「ち、ちよつとくらいしてやったらいいのにな。あいつも、意外とケチやな」

真琴らしい言葉だった。

「そんな気軽に言わないでよ」

「そうやけど……」

「充分満足させてはもらったから、いいよ」

愛香の穏やかな笑顔に真琴は怪訝な笑みを浮かべたが、彼との間に何か吹っ切れる出来事があったのだと確信して、直ぐに安堵の笑みに変わった。

「あいつも、罪なやつちゃな」

……罪。罪深いのは誰なのだろうか。

省吾は彼なりに問題を抱えて、これからも苦悩するだろう。澪は何時まで彼に自分の事を隠し続けるのだろう。そして、省吾が受け止めてくれた気持ちをこれからどうすればいいのだろう。

愛香は真琴に小さな笑みを返して窓の外に視線を移すと、遠くの空に聳える高層ビル群を見つめた。



## 【42】3つの影

辛い事や嫌な事があっても、日常は何処までも続いてゆく。

愛香の姿を教室で見なくなっても、省吾と漣の日常はこれまで通りに流れるのだ。

お互いに口数少ない日が続いたが、愛香の手術が上手くいったと聞いてからの二人は、表向きは今まで通りに過ごして、映画を観たり、買い物をしたり、公園をぶらついたりした。

省吾は愛香に気を取られて、漣の僅かな心の変化には気付いていなかった。

愛香の存在が原因ではない。漣は予てから思う事があって、省吾と過ごすうちにその気持ち心が満たしていった。

それは希望めいた明るいものではない。

いや、彼女にとっては、ある意味希望に繋がる新しい世界への旅立ちを意味するのかもしれない。

\* \* \*

「おい、落ち着いてとにかくこつちへ来い」

省吾は僅かに足を踏み出して言った。

「こつち来るな。来たら飛び降りる」

……ふざけんなよ。てめえが落ちたって俺には本来関係ないから、そんなの知った事じゃねえんだよ。

「とにかく落ち着けて」

放課後、省吾と澪は東宝撮影所近くにある、大型ショッピングモールへ来ていた。

平日の夕方という事もあり、一階の食料品売り場以外は学生の徘徊がいるだけでフロア全体は意外と空いている。

二人は暇つぶしに屋上へ上がって、金網越しの風景を眺めた。

「学校の屋上からここが見えるんだ」

「へえ、あたしの学校からも見えるかな」

「どうだろう」

省吾は遠くに小さく白い校舎を見つける。

「あれ、ウチの学校かな」

「あれは小学校じゃない？ ショウくんの学校はたぶんその向こうに見えるヤツだよ」

澪がさらに遠くを指差した。

けっきょく二人共イマイチ正確にはわからない。

屋上は誰もいなかった。そう思っていた。

ちょうどすれ違いに一組のカップルが身体を寄せ合いながら屋内に入って行った所だ。見渡す限り、人影は見えなかった。

しかし、少し離れた植木の並んだところで、不意にガサガサと音がして人の気配を感じた。

「向こうに誰がいるんだな」

「植木の影で何してんのかな」

「自殺とかじゃん？」

省吾はまったく冗談のつもりだった。

そんなヤツ間近で見たこともないし、まさかそんな場面に出会わずもないと思っていた。

しかし再びガシャガシャンと激しい音がして、振り返る。

黒い学生服の人影が、転落防止の高いフェンスを乗り越えていたのだ。

「ショウくん、あれって……」

澪は思わず呆気にとられていた。

「おい、何やってんだよ。危ねえぞ」

省吾は何かの冗談だと思って足早に近づいた。澪もその後を小走りに追う。二人のいた場所から20メートルも離れていなかった。

「おい」

省吾は再び声をかけたが、足元に何かを見つけて思わず足を止める。

揃えて脱いだスニーカーの上には携帯電話が置いてあった。

よく見ると、男は靴を履いていない。

「ショウくん、これって……」

澪もそれを見て一瞬息を飲む。

夕方の風が、屋上を吹き抜けてゆく。

「来るな」

フェンスの向こう側へ降りた男は、省吾と澪の姿に気付いて叫んだ。

「お、おまえ、どうする気だよ」

「ここから飛ぶよ」

「何でだよ」

「あんたには関係ないだろ」

省吾は澪を見つめた。

その通り俺たちは関係ないんだから、行くか。省吾はそう思ったが、澪は省吾を見つめた後、再びフェンスを越えた男を見る。

そして、植木の間に置かれた靴と携帯を見下ろすと

「この携帯は、何か意味があるの？」

男に訊いた。

「その携帯に、俺をイジメた連中のリストが入ってる。それで、あいつらは捕まる」

「そんなの判らないだろ？」

省吾が言った。

「最近はいじめや恐喝が原因で自殺したら、罪に問われるじゃないか」

「それは稀なケースだぞ。それに、直接お前を殺したわけじゃないんだし、未成年なんだから直ぐに出てくるさ」

「う、う、う、う……うるさい」

男は泣きそうな顔で叫んだ。

平凡な黒髪が風で靡いている平凡な顔立ちは自分より幼く見えるが、おそらく彼も高校生だろうと省吾は思った。

……面倒なもん、見ちゃったなあ。

「どうする？」

省吾は澪に小さく耳打ちした。

「とにかく、止めさせようよ」

「俺たちが？」

「だって、他にどうするのよ」

澪はそう言って男の方を向くと

「あなた、名前は？」

彼は狭い足場で向きを変えるので手がイッパイといった感じだった。

「おい、名前くらい教えろよ」

省吾が再び訊く。

「及川。及川幹久」

及川は完全に身体を外側へ向けると、首だけを二人に向けて言った。金網をがっちりと掴んだ手は、明らかに震えている。

「及川君は、何年生？」

「うるさいな」

「もう少しくらいお前のこと教えろよ。俺たちは高二だ。そんなにお前と変わらないだろ？」

省吾はやケクソで及川に話しかける。

「全然違うよ」

「な、何が違うんだよ」

「俺、彼女なんていたことないし、女と歩いた事だつてないよ。チャラチャラしたあんに、俺の気持ちは判らないよ」

及川は身体を震わせて叫ぶ。

彼なりに主張はしたいのだろう、声が二人に届くように顔だけはこちらへ向けていた。

しかし、今からしようとしている行為の理由としては主旨がずれていた。

「イジメが原因で死のうとしてる割には、俺たちの事羨んでるぞ」  
省吾は再び濡に耳打ちした。

低くなった西日に照らされた三人の影が、屋上に長く伸びていた。

### 【43】揺らぐ心

「お、及川君。あなただって、これから彼女くらいできるよ。今そこから飛んだら、それこそそれつきりなのよ」

澪は何とか及川の気持ちを落ち着かせようと、声をかける。

及川は何も応えなかった。ただ、屋上の風が彼の学生服の背中をたなびかせている。

不安が過つたのか、彼はフェンスにピタリと背を当てた。

西の空に夕陽が落ち始めると、空が緋色に輝き始めて辺りは暗くなってきた。

「及川。お前、病気になった事あるか？」

「どうしてそんな事訊くんだよ」

「お前、病気で死にそうになった事なんてないだろ。今までに、死にそうになった事なんてないだろ？」

「そんなのないよ。普通無いのが当たり前だ」

話している間にも、どんどん周囲は暮色に変わって、植木が黒い影の塊になっていた。

「病気で生きる為に、身体の一部を切り離さないといけない人だっているんだぞ」

省吾の言葉が、愛香の事だと澪はすぐに気づいた。

「そ、そんなの俺に関係ない」

「お前、何でも人の事は関係なくて、羨ましいだけなのか？ 誰かを羨むくせに、誰かの苦悩は関係ないのか？」

「どうしてそんな事言うんだよ。俺だって本当は死にたくなんないさ。でもしょうがないんだ。あいつらに思い知らせる為には、仕方ないんだ」

及川はそう言って、身体の向いている外側に顔を向けた。

陽は落ちかけて、辺りは暗くなっていた。ちょうど街路灯の光が三人を照らしている。

「お前、友達いないだろ」

省吾は息をつくと、少し低い声で言った。

及川は何故かそれに反応して、再び二人を振り返る。

「お前、自分の事ばかりだから、友達出来ないんだよ。だから、イジメの標的になるんだ。もつと他人に興味を持てよ。羨ましいとかじゃなくて、アイツは大変だとか、あの人は可哀想だとか、お前の周囲にお前より大変な人は本当にいないのか？ お前より苦悩している人はいないのか？」

省吾は言葉を発しながらフェンスに近づいていた。

「うるさい、そんな事はどうでもいいんだよ」

及川は省吾が目の前に来ていることに気付いていないのか、興奮してどうでもよくなったのか、そのまま話し続けた。

「俺は疲れたんだ」

「そんなんで、そこから飛ぶ勇氣はあるのか？」

「勇氣なんていらないよ。絶望感だけで自殺はできるんだ」

「じゃあ、どうしてそんなに震えてるんだ？」

「うるさい、うるさい！」

そう叫ぶと、及川がフェンスを掴んでいた手を離す。が、省吾はフェンスの隙間から左手を出して、彼の制服を掴んだ。急いでもう片方の手も添える。

上下に分かれて張られた金網は、真ん中に手を通せるほどの隙間があいているのだ。

服をガツチリ掴むと、彼は少しも前に踏み出せなかった。

及川は逆情したように

「離せええ」と叫んで、制服のボタンを外そうとしたが、今度は濡が手を差し出してズボンのウエストを掴む。

「お前、ズボンも脱いで飛び降りる根性あんのか？ 最悪のカッコウだぞ？ 滅茶苦茶格好悪い死に様だぞ」

省吾の言葉で及川は3つ目まで外した制服のボタンから手を放し、身体の力が抜けると、急に肩を震わして涙を流し始めた。

一度気を落ち着かせれば、死ぬのが怖くなるのが人間だ。

「とにかく一回こつち来いよ。とりあえずコーヒーでも飲もうぜ。死ぬのなんて、何時だってできるだろ」

省吾は彼の制服を掴んだまま言った。

「ね、そうしようよ、ね」

澪の言葉で及川はゆっくりと身体の向きを変えると、フェンスをよじ登ってこちらに降りてきた。

金網の隙間に慌てて突っ込んだ省吾の左手の甲が、浅く擦りむけて血が滲んでいた。

省吾が何気なく見た屋上の出入り口には、警備員が駆けつけている。

三人は気付かなかったが、屋上に顔を出した誰かがその光景を見て、警備を呼んだらしい。

「あたし、自殺しようとする人って、初めて見た」

駅まで歩く帰り道、暫くの沈黙の後澪が言った。

事情を警備に聞かれて少しの間拘束された後二人は解放されたが、及川は保護者を呼ばれている様子だった。

「俺だって初めて見たさ」

「びつくりしたね。あんな元気なのに、死にたいんだね」

澪の言葉に省吾はどう応えていいのか判らない。それでも、何か言わなければいけないような気がした。

「理由は、人それぞれって事だろ。ああいうのは心の問題だからな……」

省吾はそう言って、何となく澪の手を掴んだ。

冷たい手は、小さく握り返して来た。

\* \* \*

漚にとつての1週間は思いの外早くめぐつて来る。

もつとゆつくり時間が流れればいいのにと、金曜の夜は何時も思う。

彼女は土曜日の朝起きるのが怖い。

それでも省吾にはそんな気持ちを悟られないように、ずっと明るく過ごしている。

「お兄ちゃん、あたし……このまま眠ったらダメなのかな」

診療ベッドに横たわった漚は、機器の電源を入れる兄に向って言った。

「何を言ってるんだ、漚」

「あたし、何だか疲れちゃって……」

「生きたくても、生きられない人が五萬といるんだぞ。生きるチャンスがあるなら、それを精一杯試みる義務があるだろう」

「義務……じゃあ、あたしは義務で生きてるんだ」

漚がそんな事を言うのは初めてだった。

渉はそんな漚の精神状態を察した。

「そうじゃない。努力する義務があるって事さ。生きられるうちはね」

「その義務は何時まで続けなくちゃいけないの……」

「どうしたんだ……省吾ちゃんと喧嘩でもしたのか？」

渉は漚に優しく問い掛けた。

彼女は小さく首を横に振る。

「あたしは、ただ生きるだけで精一杯で、彼を満足させてあげているか判らない。でもシヨウちゃんはいっつも優しくしてくれる」

「好きな女に優しくするのは当たり前だろ」

「でも……」

漑は最近思う事があった。自分は本当に誰かと付き合う資格があるのだろうか。毎週土曜日は自宅療養で彼氏に会う事も出来ない。臨死と蘇生を繰り返す事で、魂が薄っぺらなものになっている気さえする。

誰かを支えたり支えられたり、そんな対等な付き合いが出来るのだろうか……

自分と付き合い続ける限り、省吾はきっと幸せになれないのではないだろうか。

しかし、漑は今日もそのまま意識が薄れて、1分20秒間の幻想へと旅立つ。

#### 【44】甘酸っぱい微笑み

小波に追い立てられたマリンブルーの風は、白い建物にぶつかって弾け飛ぶ。

日曜日の午後、日中の風もだいふ肌寒くなってコートやブルゾンを着込む姿が当たり前になった。

「ねえ、今度の連休何処か行きたいな」

ゆりかもめに乗ってお台場に来た省吾と漑は、比較的空いている船の科学館の白いカフェテラスで低い松林越しの海を眺める。

「連休って、来週末の？」

漑は風にたなびいて頬にかかる髪の毛を、指でそっと払い除けて頷いた。

「でも、土曜日挟むだろ？」

「いいよ、別に」

「別について……」

「少しくらい大丈夫よ」

省吾は戸惑いを隠せなかった。今まで土曜日に出かけた事など無い。それは、彼女が土曜日に治療をする事の絶対的必要性を意味していると思っていた。

それなのに、漑の方から何処かへ行きたいなんて、何か不自然さを覚える。

「お泊りでさ、何処か行こう。そんなに遠くなくてもシヨウちゃんと一緒に夜を過ごしてみたい」

風に吹かれながら低い太陽に照らされた漑の頬が白く反射して、省吾はそれに自分が照らされているような錯覚を感じた。

「漑がいいなら、俺はいいけど……でも他の曜日に……」

「じゃあ、決まりだね。何処行こうか。帰りに紀伊国屋でるぶとかみよう」

漑の明るい笑みは、白く陰って省吾の胸をくすぐる。何故そんな

思いになるのか判らなかつたが、きつと少しだけ澪の心が彼には見え  
たのかも知れない。

白く果てしない砂丘を漂うよな、さ迷える彼女の心が……

\* \* \*

「どうしたの？ 浮かない顔して」

病室のベッドで愛香が微笑んだ。

省吾は彼女の見舞いに来た。予定は無かつたが、何となく足が自然にこの病院のこの病室へ向いた。

ニットキャップを被る彼女の笑顔にも、もう慣れた。

「まだ、暫くかかるのか？」

「うん、もう暫くね。経過は順調だって。でも転移がないかまだ様子を見ないといけないし」

「て、転移？」

「ほら、脇の下とかリンパ腺が近いから転移もし易いらしくて……転移してたら、どうなるんだ……省吾には訊けなかつた。……そうか……」

省吾は無理に笑顔を作ると、窓の外に視線を向ける。

夕映えに浮かぶ街並が、黄昏色の陽炎のように霞んで見えた。

「どうしたの、今日は？」

愛香は省吾の横顔を覗き込むように問いかける。

二人はまるで、患者と見舞いが逆の立場のような表情だった。

「澪が、土曜日に出かけようって言っただ」

「治療は？」

愛香は土曜と聞いて直ぐにそう返した。

「解らない……平気だって……本人は」

「なら、平気なんじゃないの？」

「そうなのかな……」

「怖いのか？」

省吾は愛香の言葉に振り返る。

「彼女が全てになるのが怖いんじゃないの？」

「全て？」

「省吾は、いろんな楽しい事のひとつとして彼女と付き合ってるかもしれないけど、彼女はあなたと付き合うことが全てかもしれないのよ」

愛香の言葉が、省吾の心に重く押し掛かる。

今までそんな事は考えた事が無かった。

彼女が自分に対してどんな気持ちなのかは考えた事があっても、彼女自身が自分と付き合う事をどう考えているかなんて思っても見ない。

……自分と付き合うことが澪の全て？

彼女の気持ちをそんな重いものには感じたことが無かったし、普段の澪のはそんな素振りとは全くと言っていいほどなかったから。

しかし、見た目が全てじゃない事ぐらい省吾にも判っている。

「出なければいいじゃん。彼女が行きたいって言うんでしょ」

愛香はそう言って、手元のみかんをひとつ剥くと、半分を省吾に渡した。

「何かが起こっても、澪ちゃんは見悟してるんだわ」

「覚悟？」

愛香は、澪の事を全て話してしまおうか迷っていた。

しかし、自分の口から言うべきではないだろうと思った。言うべき時が来たら、きっと彼女が自分で言うだろう……

それは、真琴が愛香に対して気遣った気持ちと一緒にだった。

そんな日は近いのかもしれない。

澪が全てを省吾に打ち明ける日は、そう遠くない日に訪れると愛香は思った。

そんな不安と困惑した気持ちを悟られないように、彼に優しく微

笑んで、本当はあまり食べたくないみかんの欠片を口へ入れた。

## 【45】温泉宿

病院の出口で省吾は後ろから呼び止められた。

もちろんここは南澤医院。呼び止めた声の主が、聞き覚えのある男性だと省吾はすぐに気づいた。

「あ、渉さん」

「よかった、ちらつとキミの姿を見かけて……神崎さんのお見舞いかい？」

「え、ええ」

「彼女は順調だから、安心して」

「有難うございます……」

省吾はそう言っているのか判らないまま、言葉を発した。

「ちよつと時間あるかい？ コーヒーでもどう？」

省吾は渉に促されるまま、自販機のあるロビーへ歩いた。渉は缶コーヒーを二本買くと、ひとつを省吾に手渡す。

「喫茶店はもう終わってるから、こんなので悪いけど」

「いいえ、有難う御座います……」

省吾はそう言ってコーヒーを受け取る。

小さなベンチに二人は腰掛けた。

「週末滞と出かけるって？」

「いや、あの……」

「隠さなくていいよ。一応アイツの主治医として治療日の行動は把握しておかないと」

渉はそう言つて、穏やかに微笑む。

「どうなんでしょうか……？ 土曜を挟んで連れて歩いて大丈夫なんでしょうか？」

省吾は不安な表情を隠すことが出来なかった。

それは、相手が滞の兄というよりも、彼女の主治医だからだろう。渉は沈黙したまま静かにコーヒーを口にして、軽く息をつく。

「結論からいえば、NOだね」

彼はキツパリと言った。いかにも責任のこもった言い方で。

省吾は心の中で「やっぱり」と呟いた。

その声が聞こえたかのように、渉は続けた。

「今は週1の治療がギリギリなんだ。もう少ししたら、もっと間隔を詰める必要があるだろう……ただ、アイツが今の現状から抜け出したがっているのも事実だ。無理も無い……もう5年も治療を続けている。」

「渉は、いったいどんな治療を受けているんですか？」

渉は再び沈黙した。

通路の奥で、エレベーターの動く音が静かに響いていた。

「週末に泊まる所が決まったら、連絡くれるかい？」

彼は手に持ったコーヒーを飲み干すと

「それが、渉の秘密を教える条件だ」

困惑する省吾の耳には、ストレッチャーを押して歩く音が、通路の何処かから聞こえていた。

その週末、省吾は渉と一緒に箱根から伊豆を回る旅行へ出かけた。

紅のトンネルを抜けると、木洩れ日から飛び出た光の喝采が待ち受ける広場に、小さな東屋あずまやがポツリと在った。

光に溶けた枯葉の匂いは、風に揺られながら再び森の中へ消える。茜色に染まった山間の景色は完全に紅葉まったただ中で、それを観に来た観光客で何処も混み合っている。

省吾と渉はその群れから離れるように小さな小道を抜けた。

東屋から見渡す木々の間から芦ノ湖が微かに見えて、何処かで小川の流れる音が聞こえていた。

落ち葉の絨毯を踏みしめて再び小さな小道を下ると、芦ノ湖半に降りる。

誰にも会わないような道を通って二人は歩いた。落ち葉を踏む二人の足音と呼吸だけが、森の静寂に染み渡る。

省吾は澪の手をずっと握っていた。

彼女が何処かへ行ってしまうないように。

伊豆のバナナ園の近くにある風流な旅館に、省吾と澪の二人は泊まる事になっていた。

宿帳に記入する時、澪はさりげなく苗字に北原と書いた。

省吾はそれを見て、胸の中に熱い小石が注がれたような気持ちになる。

「なんでだよ」

小さく澪に耳打ちする。

「いいじゃん」

澪はそう言つて悪戯な笑みを浮かべてボールペンを置くと、帳面をカウンターに戻す。

小綺麗な着物を着た受付係りの娘は、特にその帳面を眺めるでもなく閉じると

「夕方、お荷物が届いていますよ」

「ああ、後で部屋に」

省吾はそう言つてさりげなく笑みを返す。

「かしこまりました。それではお部屋にご案内いたします」

そう言つて、受付の女性は案内係りの女中を呼んだ。

木々の生い茂る大きな敷地に小さな建物が幾つも散りばめられたその旅館は、受付が済むと一たん建物を出る。

「ねえ、何の荷物？」

外に出た時、漣が訊いた。

「ああ、面倒だから着替え送った」

省吾はさりとて歩き出す。

じゃあ省吾のカバンには何が入っているのだろうと思いつながらも、漣もそれ以上訊きはしなかった。

木立の中を少し歩いて

「ここが露天風呂の入りにあります」

女中がそう言つて歩みを緩めると、再び歩き出す。

少し行つて黒い日本家屋の建物が在る。建物に入ると、その中には上下あわせて6つの部屋が在った。

「こちらです」

女中について暗い階段を上がる。

少し傾斜のキツイ板の間の階段と白熱灯で照らされたそこは、いかにも昭和の匂いがした。

階段を上りきつて再び「こちらです」

女中がそう言つて戸を開けた部屋には『天女の間』と記されていた。

隣の部屋は『仙人の間』

省吾は何だか判らないが、隣の方がよかつたなと思った。

漣が天女のように空へ上がつて消えてしまいそうな気がして、胸の内に僅かな不安というか、嫌な予感が湧き出て来たから。

浴衣の場所などの説明をして、女中は部屋を出て行った。

窓の外には、紅の木々と茜色の空が見えた。緋色に変わり始めた頭上にはもう星の輝きが見える。

「露天風呂つて、入ったことある？」

漣が窓から身を乗り出して、風呂の在る方角を見て言つた。

「いや、ないよ」

「混浴かな？」

「どうか、そう言えば何も言つてなかったから、別じゃない」

「なあんだ、そうか。混浴とかつて、入つてみたかつたな」

「でもさ、他の男連中にも見られるんだぜ」

省吾は窓に近づいて漣に並ぶと、一緒に外を眺めた。

「そうか、そうだね」

漣はそう言って笑うと「そしたらシヨウちゃんどうする?」

「どうするって?」

「あたしを隠す?」

「隠すって、何処にだよ」

「別に、何でもない」

漣は自分の中だけで話を終わらせると、部屋の中を歩き回る。

「じゃあ、ここで一緒に入ろうか」

漣が風呂場の入り口を開けて笑った。

大きなガラス張りの天井がついた小さな個室の温泉が各部屋に付いているのだ。

「いや……どうするかな」

省吾は何時もより積極的な彼女にちょっとテレながら、どう返していいのか判らず苦笑した。

## 【46】足跡

『この跡形は私が生き続ける限り、この胸に留めておこう。いつ見上げて、私の中にお前の跡形がはつきりと見えるはずだ』

月はそう言つて、優しい輝きを見せた……

ムーンストーンに刻まれた跡形は永遠だ。

月面に残された足跡は、何十年、何百年経つても消える事は無いのだという……

漑は原因不明の血液の病気に侵されていた。血中成分濃度のバランスが異常になるのだ。

現代医療では打つ手は無かった。

かろうじてクスリを使つて誤魔化す事しか出来ない。毒素ではないので透析をしても意味はない。本人の自覚症状はないが、倒れたら一気に昏睡状態に陥るだろう。

綱渡りのな生活を始めて半年、漑が中学一年生の夏の出来事だった。

彼女はムリを言つて連れて行つてもらつた千葉の海で溺れる事故に会う。救助された時は一時的に心肺停止を起こしており、兄の涉が持っていた携帯用の除細動器で危うく命を取りとめた。

しかし、それから漑の身体に異変が起こった。

心停止した翌日には血中成分の異常がほぼ消えたのだ。それからしばらく漑の身体は完全な正常状態を保った。

しかし、2週間すると再び血中成分に異常が起き始めた。白血球も赤血球も異常に増え、その代わりに血小板の数が減る。増えすぎ

た白血球は善玉細胞を食べようとする。体内のバランスが瞬く間に取れなくなる。

仕方なく以前投与していた薬を使うが効き目が少なかった。

このままでは澪が昏睡状態になる。

まだ医大を出たばかりだった兄の渉は非常手段を取った。確信はあったが医院長である父親が許可を出すはずも無い。科学的検証による根拠が足りないのだ。

ある深夜、こっそりと病院の手術室へ澪を運んだ。

そして、電気ショックで心停止させると、再び蘇生処置を施す。

二分以内に蘇生させれば問題ないだろう。

彼女は蘇えり、血中成分は再び安定した。

しかし、2週間もすると再び血液成分の異常が出始めた。

そしてまた、渉は澪を臨死させる。

デッドラインを超えた治療が、彼女にどんな影響を及ぼすのかは定かではない。

そのサイクルは次第に短くなって、現状では一週間しか持たないのだ。

木の葉を揺らす秋風の音が、木々に木霊する。

サラサラと落ち葉を揺らして小波のような微かな音が夜の闇に響き渡り、まるでその音を妨げないように澪は息を殺すような官能の吐息を吐き続ける。

旧家のような黒い梁と柱で出来た部屋の内装でも、暖房設備は完璧だった。

二人は入浴の後、そのままの姿で時を過ごした。

夜も更け、星影にフクロウの囁きが聞こえる頃、省吾の腕に澪は頭を擡げる。

何処かウトウトしているようにも見えるが、省吾には彼女の微かな変化を読み取る事が出来た。

ほぼ確実に起こる事を覚悟していたその症状は、涉に聞いて認識していた。

それがとうとう始まったのだ。

自分にはそれを防ぐ事は出来ない。今の省吾には、澪を救う事は出来ないのだ。

「大丈夫か？」

「うん、何だか頭の奥の方で眠気が広がるの」

昏睡に落ちそうになっているのだと、省吾は気づいていた。

それでも澪は幸せそうな笑みを浮かべていた。

うつろいだ彼女の瞳が閉じたのを見て、省吾は起き上がって澪を膝に抱えるように抱く。

すると、彼女は再び目を開けた。

とても弱く、その中に輝く光は今にも消え入りそうだ。

「澪？」

省吾の声に澪は反応して、声を出した。

「あたし、知ってたんだ。ショウちゃんと出逢う事」

「えっ？ どういう事？」

「臨死を繰り返しているうちに、あたし時々予知夢を見るの」

「予知夢？」

「そう……ショウちゃんの姿ははつきり判らなかったけど、あたしを助ける誰かが現れるのは知ってた」

「でも、俺は結局澪を救えない。助けられないよ」

澪は首を横に振ると「充分救ってくれたわ」

澪の瞳が薄っすらと陰りを見せた。

知らない人が見たら、ただ眠そうにウトウトしているように見える。

しかし、そのうつつな仕草は、明らかに世界を隔てた眠りへの予兆なのだ。

それでも省吾は、自分が思いの外冷静でいる事に驚いていた。

来たるべき時が来る事は知っていた。しかし、これほど冷静に彼女を受け入れられるとは思っていなかった。

自分に出来る事は、彼女の願いを叶えるだけ……省吾はそう割り切っていたのかもしれない。

「俺も、知ってたよ。漣の治療の事」

「そう……」

漣は、省吾がそれを何時何処で、誰に聞いたかは訊かなかった。思考力が低下しているのかもしれない。

彼女は天井から吊るされた照明に視線を移す。

「人はこの世に生きた足跡を何処かに残したいと思うものなんだって」

「足跡？」

「それが、仕事だったり自分の子供だったり……芸術だったり……」

漣はひとつ息をついて省吾を真っ直ぐ見上げると

「あたしはシヨウちゃんの上に足跡を残したから、もういいよね」

「そんな……そんな事無い。ちつともよくないよ」

「あたしは中学の時に海で溺れて一度死んでるわ。いいえ、今まで何度死んだかも自分でも判らない。誰かの心に足跡を刻めるなんて思わなかった」

部屋の床の間に置かれた時計の刻む微かな音が、静寂の中に沁みるように響いていた。

「あたし、もう臨死にたくない。ゆっくり眠らせて」

漣はそう言つて、最後の力を振り絞るように顔を近づけて省吾にキスをした。それは触れるだけの柔らかな、甘い口づけ。

「シヨウちゃんを追いかける女の子がいるわ。追いつけないけどずっと追いかけている娘がいるの。たまには振り返ってあげて」

漣はそう言つて省吾の腕に頭を着けた。

「あたしは、もういいから……」

彼の腕に頭を擡げると眠るように瞳を閉じて、漣は

「星が綺麗だね」

微笑みの中に、静かなブレスをひとつ。

省吾が振り返った窓の外には、満天の星が輝いて森を照らしていた。

『ありがとう…』省吾には確かに聞こえた。

しかし次の瞬間、彼女の呼吸はもう聞こえない。

星屑さえも息を潜める静寂の中で、省吾の心の中に消える事の無い彼女の足跡だけがくつきりと残っていた。

**【46】足跡（後書き）**

次回最終話予定です。

## 【最終話】プレス

「いいか、使い方は簡単だ。全てオートで検知してコンピュータが除細動をする。君はモニターの指示に従って放電のスイッチを入れるだけだ」

「こんな小さなもので、彼女の心臓は動きますか？」

「大丈夫だ。心臓が停まったら、1分20秒以内に使いえ。4分を過ぎたら諦める」

「諦めるって……？」

「その時は仕方ない。アイツが望む通りになるだけだ」

……………

……………

省吾は涉に教えられた通り、旅館に届いた荷物の中から除細動機を取り出して、澪の胸に電極を当てた。

……… 諦めてたまるか。何度でもボタンを押してやる。

二度目の放電で彼女は呼吸を取り戻した。

しかし自発呼吸はあるものの、昏睡状態は続いていた。自然に心停止した彼女の身体は、手遅れの一步手前だったのだ。

省吾が携帯電話で涉に連絡すると、彼は既に近くまで来ていた。敷地の落ち葉を巻き上げる勢いで、彼の白いアウディは旅館に滑り込んで来た。

直ぐに最寄の病院で処置を受けた澪は一命を取り留める。

しかし治療なんてほとんど必要なかった。臨死したのだから、自然に血中濃度は正常値へ近づいて容態は回復する。

その後、自分の病院へ彼女は搬送された。

\* \* \*

暮秋の風が青い虚空を吹き荒み、凍えそうな心に染み渡る。

やたら大きなロビーには外国人も多くて、時折慌しく動く人波が喧騒の風を巻き起こすと、その度にこころがざわめいた。

大きな窓に映るボーイングの機影は、陽差を受けて反射光を白く放っている。

飛行場なんて初めてだった。

省吾は雑踏から離れるようにロビーを出ると屋上に上がって、滑走路に移動を始めた大きな機体を眺める。

.....

.....

「零をアメリカに連れて行く」

あの日、旅館に迎えに来た渉は、省吾に向ってそう言った。

「ミシガン州の湖の近くに脳の研究施設が在る。零の病気は内臓じゃない。脳に原因があるんだ。だから、そこで治療をさせる」

「脳……ですか？」

「あそこなら、意識を保ったまま、臨死と同じ刺激を脳に与える事ができるらしい」

「直るんですか？」

省吾はそれを訊くのが怖かった。しかし、訊いておかなければいけないと思った。

「直して見せるさ」

渉は胸を張ってそう言った。

.....

.....

省吾は飛行機に搭乗する前の澪に会った。

今まで通りの清楚で穏やかな笑顔を彼女は省吾に見せた。

「じゃあ、行つてきます」

「ああ、行つて来いよ」

お互いにさよならは言わなかった。

しかし、「待っていて」とも「待ってるよ」とも言わなかった。

そんな事はお互い判らない。それは、二人共知っている。

「縁があつたら、また会おうね」

澪は搭乗ゲートに向う直前に、明るくそう言つて笑った。

初めて彼女を見たあの日のように、切なくも麗らかな笑みだった。

「ああ、もちろん」

省吾は笑つて左手を上げると、彼女の後姿を見送った。

風は真冬のように冷たく省吾の身体を吹き抜けた。

ダッフルコートの襟元を片手で掴んで肩をすくめる。

ボーイングの異常に大きな機体が助走を始めて車輪が滑走路を蹴ると、四基のジェットノズルの後方には陽炎が追いかけて背景を臙に揺らす。

轟音が轟いて、省吾の視線の先で機体はどんどん小さくなっていくと、身体に吹く冷たい風が益々冷涼に感じる。

省吾は空を仰ぎながら大きく息をついた。胸の奥に氷の空洞みたいなものを感じて、それを覆い隠す何かに少しだけ息が苦しくなる。彼は思わずコートの襟元を両手できつく締めて、無理やり唾を飲み込んだ。

ふと背中に人の気配を感じて振り返ると、そこには愛香が立っている。

「行っちゃったね」

「ああ。お前、身体の具合はいいのか？」

「うん、かなりいいよ」

彼女はオレンジとピンクのボーダー柄のニットキャップに、軽く手を当てる。

直射日光が彼女の頬を白く照らしていた。真っ赤なPコートは、久しぶりに見た彼女らしい姿だった。

「髪、けっこう伸びてきた？」

省吾は、ニットキャップの襟足から僅かに覗く黒い髪の毛を見て言った。

胸に視線を下げないように、意識を上を持っていったのかもしれない。

「うん、超ベリーショートってカンジ」

愛香は襟足を指で摩って小さく笑みを浮かべると、直ぐに真顔になる。

「これでよかたの？」

「これが最良だろ。このまま今の治療を続けるのは酷だよ。向こうへ行けば、とりあえず心停止させずに、同じ信号を脳へ送る事ができるらしい」

「そう……」

「身体への負担も無くなる」

「そうだね……」

愛香は、上空に浮かぶ微かな機影に視線を向けると、精一杯の明るさで

「また会えるといいね」

「どうか……」

省吾は静かに笑みを浮かべると、手すりに身体を預ける。

愛香は、彼の言葉は聞こえない振りをした。その言葉の意味を訊き返してはいけないような気がした。

青い空がこんなに淋しく感じたのは二度目だった。

一度目は自分がオペをする朝。

あの時も、抜けるような青い空を恨めしく思った。

意味も無く、こんな青い空がなんの役にたつのかと考えたりした。

白い雲に何の意味が在るだろうと思った。

でもきつと、この青い空も白い雲も、人が元気を取り戻す為には必要なのだと、今は少しだけ感じる事が出来る。

「寒いだろ？ 下へ降りよう」

省吾はそういつて、左手を差し出す。

愛香は彼の手に掴まると

「うわ、手が冷たい」

照れ隠しの言葉だった。

「愛香の方が冷たいよ」

「そ、そうかな……」

彼女は手のひらから指先までの全てを使つて、省吾の皮膚の感触を確かめるように静かに握り返した。

省吾は彼女の手を掴んだまま、その手を自分のコートのポケットへ入れて歩き出す。

「俺がここにいて、よく判ったな」

「フフ、あたしにも特殊な能力が在るのかもね」

「マジで？」

「ウソに決まってるじゃん。ロビーでショウが屋上へ行くのを見かけたんだよ」

冬の足音が聞こえそうな寒い日だった。

乾いた風が吹き抜ける蒼穹に、二人の呼吸が静かに、ちよっぴり暖かい音を刻んでいた。

END



## 【最終話】プレス（後書き）

タイトルの【プレス】は、登場人物達それぞれの生きる証を意味しています。呼吸するという事は、生きている証という事で。

恋愛小説にも関わらず、何時も恋愛以外の何かに苦悩する姿を描いてしまいます。

今回はそれぞれの病状についてはあえて詳しく記載しませんでした。途中更新が不規則になったにも関わらず最後まで読んでいただいた方、つまみ読みしていただいた方に大変感謝いたします。

有難うございました。

tokujirou

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6253c/>

---

ブレス【breath】

2010年10月8日13時04分発行